
秋雨

アレックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋雨

【Nコード】

N80310

【作者名】

アレックス

【あらすじ】

大手食品S会社に勤める林（中国上海出身）が英会話教室で日本人女性奈々子に出会い、二人がすぐに意気投合し恋に落ちました。しかし、文化と習慣の違い、そして現在進行形の悪化した日中関係が二人の愛に暗雲をもたらし、結局、試練に耐えられず別れることになりました。その後、林は夏美という日本人女性と結婚しました。8年後、幸せに暮した林と独身の奈々子が再会することになり、運命がもう一度彼らに試練を与えました。

登場人物（前書き）

異国の愛に興味があるでしょうか。三次元の現実世界の他に「文化」という次元が存在します。異国での生活する者として、この第四の次元にいつも戸惑い、振り回されていたと感じます。しかし、振り返って見れば無意識のうちにどっぷりと「異文化」に浸され、「原文化」と「異文化」の境界線はせわしい毎日に綺麗に擦り切れました。アイデンティティを大事にするという贅沢は私には出来ません。愛する者の前に私は選択の余地がないからです。

私は中国上海出身の中国人、日本に来たのは大昔です。現在、徳島在住。昔から小説書くのが趣味で、はじめて日本語で「秋雨」小説を書いたのは是非ご覧下さい。拙い日本語で間違っているところがあると思いますが、ご勘弁を。なお、この小説は私自身のサイトも載せています。（<http://alexlin.web.fc2.com/>）

登場人物

主人公：林明蚩 リンミョーケイ 林君、アキ、ミン

酒本奈々子 サカモトナナコ ナナ 林君の元恋人

埜々村夏美 ノノムラナツミ 林君の妻

明美 アケミ 林の長女

蚩翔 ケイト 林の長男

林明雅 リンミョーヤ 林の姉

肖東 ショウトウ 林の甥

林岳良 リンガクリョウ 林の父

肖継玲 ショウコウレイ 林の母

酒本 貴子 奈々子の母親

祐子 奈々子の親友

王 敏倩 林の中国人同僚

伊藤 隆 営業3課の課長、林の上司

加藤 元之 京都工場研究課 林の先輩

榎本 忠司 京都工場調達部 林の先輩

佐々木 S社の常務

佐野 S社中国総括部部长

王克剛 張家港市A社の総経理

佐津川 美里 合コンで知り合った看護婦

プロローグ

2009年10月末 京都府向日市

「夏美、子供達は？」パソコンを弄りながら林が台所にいる妻の夏美に聞いた。

「もう寝たよ」夏美が答えた。

外は冷たい雨が降っていた。林は椅子から立ち、寝室に向かった。5歳の長女^{アケミ}明美と4歳の長男^{ケント}蚩翔が気持ちよく寝ていた。林は子供達に掛け布団を掛けてリビングに戻った。

「子供達もう寝たから、これからどうする？」林が夏美に聞いた。「どうするかな、夕飯は外でも食べましょうか？」夏美が答えながら皿を洗っていた。

「そうしよう」林がアクビしながら言った。

今日は日曜日だった。先週から枚方パークに連れていくのを子供達に約束をした。あいにく雨で、子供達は午前中家で騒いでいて、夏美が誤魔化しながら家で昼ご飯を食べてもらった。ずっと騒いだせいか、ご飯を食べた後、疲れて寝ちゃった。

林のフルネームは林^{リン}明^{ミョウ}蚩^{ケイ}、中国の上海出身、1992年に日本に留学してきてもうあれこれ17年も経った。最初の2年間、大阪の日本語学校で日本語を勉強し、関西のある地方国立大学の経済学部に進学した。学部を卒業した後、関西のK大の経済学の大学院に進学した。一時期学者を目指したが、金銭などの問題で博士課程への進学を諦め、修士を卒業した後、教授の紹介で大手の食品メーカーS社に就職した。

夏美は京都の外大出身で、林と結婚する前、S社の関連会社に勤めていた。上司の紹介で林と知り合い、2003年に林と結婚し、同年に長女明美を生み、2004年に長男蚩翔をもうけた。

2004年の年末に、向日市に一戸建ての新居を25年ローンで

買った。夫婦の関係は円満そのものだった。夏美は元々お嬢様の性格だったが、二人の子供を産んだ後、かなり成長するようになった。林は一人生活が長かったおかげで、料理、洗濯、掃除なんでもこなし、暇があれば積極的に家事を手伝ったりしていた。毎日永遠に終わらない家事と最近体重が5キロ増えた以外、夏美はこれといった不満がほとんどなかった。

「私も疲れたからちよつと寝させてね」夏美が家事を一段落した後、ネットサーフィンしていた林に言って、寝室に向かった。

「おつ」林は特に気にしてなかった。

外は相変わらず小雨を降っていて、風も強くなった。夜までやむ気配はない。

林がふつと気づいた時、家の中はものすごく静かになり、聞こえるのがパラパラのかすかな雨音だけだった。林も特にやることもなく何気なしに窓外の木を見ていた。木の上に名の知らない二匹の子鳥が跳びながら鳴っていて、最近まで青々と繁っていた木の葉っぱもずいぶん黄色くなり、強くなった風の中、今も落ちそうになっている。林は一瞬寒気を感じ、暖かいコーヒーを入れて、ソファにあったコートを羽織り、机の中に普段めったに吸わないタバコを出して火をつけた。上海に帰省するときに友達に勧められたディック・カウボーイディック・カウボーイの「有多少愛可以重来（どれぐらいの愛がやり直せるか）」をCDプレーヤーに入れ、音楽を聴きながらゆらゆらと上げるタバコの煙の中に瞑想にふけていた。

第1章 二人の出会い

2000年秋 京都市山科区

2000年は林がS社に就職した年だった。三ヶ月の新入社員研修が終わった後、林は京都工場に研究開発部に配属されていた。元々文系出身の林は水質調査やら酵母培養やら全く知らなかった。仕事は資本提携のある中国Y社との日常連絡と通訳だった。聞こえはよいが、実際やるのが雑務ばかり、所属の研究開発部は前の年から新商品の開発で残業の連続で、新入社員の林も当然の事に毎日残業続きだった。林の人事が中国市場を開拓するためだと誰も知っていて、林自身もこのことをよく理解し、毎日可もなく不可もなく雑務をこなしていた。平日ほぼ毎日JRの終電時間まで残業し、土曜出勤は当たり前だった。ちょうど入社して半年した頃、新製品のプロジェクトも終わり、年明けに輸出の営業部門に転属するのも決まった。

この半年、平日毎日の残業と土曜出勤、日曜になっても昼まで寝て、掃除洗濯などをしたら一週間の生活が終わった。給料に残業代、さらに初めてボーナスを含めて知らないうちに銀行口座に100万円ぐらいの貯金ができた。やっとプロジェクトが終わり、定時で帰宅できるようになった。

林は突如出てきた時間と金銭的な余裕の前に多少戸惑い、将来のために何かしようと思っと思っていて、英会話教室を通うのが自然の答えだった。山科駅近くに賃貸マンションを借りていたこともあって、駅の近くの英会話教室にしようと考えていた。9月ある日の夕方、仕事終わりの林が駅前留学のN社を訪ねた。受付の女性の巧みな営業トークの前に林は為す術もなく、その場で半年の授業料を払った。N社を出た際、もうちょっと何軒か回って比べたかった、と林は多少後悔していたが、もう選択の余地はなかった。授業は10月から6ヶ月、毎週水曜と土曜の夜7時半から8時半までナイテ

イブな外国人教師が教えてくれる英会話だった。

1 - 1 英会話教室 其の1

10月4日水曜日は最初の授業の日で、林は今もその日のことを鮮明に覚えていた。秋晴れの日で、昼はちよつと暑かった。林は高校卒業した後、親戚の叔父さんの経営する小さい貿易会社で3年間働いていた期間を除いて、日本に留学してからは8年間も学校をやっていった。人生のほとんどの時間が学校で過ごした林にとっては授業を受けるのがそれほど珍しいことではなかったが、理由が分らないけど、多少興奮気味だった。6時前に仕事を片付け退社し、いつもの古びた山科の駅ホームを降り、駅前の牛井屋さんで牛丼一杯を食べた。英会話教室についた時、7時ちよつと過ぎたところで前のクラスが終わったばかりで生徒と外国人の先生がまだ話していた。

林は静かに教室の後ろの席に座った。教室は非常に狭く、机が学校にあるやつではなく丸い小さなテーブルで、真つ白の壁に真つ白のホワイトボード、テーブルと椅子も白色だった。7時15分ぐらいになると、先生が来られ、長身の金髪の男の先生だった。

「Good evening」金髪先生が元気よく挨拶した。教室の中に林のほかに、女の子が4人いった。元々知り合いだったか、二人ずつ一つのテーブルに座っていた。

「My name is Andre, Hello everybody」金髪先生が相変わらず元気よく自己紹介し、みんなに自己紹介を要求された。5人が慣れない英語で短い自己紹介した。ちよつとAndre先生がこれから授業の進め方を説明しようとしたとき、教室のドアがノックされ、一人の女性が入ってきて、申し訳ない顔をして、軽くお辞儀をしながら林の隣の空いていたテーブルの椅子に座った。「7時38分」、林が無意識的に時計を確認した。

女性が明らかに走ってきた。額と鼻の先に少し汗がかき、ハアハ

アした息を必死に我慢していた。女性が席に着くと同時に、きちんと畳んだハンカチを出して鼻に当て汗を吸い取った。

「What your name?」Andre 先生が女性のコンディションを考慮せず質問した。

「My name is nanako sakamoto.」戸惑いながら女性が小声で返事した。林は全く聞き取れなかった。

「Welcome!」Andre 先生が林のテーブルの椅子を指しながら長い英文を話した。女性が英文の意味をほとんど理解できず、おそらく席の移動を要求されたではないかと戸惑いながら顔に紅葉を散らして立った。おそらく席の移動を強いられた理由は毎回必ず会話が必要ではないかと林は思った。五人の生徒の視線がすべて女性に集めた。身長がどっちかというと低い方で、普通より高いハイヒールを履で、ベストとスカートは紺色に統一され、長袖のブラウスは淡ピンク色、膝までの肌色のストッキングをはき、ショートストレートの髪の毛は綺麗に揃っていた。典型的なOLだった。女性が軽く一回お辞儀して林の隣の席に座り、林も座りながらお返しのお辞儀をして女性に向かってにつこりと笑った。恥ずかしいせいか、女性が林に直視できず俯いて座っていた。「かわいいな」と林は内心思っていた。

丸顔にクリクリした目、高くない鼻と小さめの口は顔に落ち着きをもたらしした。カラーのコンタクトをしていただろうか、目が異常に輝いていた。肌色が白いうより血行のよい薄ピンク色だった。何より林を落着かせないのが彼女の匂いだった。ワキガや生理臭ではなく、化粧品香りか、あるいは体から出たフェロモンの匂いか分らないけど、林は女性の体から発した匂いに本能的に惹かれていた。呼吸するたび、女性の匂いが林の脳神経を刺激し、授業中何度も女性を盗み見していた。

胸元にパッジが裏返しにして付けられ、「酒本奈々子」と漢字で書いてあった。紺色の小さなベストが完全に体にフィットして、ちよっと大きなブラウスの襟がベストの上に横たえていた。開かれて

襟から女性の真っ白肌がはつきり見え、呼吸するたび、女性の鎖骨がうごめき、横から見た女性の上半身がかなり薄く感じ、胸も小さくて、フィットしたベストの下で強調する様子は全くない。首が髪の毛にかくされ、時々真っ白な一部分が見える。細い手の指が身長に比例せずかなり長く、指輪などは一つも付けておらず、その色が際立って白さだけが目立っている。長袖のブラウスが腕全体を隠して手首しかみえないが、普通の基準から見れば女性の体毛が明らかに濃く、細くて長い黒い体毛が真っ白な肌に対照され、余計に黒く感じてしまう。

林の盗み見を気にしていたか、それとも林のことを気にしているかわからないけど、奈々子も何度か林のことを見ていた。ダーティグレーのズボンに白いシャツ、地味柄のブルーのネクタイにバーバリーのマークがはつきり見える。奈々子は関西の有名私立の経営学部を卒業した後、中堅のN証券に勤め、現在法人営業を担当している。職業からの感で目の前の男性が大手のサラリーマンではないかと奈々子は内心思った。自分のことを非常に興味津々で観察していることも奈々子も感じていた。

Andre先生の大きな声が教室中に響き、他の二組の女性達の笑い声が時々伝わってくる。林の頭の中では奈々子の匂いに完全に占領され、上の空で授業を聞き流していた。授業が半分過ぎたところ、同席の二人が英語で自由会話するようにAndre先生が指示した。

林は体を奈々子に向けて軽くお辞儀して言った、「よろしくお願いします」。

「よろしくお願いします」奈々子は本能的に返事した。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。

exlin.web.fc2.com/

<http://al>

1 - 2 英会話教室 其の2

「What is your name?」と林は質問した。

「My name is Nanako Sakamoto」と日本人のカタカナ発音を混じりながら小声で返事した。

「What is your name?」と同じ質問が今度奈々子は発した。

「My name is Lin Ming Ying」と林は答えた。林は奈々子の戸惑いを予測していたため、「I'm a Chinese, from Shanghai China」と付け加えた。奈々子が一瞬首を傾げた。目の前の男性が日本人ではなく外国人だと夢にも思わなかった。

「I live in Japan for a long time. I work for a major Japanese food company.」林は奈々子の戸惑いを見てさらに付け加えた。「major」と「Japanese」の間にわざと間を空け、さりげなくアピールした。

奈々子が林のアピールを理解したように、ニコリと笑い、

「I work for a securities company.」と返事した。

多少慣れてきただろうか、奈々子の声が先より大きくなってきた。奈々子の匂いが相変わらず林を刺激していた。林は一回背筋を伸ばして姿勢を立て直し、愛想笑いで返したが、足の方が不自然にもぞもぞと動いていた。ちょうどそのとき、二人の視線が遇った。二人ともすぐに神経質的に相手の視線から目をそらした。「プツ」と奈々子が口元を抑えながら小声で笑った。奈々子は林の不自然の動作を見てどうしても笑いこらえられなかった。林は笑い声の意味を完全に理解していた。大きく深呼吸して体を何とか落ち着かせようとした。

「Why did you laugh?」なぜか林が理由を知りながらわざと聞いてしまった。質問を発した後、林は後悔していた。

「For……」と奈々子の答えがとまっていた。「林のぎこちない動作だから」ってもちろん言うわけはいかないから、失礼しないように頭をフル回転して言葉を探していたが、適切な答えを見つかることができなかった。

林は自分の愚かな質問にすぐ察知し、直ちに別の質問をして話題を変えた。

「Was you late because of your working overtime?」（残業があつたから遅刻しただろうか?）

「Yes, I did.」奈々子は愉快に答え、林の気配りに胸を下ろし、彼と一緒になら英会話がやっていけそうな感じがした。

林は質問をやめ、奈々子から質問されるのを待っていた。

ちよつと長めの間をあけてから、「What kind of transport did you come to school?」発音が間違わないように一単語一単語ゆつくりと質問した。「I came to school by train.」林は直ちに答えた。

ちよつどそのとき、Andre先生が林のテーブルに来られ、英語で話しを掛けた。林と奈々子は必死になつて先生の英語を理解しようとしていた。

英会話に集中したせい、あつという間に終わる時間になった。英語で簡単な挨拶した後、「See you Saturday!」とAndre先生が大きな声で挨拶した。

林は本能的に奈々子と話したがっているから、彼女に合わせて鞆などをゆつくりと整理し、二人前後にして教室を後にした。

「酒本さんはお近くですか?」林は奈々子に話をかけた。

「ええ、歩いて5分のところに実家があります。今日大変お世話

になりました」奈々子は礼儀よく答えた。

「こちらこそお世話になりました。僕も近くに一人暮らししています」林はゆっくり返事した。

「話が変わりますが、酒本さんの英会話がとても上手ですね」林はどうしても目の前の女性を褒めたがっていた。いきなり綺麗とか美人とか褒めるとあまりにも失礼なので、唐突に奈々子の英会話を褒めた。

奈々子はちょっと嬉しそうに笑って、「そうですか、林さんの方がよほどうまいじゃないですか。発音が綺麗で本当に羨ましい限りです」義理で褒め返すことよりも奈々子は本当にそう思っていた。「お茶でもいかがですか」と林は奈々子を誘いたかったが、軽く思われたくないから、口先まで出かかった言葉をのみ込んでしまった。

「そういうことはないですよ」と林は謙虚な態度をわざとみせた。「林さんの日本語はうまいですね」奈々子は林を褒め続けた。

「日本には8年間もいたので、うまくなるのが当たり前です。英語は十何年も勉強したけど、ほとんど使い物にはなりません」林は相変わらず低姿勢だった。

話している内に、二人が三条通外環の交差点に付いた。

「酒本さんはどの方向ですか？」

「薬大の方向です。すぐですよ」市内の方向を指しながら話した。「そうか。僕は三条通を渡ったところです。近いですね」

「それでは、お疲れ様です」

「お疲れ様です。また、土曜日です。」

林は笑いながら軽くお辞儀をした。奈々子も同じように愛嬌よくにつこりと笑ってお辞儀を返した。

二人が別れた。

さすがに10月になったから、林は夜の風を少し肌寒く感じ、ずっと手で持っていた背広を着て、自分のアパートに向かった。奈々

子に一目惚れにしたじゃないかと林は一瞬思った。「そんな馬鹿な、この俺が一目惚れなんかありえないよ」と林は独り言を言った。

時間が九時前になって、道に歩いている人はほとんどいなく、肌寒い風に吹かれて余計寂しく感じられる。木の葉っぱが半分ぐらい黄色くなって、風の中ゆらゆらしている。林はコンビニを寄り、お弁当とサラダと缶ビール一本を買ってアパートに帰った。

部屋に入って缶ビールを開け、テレビをつけた。特に見る番組もなく、缶ビールを2、3口飲んでシャワールームに入った。シャワーを浴び、お弁当とサラダを食べ終わったとき、すでに十時半になった。翌日の仕事の準備をして、林はベッドに付いた。

林は帰ってから、奈々子のことをほとんど考えなく、枕に付くと奈々子のことを思い出した。「かわいい子な」と思った瞬間、「こんなはずはないよ」と脳が勝手に威張って別のことを考えるようになった。そうしているうちに、林は眠りについた。

林は眠ってから何時間経ったかが分からないけど、急に目が覚めた。怖い夢を見た。蛇のような妖精の出した魔力的な香りに惹かれて林が山の洞窟に入った夢だった。真っ暗の洞窟に入った途端、怖く感じて目が覚めた。

「こわあ」と林は独り言を言った。

林は夢のことをあまり深く考えず、再び目を閉じて寝た。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。

<http://alexlin.web.fc2.com/>

1 - 3 合コン 其の1

この一週間ちょうど中国の国慶節に当たり、相手の中国企業が連休だったので、仕事らしい仕事が全くなかった。平日残業全くなく、7時までは家に帰れるようになった。金曜日の夕方五時くらいところ、会社の先輩の加藤元之が林の所に来た。

「今夜予定ある」加藤が言った。

「特にないですよ」林が答えた。

「ちょうどいい、合コンに行かない？」

「合コンですか、行ったことないです」

「総務のマー君が急に東京出張になって、一人足りなくなっただ。林も社会勉強しなきゃ」

「数合せって僕できないですよ」

「君女好きだろう。そうじゃなければ行かなくていいよ」

鎌をかけられた林は断る余地がなかった。元之がこれをみて、

「六時に会社前のコンビニ集合、遅刻するなよ」と強引に決めた。林と元之以外に、調達部の榎本忠司も合コンに参加した。忠司は林より2才年上、元之と違って、仕事ができ、会社の中で指折りのイケメンで、すごく感じのいい人だった。林が外国人だったのか、配属してから一ヶ月の間、林に話をかける人は少なかったが、忠司は話をかけてくれた数少ない一人だった。

「アキか、よく来たぞ。今日楽しもうよ」忠司は微笑みながら林に言った。

林の名字は明瑩で、中国語の発音では「ミョーケイ」になる。どうも尼さんの法名に連想されてしまうから、親しい仲間では林を「アキ君」か「アキ」を呼んでいる。

「先輩、たくさん教えて下さい。」合コンに行くようになったから、林は心を落ち着けて臨もうと思った。

「教えることはないさ、ただ本能にしたがえればいいよ」忠司が

意味深く言った。いつもの忠司のイメージと違っていた。

三人が阪急電車に乗って京都の四条河原町に着き、予約したシャレタ洋風居酒屋の店についた。店員の誘導に従って個室に入り、女の子達を待った。七時半を待ち合わせしていたが、七時四〇分になつて三人の女の子が来られた。

「遅れてごめんね」リーダー格の女の子が声を目一杯高くして言った。顔にはちつともそのような気持ちが無かった。残りの二人は小柄で、一人はちつと柳原可奈子似で活発そうな子で、もう一人はおっとりしていてちつと相田翔子似の子だった。

「乾杯しようか」女の子達が席に着くと、元之が言った。

「乾杯！」みんなが言った。「今日の出会いのため」元之が付け加えた。

自己紹介の時間に入った。元之が自己紹介したあと、忠司は左手があごの先端をひねりながら言った。

「榎本忠司と申します。宜しくお願いします。趣味はサーフィンと読書です。元之が同僚で親友でもあります。もちろん独身です。好きなタイプはだれだろうな？」

「ステキ」リーダー格の女は忠司の格好よさに惹かれたか、目を細めてうつとりした声で言った。

「まだ酒も飲んでないのにもうこんな風になったかよ。演技ならこの女は怖いな」林は内心思った。

林の番になった。「林と申します。中国人です。宜しくお願いします。彼らは僕の先輩です。趣味は特にないけど、ひいて言えば音楽を聴くことです。特に浜崎あゆが好きです」

三人の女の子が目の中の外国人男にビックリした。

「こんなにびっくりしないでよ。俺だって好きで来てるわけでもないし、数合わせで無理矢理連れられてきたよ」林は冷静を装って笑いながら内心思った。

「日本語が上手ですね」一人の女の子が自分達のビックリした表

情に気づいたか、フォローしてきた。

「そうね、そうね」残りの二人はつかさず頷いた。

三人は京都市内の総合病院に働いていた看護婦だった。「佐智子です。サツちゃんと読んでください。看護婦です。趣味はお酒とクラシック音楽です。好きなタイプは押尾学です」リーダー格の女は興奮気味でフツハツハと笑いしながら自己紹介した。

次に、柳原可奈子似の子が自己紹介した。彼女は女性とも思われないほどの低い声で話した。「名前は未怜です。同じ看護婦です。趣味は映画鑑賞です。好きなタイプはマッチョな男です。みんなに柳原可奈子に似ていると言われています」

林は結構未怜の低声が好きだった。

三人目の相田翔子似の子が自己紹介し始めた。「佐津川美里です。看護婦です。これといった趣味はありません。寝ることは大好きです。休みがあればとにかく寝ます。宜しく願いします」美里が終始俯いたまま話していた。

「俺と同じく数合わせで連れてきたじゃないか」と林は思った。

合コンは正式に始まった。リーダー格の女は凄いペースで酒を飲み始め、30分のうちに生ビールを2杯飲んで、テンションもあつという間に高くなった。林以外の男性陣もリーダー格の女に合わせてテンションを高めた。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。

<http://alexlin.web.fc2.com/>

1 - 4 合コン 其の2

前菜みたい雑談が一巡した後、核心に迫る会話が出てきた。

「サツちゃんはいつもかわいいと言われてるよ」「リーダー格の女が忠司に絡んできた。

「私もかわいいとおもっているよ」忠司は相槌を打った。

「かわいい女の子も酒を飲めば不細工になるって」

「そんなことはないよ。もっとかわいくなるよ」横にいた元之が割り込んだ。

「榎本さんって格好いいね、彼女がいるでしょう」佐智子が元之を無視して忠司に話した。

「いないよ。ふられるばかり。サツちゃんが僕の彼女になってくれない？」忠司は一瞬間がけいれんしてすぐに元に戻って言った。

「いいよ」佐智子が大胆に言った。

「カップル成立。早すぎるじゃない」隣にいる低音女は嫉妬してきた。「私も立候補します」

態勢が早くもはつきりした。リーダー格の女と低音女はともに忠司に興味をもっているようだ。林は終始第三者のように観察していて、美里も局外で、元之だけが焦っていた。

1時間だったところ、「ごめん」と言っ、リーダー格の女はトイレにいた。リーダー格の女がいないうち、低音女は積極的に忠司に話をかけた。5分経ってもリーダー格の女が帰って来なかった。ちょうどその時、忠司が横にいた林に合図をしてトイレに行った。5分経った後、忠司とリーダー格の女は一緒に帰ってきた。リーダー格の女は顔が明らかに先より赤くなって、ちよっともうろううしていた。

二人が席につくと、先のような会話がまた始まった。

林も生ビールを2杯飲み、酔いが回ってきた。

「夜勤が多いですか」林は美里に話しかけた。

「交代で月一週間程度」美里が答えた。

「彼氏と時間合わせが大変ね」

「そのせいで何人もの彼氏とわかれました」

「病院の先生を捕まえれば。ある意味理解もできるし」

「そんなは滅多にないよ。地位が全然違うから」

「酒が進んでないから、弱い方」

「結構好きよ。明日仕事があるから」

「もしかしたら数合わせ」

美里がにっこりと笑って答えなかった。

「僕もそうよ。数合わせ同士よ」

二人は目が合ってすっきりと笑った。

「来た以上、それなりの結果をもとめないと」

美里が林の話を理解できなかった。

「よければアドレスを教えてもらえないでしょうか」林はここだけ敬語になっちゃった。

「携帯は持つてないよ」美里がはっと悟ったようだ。

「この子の断り方が下手な。ほかの言い方もあるだろう」軽くふられた林は内心そう思っていた。

「そうですか。じゃ別の連絡方法はないでしょうか？」

林は別に目の前の美里がタイプではない。狩りに出る以上、せめて一匹ぐらい撃つてみないといけないと思った。

美里は店の割り箸袋に自宅の電話を書いてくれた。

「勤務時間がばらばらなので、留守電に入れたら後で返事します」美里が付け加えた。

「ありがとうございます」林は勝者のように喜んでいた。

「百発百中じゃない」と内心思っていたが、決して自分の携帯番号を教えようとしなかった。

テーブルに綺麗に二つのグループに分けられ、それぞれ盛り上げていた。リーダー格の佐智子のハイテンションの笑い声が個室に響

き渡り、それに未怜の低音に相まって合唱団の「重唱」になっていた。残り物の林と美里はそれなりに楽しんでた。

「明日早いから、これで失礼します」とリーダー格の佐智子が言った。

「サツちゃん、明日休みちゃん」低音の未怜がわざと言った。

「婦長さんと変わってもらった。来週広島にいかなくちゃ」佐智子が軽く言った。顔を斜めにして、まぶたが激しく開け閉じしていた。

「僕もそろそろ帰らないといけない。明日朝ちよつとした野暮用があつてね」忠司がいきなり言った。

先のトイレタイムでもうすでに交渉成立したそうだ、と林はすべて悟り、二人に目を配った。低音女は悔しくて顔を歪み、元之は焦りが全面的に顔に出し、口が開けたまま何か言おうとしていた。美里は状況を理解できないというより理解しようとしなかったか、片手が顔を支え、目の前の料理をじっと見ていた。

リーダー格の佐智子は酒を飲み過ぎたせいか、顔が真っ赤になって、「ごめね、ごめね」連発した。忠司が勝者のように笑みが浮かんでいたが、すっきりとした笑いではなく、その笑みの裏に無力な寂しさと空しさを林はどうしても感じてしまった。

店を出る前、忠司が財布から一万円を出し林に渡した。

「これで勘弁してください」忠司は申し訳ないように言った。リーダー格の女はお金を出そうとする仕草さえしなかった。

「お気を付けて」みんなが言った。

二人が出た後、個室の中では急激に賑やかさを失った。それから三十分ぐらい経ったところに、「そろそろお開きにしようか」と元之が無力に言った。時間が十一時前だった。

「そうですね。帰りましょう」酒をほとんど飲んでなかった美里が同意した。

元之と林が一万円除いた飲食代を払った。

会社の近く住んでいた元之は阪急を乗り、未怜と一緒にだった。林

と美里はちよつと離れた地下鉄三条駅に向かった。

「どうか他の店に行こうか」林は男性の本能か、勇気を絞って里見を誘った。

「明日早いから、また電話してください」美里は考えて断った。地下鉄三条駅まで二人はほとんど無言だった。方向が違っていたので、ホームで分かれた。

地下鉄が空いていて、林は席に座りながら今夜の出来事を思い浮び、初狩りとして合格点はあるようだった。例え掛けなくても美里の電話番号をゲットした。トイレタイムの交渉術を目の前にした。林はまたやりたいような気がした。そう思っているうちに山科駅に着いた。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。

<http://alexlin.web.fc2.com/>

1 - 5 一目惚れ

久々に酒を飲んだせいか、林は土曜日まで寝た。朝の支度が終わった後、近くのコンビニに行って適当に食材を調達し、その後、部屋の掃除、片付けと洗濯が終わったのがすでに2時を回ったところだった。

夜の英会話を予習しようと思って、教科書を開いた。1ページも読んでないうちに、夕べの合コンのことを浮かんだ。忠司と佐智子はきつとそのままホテルにいっただろうな。元之は間違はなく一人で寂しい夜を過ごしただろうなといういろいろなことを妄想した。美里に電話してみようと思って、ポケットにあった箸袋を出したが、やめようと自分に言い聞かせて、結局電話をしなかった。お世辞でも美人とは言えないし、タイプではないし、恐らく重いだろうと勝手に美里を酷評した。自分が結構世間的な人間だなと林は自嘲しながら思った。

そうしているうちに1時間過ぎた。やる気のない自分を気づき、テレビを付けたが、夕べの酒がまだ残っていたせいか、林はテレビを見ながらうとうとした。目が覚めたとき、五時過ぎたところだった。30分ぐらい英会話を予習して行き着けの喫茶店に出かけ、定食を食べた後、コーヒーを飲みながら英会話の教科書を上の方で見ていた。

7時になったところ、林は英会話のN社に向かった。前回と同じく教室の後ろのテーブルに座ったが、教室に林以外は誰もいなかった。林は教科書を出して静かに待ち、脳の中に奈々子のことをよぎった。奈々子のことを思うと、言葉に言えない愉快さが林は感じていて、「今日どんな服を着るだろうな」と教科書を見ながら思った。奈々子が入ってきたのが授業の始まりの10分前だった。一礼して林の隣に座った。

奈々子が座ると同時に、彼女の匂いが林をすっぱり包み込んだ。

林の鼓動が明らかに早くなり、挨拶も忘れ、何も考えずに教科書を凝視したままだった。

「こんばんは」間をあけて奈々子は愛嬌よく挨拶した。

「Good evening! いや、こんばんわ」林は慌てて返事した。

「プツ」と奈々子が軽く笑って英語で答えた。「Good evening!」

目の前の奈々子が私服だった。薄紫の七分袖のポロシャツにナチユラル白のジーンズ、髪の毛がニットのシュシュで括られ、黒いフレームの小さなデザインメガネを掛けていて、前回より明らかに薄化粧だった。にこにこ微笑みながら林に顔を向け、次の質問を待っていた。

林はやつと自分の失態を気づき、胸を膨らませ深呼吸したが、奈々子の匂いが大量に吸い込んで脈がさらに上がった。手が口を塞げ、顔を横にしてわざと咳をして、奈々子の匂いを吸わないように一回大きく深呼吸して落ち着かせようとした。

「メガネがかわいいですね」林はいきなり奈々子のメガネを褒めた。

「そうですか。ありがとう。コンタクトをずっとすると目が痒くなったりします」奈々子はいきなり褒められるのを思わなかったから、ちよつとびっくりした。

「林さんはコンタクトします？」奈々子が聞いた。

「僕目が良いからメガネとかコンタクトとかしたことはありません。みんなつらいと言ってたけど、なかなか実感できません」林はやつと自分に戻った。

Andre先生が時間ぎりぎりになって教室に入り、レッスンが始まった。

林は情性でレッスンを受けていて、林の脳が奈々子の匂いに占領されてしまった。

授業の最後になると、前回と同じく自由会話が始まった。

「Are you off duty today?」林は質問を發した。

「Yes, today is a day off, and you?」奈々子は答えた。

「Yes.」林は次の質問を考え込んだ。

このとき、Andre 先生が来られて林と奈々子にテンポよく二人に英語を掛けた。二人必死に先生に付いていた。時間があつという間に過ぎていた。

レッスンが終わり、ノートなどを片付けて奈々子の後に林が教室を出た。林は教室に出て奈々子の匂いのない空気を一生懸命吸い込んだ。

林は奈々子の後ろ姿の下半身を見た。長めのジーンズをはき、イエローのエナメルパンプスを履いていた。奈々子は明らか下半身デブだった。ぴったりジーンズのせいか、お尻と太ももの肉付きが余計によく見え、丸々のお尻がかなり女性を強調し、上半身とのアンバランスが林の目に焼き付いた。

「前回と違って今日私服って雰囲気全然違いますね」林は言った。

「そうですか。制服はかわいくないですか?」奈々子が声を上げてわざと聞いた。

「制服の方が初々しく、私服の方がかわいいですよ」林は褒めた。「ありがとうございます」奈々子が褒められてちよっぴり嬉しそうだった。

「一番のチャーミングポイントはメガネだと思いますよ」林は自分も分からなく立て続けて奈々子を褒めた。

「嬉しい。林さんは人を褒めるのが上手ですね」奈々子はちよっぴりと舞い上がった。

「僕は本当のことを言っただけですよ」奈々子の嬉しそうな様子を見てひと安心した。

奈々子は目の前の林に対してかなり好印象だった。大手食品メー

カー勤めが奈々子にとってはすべての前提条件で、外国語が上手の上に日本のことをかなり知っているようだ。奈々子は働いてから三人の男性と付き合ったことがあって、一人が税理士で、残りの二人は大手勤めだった。結局はお互いに話が合わなく、3ヶ月以上付き合ったのが一人だけで、本気で付き合ったことはなかった。奈々子自身も仕事が忙しく、今の仕事が大好きということもあった。何より気にいたのが林の明るさで、積極的に話し、褒めてもくれるし、心配りもできているようだ。唯一の心配は外国人で、別に中国嫌いわけではないけど、文化の違いによるトラブルが起こってしまうという漠然とした不安があった。

「酒本さんのお仕事、残業多いですか？」林は話題を変えて言った。

「ITバブルが崩壊してから日常の業務がずいぶん減りました」奈々子は笑いをやめ、重々しく言った。

「IT関連のお仕事ですか」林は奈々子が証券会社に勤めていることを知りながらわざと聞いた。

「IT関連ではなく、証券会社です。IPOとかM&Aとか」

「なんかむずかしそうね」

「事務仕事とそんなにかわりません」

夕べの合コンの経験もあってお茶に誘ってみようと林は思っていたが、失敗を恐れていたかなかなか話せなかった。そう話している間、二人は外環三条の交差点に付いた。

「林さんは向こうでしょうね」奈々子はゆっくりと話した。

「そうですね」林は頭の中に葛藤しながら小さな声で言った。

「それでは、お休みなさい」間をあけて奈々子は言った。

「お休みなさい」林は別れを惜しんでいた。

「さよなら」奈々子は軽くお辞儀して言った。

「さよなら、また来週」林は正直悔しかった。

奈々子は林が誘ってくれることを正直期待していた。

「今度自分から誘ってみようか。本当に奈々子のことを気にしているかな。もし彼がその気持ちがあればどうしよう。やっぱりやめようか。彼と結婚したらきつと背の高い子が生まれるね。しかも最低二カ国語が話せるし、彼の仕事ならいざとすれば専業主婦にもなれる」奈々子は乙女のようにあれとこれと妄想をたくましくしていた。顔には不思議な笑みを浮かびながらゆっくりと自宅に帰った。林は嘆きながらいつもコンビ二を寄って帰った。

深夜、林はまたヘビ妖怪の夢を見た。目を覚めた時、妖精の発した匂いが実は奈々子の匂いを指したことに気づき、一目惚れしながらも誘う勇気のない自分に情けなく感じた。明日美里に電話しようかと一瞬思った。その後、ヘビ妖怪のことやら美里のことやら何を考えたか、林自身も知らないまま、2時間ほど寝られなかった。うとうとしたのは空が微かに明るくなってからだった。

目を覚めたとき、もうすでに10時を回ったところだった。休みの今日も林が特に用事を入れてなかった。前から買いたかった空気洗浄器を思い出して、遅い朝ご飯を食べてから京都の寺町の電気街に出かけた。

電気街に行ったが、気に入った商品がなかった。近くの高島屋の中華料理屋で昼を食べ、ついでにシャツとポロシャツを一枚ずつ買った。自宅に戻った時はもうすでに5時までだった。

冷凍食品をチンしている間に、林は奈々子のことを思い出して何となく幸せな気分だった。机にあった雑誌をめぐりながら待っていた。急に美里に電話しようといアイディアが脳によぎり、強迫観念になつてなかなか脳から離れなかった。背広の内ポケットにあった箸袋を出し、携帯で電話したが、受話器の向こうから留守電のメッセージが流れてきて、何を話そうかが分からなくて携帯を切った。

ちょうどそのとき、「チン」という音が部屋に響いた。奈々子に一目惚れした自分を認めようとしないうちに自分に虚しく感じて、声を出して苦笑いした。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。

<http://alexlin.web.fc2.com/>

1 - 6 忠司の恋愛事情

月曜の朝、林は元之と会社の入り口で出会った。

挨拶した後、「その後、どうだった」元之は意気揚々に聞いた。

「何もありませんよ。ただ家の電話番号をゲットしましただけ」
林は答えた。

「なんだ、うまく行ったと思ってた」

「未怜ちゃんの話によると、美里ちゃんがアキのことを結構気に入ったみたいよ。電話したらどうだ」元之は話し続けた。

「そうですか、僕は外国人だから、お世辞じゃないですかね」

「アキは外国人である前に、S社の社員だろう。S社はブランドだから」

「そうですかね。分かりました。先輩はどうなったでしょうか」
林は聞いた。

「当然のことでしょう」元之は一瞬神秘的な笑みを浮かび、満足げに言った。

「さすがに先輩」林は声を高くしてほめた。負け同士が傷を慰め合ったじゃないかと内心思ったが、悔しい気持ちもあった。

「未怜ちゃんを彼女にするの」

「あるわけないよ。彼女もわかってるさ。」

林はそれ以上聞くのをやめた。

「忠司先輩はもちろんでしょうね」林は話題を変えて忠司のことを聞いた。

「それはそうさ」元之は言った。

「でも部屋が出たとき、結構寂しい顔をしていましたよね。僕の勘違いかもしれませんけど」

「よく分かったな。さすがに帝大出身」元之はかなりビツクリした。

「忠司は前に朋子というかわいい女の子と長く付き合った。もう

二人結婚秒読みだと誰も思ってた。しかし、二年前ぐらいか、新しいプロジェクトのリーダーになった忠司は仕事が急に増え、朋子をほったらかす時期があった。寂しいせいか、朋子が元彼と飲みに行つて、酒の勢いでホテルに行つた。普通誰も言わなければ何の問題もなかったけど、元彼が我々業界の人で言いふらしたらしい。噂がすぐに忠司の耳に入つた。まじめな忠司が耐えきれなくて二人が別れてしまった。」

元之が残念そうに一息を飲んで言い続けていた。

「朋子はもちろん後悔したよ。僕のところまで頼みにきてな。けど、忠司が頑固でなかなか話を聞いてくれなかった。元々関連会社で働いた朋子は仕事を辞めざるを得なかった。かわいそうよ。仕事を辞めて東京に行つた。半年後、忠司の気持ち整理に着いたとき、朋子はもうすでに人妻になってしまった。これから忠司が変わつた。今のようにね」元之が先の満足げな笑顔が微塵もなくずっとため息しながら話した。

「人生何があるかわからないよ」元之が意味深長に付け加えた。

「こんな深い理由があつたか、全く知りませんでした」林は自分のことのように落ち込んだ。

しばらく沈黙した後、「まさかサツちゃんを彼女にしないでしょうね」

「馬鹿か、俺は知らんよ、本人に聞いて」元之が嘲笑つた。

「また今度行こう。アキも俺みたいに育ててやるよ」元之が上目線で言つた。

「宜しく願います」林は元氣よく爽快に答えた。

夕方になると、今までちよつと暑かつた天気が一転して雨が降り出し、気温も急激に低下した。夜九時ごろ、林が帰宅したとき、冷たい雨に身にしみる風に撃たれてかなりの寒さを感じ、会社の近くでビニール傘を買い、帰宅の足を速めた。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是

非、ご覧ください。

<http://alexlin.web.fc2.com/>

1-7 寂しい英会話教室

この雨が秋の長雨だった。水曜日の夕方になっても雨のやむ気配がほとんどなかった。今日は英会話の日だ。外は急激に気温が下がっていたけど、林の心の中では相変わらず秋晴れのように、足も軽かった。六時半ぐらいに山科駅に着き、いつもの牛井屋さんで軽い夕飯を済ませ、今日こそ奈々子をお茶に誘おうと心に決めていた。

林はいつもの時間に教室に入り、いつもの席に座った。席に着くと同時に、林が奈々子の匂いがした。三日間も経ったのに、それ以外の生徒も座ったのに、そんなはずはないと林は自分に言い聞かせたけれども、確かに奈々子の匂いがした。

7時半になり、Andre先生の授業が始まったが、奈々子が来なかった。前と同じく、今日も残業ではないかと林は自分を慰めた。

しかし、20分経つても、30分経つても奈々子は現われなかった。最後の自由会話の時間になった。林は依然一人で、別のテーブルの一人が今日たまたま来なかったから、Andre先生に言われて席を移動した。お互いに軽くお辞儀をした後、林が隣の女性を観察した。真つ赤のエナメルのハイヒールに、フワフワの服とスカートがレースだらけで、全身ピンクに統一され、おまけに頭までレースが付いていて、まるでキティちゃんのように、口り顔で常に作り笑いのように笑っていた。

「What is your name?」林は聞いた。

「My name is Rina.」リナが完璧なカタカナ発音だった。声を目一杯高めてお嬢様を気取っていた。

「What is your name?」彼女が聞いた。

「My name is Rin.」林は答えた。

「Where are you from?」外国人であることに気づき、彼女が続けて質問した。

「I am from Shanghai China, I

a m a C h i n e s e .」林はいつものように答えた。

癖かどうかかわからないけど、リナが横目で林を見ながら黙り込んでいた。

「I w o r k f o r a m a j o r J a p a n e s e f o o d c o m p a n y . A n d y o u ?」林がリナの態度に腹が立ち、すかさず質問した。

「なに？」リナが林の英語を理解できず日本語で聞いた。

林はゆっくりともう一度質問した。

「え、なに？」彼女は依然理解できなかった。

林はそれ以上質問することをやめ、N社のクラスの分け方に疑問を持った。

終わるまで、二人が全く会話せず、時間経つのを遅く感じた。最後に宿題のプリントを2枚配られた。プリントやノートを片付けて教室に出ようとすると、Andre先生に呼び止められた。

「P l e a s e h a n d p r i n t s t o N a n a k o .
「Andre先生が英語で林に言った。

「I d o n o t k n o w h o w t o c o n t a c t h e r .」林は困惑しながら英語で答えた。

Andre先生が不思議そうに林を見た。

「なぜ彼女の連絡先を知らないか、いけなしい。僕も知りたくてどうしようもないけど」林は不思議に思った。

林は教室を出た後、冷たい風に吹かれて全身が震った。この長雨のせい、木の葉っぱが半分ぐらい落ち、残りの半分が街灯に照られて孤独に揺れている。通行人が普段より少なく、みんな駆け足で歩いていて、まだ八時半ちょっと過ぎたのに、いつも開いていた店のシャッターが下ろされていた。ネオンが雨に濡れられ、その水滴が無数の宝石のようにきらきらと光りを乱射し、目障りしかなかった。百貨店のショーウィンドウのガラスが雨に濡れられて、展示していた商品が微かにしか見えなかった。

林は風と雨を避けるために頭を斜めに俯け目を細め、風に逆らつてアパートに向かった。風に乗せられた雨が顔や手を濡らせ、5分も経たないうちに、手がびしょびしょになった。林の心境は今の荒れ模様よりも、真冬の早朝のような薄暗い静けさに近かった。

「奈々子がこれから来なければどうしよう。なぜ先週の土曜に連絡先を聞かなかったの」林は乙女ティックに自分を責めていた。

「今度事務の方に奈々子の連絡先を聞いてみよう。だめだ、個人情報はその簡単にくれないだろう。N証券の京都支店に電話しよう、いや待ち伏せしよう。ストーカーに思われるからだめだ。……」林はすべての手段を検証した。

コンビニを寄ってからアパートに戻ったとき、スーツも靴も顔も手もすべてびしょ濡れ、すぐにシャワーを浴びた。コンビニの弁当を食べた後、やる気もなくテレビをつけたが、頭の中には奈々子のこと一杯だった。「今夜もヘビ妖精の見るかな」自嘲しながら思った。今度、奈々子に対する自分の気持ちに本能的に否定しなかった。しかし、その夜はヘビ妖精の夢を見なかった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。

<http://alexlin.web.fc2.com/>

1 - 8 本社での仕事

木曜日の朝に大阪の本社から緊急の電話が林のところに入った。上海の工場で品質問題が発生して緊急のテレビ電話をしなければいけないが、同時通訳が足りなくて林のところに応援を頼みに来た。林はすぐさまに電車を乗って本社に向かった。本社に着いたとき、テレビ電話がすでに始まっていた。

佐々木常務と佐野中国総括部長をはじめ、中国事業部の社員など会議室の中に十人以上いて、中国の現地社員とテレビ会議をしていた。佐々木常務と佐野部長の横に専属通訳、女性の王さんがいた。王さんが林の先輩、典型的なキャリアウーマンで素早く同時通訳をこなしていた。入社してから何度か会ったことがあって彼女から色々とアドバイスをしてくれた。中国事業部の日本人社員の横に通訳が付いていて、みんな緊張した面目で会議をしている。一方、国内営業部の木村部長と国内営業1課の中川課長がじつと資料を見ていただけで、会議の議論に参加していない。

林は木村部長の横に呼ばれ、席についた。

「林君、よく来た。早速通訳してくれ」木村部長が林の到着が待ち遠しかった。

国内営業部の社員の説明を聞いてやっと状況を理解した。S社のある飲料が、日本では低温輸送が常識になっていたが、中国ではまだ常温で輸送されたせいで、中身のある成分が中国法律に決められた含有量より多く検査された。その理由が製造段階にあるのか、それとも常温輸送のせいかわからなかった。

説明を聞いたあと、林がすぐに同時通訳に取り組んだ。林の日本語能力がもとも堪能なので、まもなく木村部長が会議に参加ができるようになった。会議が昼間でいったん終了し、その後は対策のための資料制作に入った。その日、林が帰宅したのが十時回っていた。翌日も林は直接に本社に行き、テレビ会議で木村部長の同時通訳

を担当した。この日の会議は2時間で終了した。品質の問題は中国での生産に使われた原水が日本の原水と異なった成分が含まれたことによるようだ。品質問題の原因が突き止められてみんなひと安心した。その後のことは品質管理部に回った。その日の資料作成を完了したのが午後五時ぐらだった。

「仕事があれば職場に戻りたいです」林が木村部長に丁重に言った。

「そうか、君のお陰様で仕事がうまく運んだ。ありがとう。今度また頼むよ」木村部長が目を細めて林を褒めた。

「それでは、お先に失礼します」林は木村部長とその他の社員にそれぞれ一礼して本社を後にした。

林が職場に戻ったとき、すでに7時前だった。職場には社員がほとんどいなかった。林もメールを確認し、ちよつとした雑務をこなしてからすぐ帰ることにした。長雨がその日も降り続けていた。

林が日本語飛び抜けた能力をもっていたとはいえ、同時通訳が想像以上に神経を削る仕事だった。行き着きの喫茶店で夕飯を食べた後はもう足も動きたくないほど疲れていた。アパートに帰り、シャワーを浴びた後、寝る以外何もできなかった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

第2章 愛の昇華

目が覚めたのが十時過ぎたところだった。「今日休みでよかった。さもなければきつと遅刻になっちゃっただろう」林があくびしながら起きた。窓の外を見てようやく雨が止んだ。

この二日間が仕事で目一杯なので、奈々子のことを考える余裕がなかった。昼ご飯を食べた後、英会話の教科書を出して、ちよつと勉強しようと思った。しかし、睡魔が容赦なく林に襲った。気づいた時、すでに気持ちよく2時間寝た後だった。

最近ずっと外食だったから今日は自炊しようと林は思い、山科大丸の地下にあるスーパーに行った。朝食用のパン、飲み物、お茶、ヨーグルト、卵、野菜と豚肉などを沢山買い、家に帰って調理し食べ終わったのが7時だった。片付けもしないまま、林が英会話教室に向かった。雨が止んだとはいえ、かなり肌寒かった。

今日は奈々子が来るかなと思いつながら恐る恐ると教室に入った。

奈々子はすでにテーブルに座っていた。白地のプリントのチュニツクワンピースにアイボリー色のハイヒールサンダル、地味ではあるが、大人の女性を感じさせる格好だった。林は胸を撫で下ろして呪縛が解かされるようにひと安心した。

「水曜日来られなくてごめんなさい。10時まで残業しました」軽い挨拶したあと、奈々子が前回来られない理由を説明した。

「謝ることはないよ。残業、きっと大変でしょうね」林は奈々子の匂いを嗅いだ。

「誰と会話したのですか」奈々子が微笑んだ。

「キティちゃん」を言いたかったが、聞かれたら困るので、「かなり大変でしたよ」林が神秘的に笑った

「何が大変だったですか」奈々子が非常に知りたがっていた。

「後で教えます。今はちょっと」林がいたずらっぽく言った。

「そうだ、宿題がありましたよ」林が言いながら、2枚のプリントを奈々子に渡った。

「ありがとう」

2 - 1 告白 其の1

授業が始まった。Andre先生の声が教室に響き、ときどき他のグループからの笑い声が伝わってくる。林と奈々子は授業に集中し、時間が経つのが非常に早かった。林は何回か奈々子の匂いに惑われたけど、今までのようにときどきしたことは今日はしなかった。授業が終わり、二人が肩を並んで教室を出た。

「教えて、なぜ大変だったでしょうか？」

「酒本さんが来なかったから、ドア近くのテーブルの女の子と英会話しました」

「あの子が結構可愛いじゃないですか？」

「可愛い？」林が不思議そうに首をかしげて語尾を上げた。「まるでキティちゃんですよ」

「はあっはあっはあっ」奈々子が声を出して笑った。「その通り、私もそう思った」

今まで我慢の反動なのか、奈々子は手が口を押さえながら声を出して笑った。

「全身リボンとレースだらけ、頭までリボンが付いていたよ」林が大げさに両手で女性の服装をなぞった。

ダムが決壊したように、奈々子は片手が口を、もう片手が腹を押さえてさらに高いトーンで笑った。通行人の振り返る視線を気にした

か、奈々子は一瞬きつく口を押さえ、笑いを止めさせた。しかし、やはり我慢できず、もう一度爆笑した。

「彼女ってこんなにもしろいの」林は奈々子が笑い止まるまで待つて聞いた。

「彼女もおもしろいけど、林さんの方がもっとおもしろい」笑いすぎたせいか、奈々子が咳をしながらとぎれとぎれに話した。

林は自分が何をしたかを分からなくて、笑って誤魔化していた。

「彼っておもしろいなあ」奈々子が直感的に思った。

奈々子は相変わらず笑っていた。笑いすぎたせいか、奈々子は歩く気力もなく、二人はゆっくりと歩いていった。通行者から時々不思議そうな目線で二人を見ていたが、二人は気にしなかった。

普段10分ほどでつく外環三条交差点は今日は20分かかった。交差点についた時も、奈々子には笑いの余韻がまだ残っていた。奈々子が笑っている間、林の頭の中には彼女をどう誘うかが一杯だった。

「お茶でもいかががでしょうか？」林が葛藤した末、勇気を絞って小さい声でゆっくり喋った。

奈々子の笑いが止まり、すぐに返事しなかった。奈々子は目を上げて林を見て、林も気をもんでいて奈々子を見た。二人の目線が合うと、林は顔が赤くなって背け、奈々子は俯いて返事しなかった。奈々子の心の中ではかなり嬉しいけど、突然の誘いの前にどう答えるかを分からなく、微かな不安もあった。奈々子は林の誘いの意味

が十分に分かっていて、27才という微妙な年齢に達した奈々子にとっては、目の前の男性をもっと知りたい価値があったと思っていた。

「時間がなければまた今度」林が気まずい空気をかわそうと付け加え、落ち着きがなく、もちろん奈々子を見る余力もなかった。

「いいよ」奈々子がしばらく考え込んだ後、微かな声で返事した。

林は喜んでいる様子は全くなく、すべてのエネルギーを使い果たした抜け殻のように、ただ茫然としていた。逆に奈々子は大勝負が終わってしまったように、大きな荷物が外されたような清々しい気持ちだった。

3分間無言の時間が流れていた。

やっと魂が林の抜け殻に戻り、頭を高速回転させて状況を理解しようとしていた。

「どこへ行くの」奈々子はボーとしていた林に待ちきれず聞いた。

「どこでもいいよ。好きな店は」林はこれで目一杯だった。

「最近オープンしたミスタードーナツがいかがですか？」奈々子が訪ねてきた。

「もちろんいいよ」林は反対する余地がなかった。

二人が駅方向にもどり、ミスタードーナツに入った。夕飯を食べた林はホットコーヒーだけを注文し、奈々子はアイスコーヒーと2

個のドーナツを注文した。林が奈々子の分を払おうとしたが、奈々子に合図で断られ、二人自分の分のお金を払い、席についた。静かな店内に、邪魔とはいえないが、時々となりの席から女子高生のギヤル笑いが伝わってくる。

林はやつと自分に戻った。

「忙しいところ、誘ってごめん」林は余計なことを言った。

「そんなことはないですよ」奈々子は微笑んでいた。

「先林さんのマネが本当におもしろかったよ」奈々子は言い続けた。先のことを思い出したか、また笑った。

「それを褒められたら立場がないよ」林はそれ以外の答えが見つけなかった。

「林さんが勤めている大手食品会社ってS社でしょうか」奈々子が確認してきた。

林が頭を縦に振り、同意した。

「かなりの大手でしょう。中国の進出の事業を担当しているの」

「それはほめすぎる。今年の4月に入社した新人なので、会社のことは全くわかってないよ。ちなみに配属されてたのが研究部門」

「理系出身？」

「ばりばりの文系、専門は経済学」

「私は経営学部、結構近いね。なぜ研究部門なの」

「会社の配属なので、文句言いようがないよ。でも来年からは中国事業部に移動することになっている」

「それはおめでとう。専門を生かされるかもね」

「大学院で勉強した経済学と会社の経営は全くちがうから」

「大学院ってどこを卒業したの」

「K大の大学院」

「それはすごいね。旧帝大じゃない」

「褒められてもね。その実力が本当にあるか、自分も分からない。だって、今のS社も教授のご推薦があつたからだ」

「日本ってそんなもんよ。でもK大の大学院って世間的にやっぱりすごいよ」

「奈々子さんの証券会社ってN社ですか」林は聞き返した。

「そうです」

「IPOとかM&Aってむずかしいじゃない」

「二年前リテール、つまり個人の営業だったが、最近のITバブルでIPOの仕事をメインになった。でもやってるのも本社の手伝いで事務的なことばかり。ITバブルがご存じのように崩壊したか

ら、この先どうなるでしょうね」

奈々子が自分の将来を心配していたか、ちょっと落ち込んだ。

「それで英会話教室ですか？」

「仕事が暇になったから、勉強しなきゃと思って」

「京都は地元でしょうね」林は話題を変えた。

「近くに実家があります」

「大学はどこですか」

「京都のD大の経営学部」

「名門私立じゃない」

「大学の時、あまり勉強しなかったから、結構後悔してるよ。」

林さんはK大の院卒だから、ちよつと聞きたいが、今の株価指数はどこまでおちる」奈々子の表情に笑いがなく心配そうになっていた。

「僕は予想屋でもないし、株もやってないから、お答えできないと思う」

林は一息して奈々子を見て、奈々子の将来に対する漠然とした心配を感じていた。

「経済学の観点から言えばバブルは付きもの。特に革命的な新しい技術が市場に応用し始めたとき、バブルが非常に発生しやすい。」

昔、鉄道、自動車、飛行機など一般市場に利用し始めたとき、バブルが起こった。だから、今回のITバブルはその一つじゃないかと思う」

奈々子は林の話をまじめに聞いた。

「バブル発生のメカニズムはどうも人間の脳の構造と関連しているらしい。メタファー理論って聞いたことはないだろう。僕もあまり詳しくないが、簡単に言うと「群衆心理」かな。新しい技術が世に出てきて、それに有望な応用市場が予測されると、正のフィードバックのループに入り、期待自体がさらに高い期待を作り出し、それ自体が株高といった形でバブルが形成する。毎回のバブルに必ずワンフリーズのバズワードがある。日本のバブルなら「Japan as number one」とか、「土地神話」とか、今回のITバブルなら「ニューエコノミクス」とか、「シナジー効果」とか「収穫逡増」とかがあったでしょう。しかし、バブルがすべて悪いではないよ。バブルや恐慌は資本主義の病ではなく、定期的に行なわれる「再起動」って日本人の経済学者宇野弘蔵氏が言ったよ」

奈々子は目を丸くして林の話を聞いた。

「株価がさらに落ちるかどうかわからないけど、これからIT技術をより正確に評価されるだろう。鉄道や自動車のようにIT技術がこれから我々の生活に大きく影響するじゃないかと思う。生活のインフラになるじゃない。ネットワークのインフラ企業は電力会社のように不可欠にはなるけど、あまり稼げないじゃないかと思う」

奈々子は林の答えに正直驚いた。今まで沢山金融レポートをよんだけど、彼の話の方が説得力があると感じた。目の前の男は日本語がもの凄く上手で、帝大出身、大手勤め、英語もそれなりに上手、

おまけにおもしろい、と奈々子は本能的に林を株の銘柄のように評価し始めた。ただし、中国人であることに漠然としたリスクを感じていた。林は時々奈々子の反応を見ながら一気に長く話した。証券会社勤めだったか、林の話をほとんど理解したようだ。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

2 - 2 告白 其の2

ちょうどその時、店の壁掛けの時計が10時を知らせた。店に入ってからもう1時間以上経ち、注文した物もすべて食べ終わった。

「もう10時になったよ。時間大丈夫？」林は気をつかつて奈々子に聞いた。

「明日は休みだから時間は大丈夫よ」奈々子はニコリと答えた。

「そうか。酒本さんと話をするとか何かすぐ時間を忘れる」

「林さんの話が本当におもしろい。ぜひ続きを聞きたい」奈々子は林を真剣なまなざしでじっと見つめながら言った。

「それは褒めすぎよ。調子を乗りすぎて申し訳ないよ」林は紋切り型の謙虚を言いながら、奈々子の言葉の裏を探っていた。お茶を誘った時の気まずい空気もあって、なかなか次の一步を踏む勇気がなかった。両手ですでに空になったガラスコップをもてあそび、何回もそのコップを飲み、ぐずぐずして黙っていった。奈々子は何かを促すように林を大きな瞳で見ていた。二人の視線が合ったとき、奈々子はなにも逃げなかったが、林は苦笑いしてすぐ顔を背けた。

林は自分が勝手に作り出す気まずい空気に悔やんで焦っていた。

「そのままわかれればいいのに、いや折角のチャンスだから台無しにするな、外国人だから誘ったらどう見られるだろう、もし断れたらこれからの英会話がきつと気まずいだろう」と林はすべての可能性を想像し、脳の中では大混乱が起きた。一回深呼吸して林が何か言おうとするとき、奈々子の匂いが林の体に入り、脳がさらに刺

激された。

3分ぐらいの沈黙の時間が流れていた。店内は二人を除いてほとんど誰もいなかった。安室奈美恵の『CAN YOU CELEBRATE?』が静かに流れていた。奈々子は促すように林をずっと見つめていた。

「他のところに飲みに行こうか」林は歯の隙間からやつのことで途切れた声を発した。ストレートに言ったのはいいわけなどをつける余力がなかったからだ。

「いこうか」奈々子は林の誘いをずっと待っていたように、耳に心地のよい声ではつきりと返事した。奈々子が先のような迷いがなかったどころか、求めていた銘柄を今か今かと待ちわびるように購入したようだ。なぜすぐにオーケーを出したのが奈々子自身も分かっていなかった。

一瞬にして空気が変わり、すくなくとも林はそう感じ、こわばった表情が喜びに変わった。

「今の時間なら、白木屋はあいてると思う」林は今度こそ自分から先に提案したかった。

「そうしようか」奈々子が短く答えた。

二人はミスタードーナツを出て、道を渡って白木屋に向かった。

店に入ったあと、林が静かな場所を探して席に着いた。

「飲み物を何にしようか」林は奈々子に聞いた。

「林さんは」奈々子が聞き返した。

「とりあえず生にしようか。酒本さんは」

「そうね、私も生にします」

二人が隣で待っていた店員に生ビールと何品の料理を注文した。

「乾杯しよう」生ビールとお通しがもってきて、奈々子はジョッキを持ち上げて言った。

「何のため乾杯しようか。二人の出会いのためにしましょうか」林が今度大胆に言った。

「乾杯ー！」奈々子は一瞬恥ずかげに迷ったが、否定しなかった。

林は精神的なエネルギーが常に超負荷になったか、酒の力を借りたいか、一気にジョッキの三分の一のビールを飲んだ。

「時間が遅くなっても大丈夫か」林は奈々子に気を配った。

「お母さんと二人暮らしで、こんな年だから言われることはないよ」

「僕は一人暮らしだから、例え死んでも誰も分らないな」

「林さんって本当におもしろいね」奈々子がまた笑った。

「酒本さんは普段仕事以外に何か趣味がありますか」

「高校までテニスをやってたが、仕事してからはなにもしてない。仕事が結構忙しいからなかなか遊びの時間はないねえ。たまに親友の祐子ちゃんと飲みに行くぐらいかな」

「仕事が大変でしょうね。でも今の仕事がすきでしょう。それで立派じゃないですか」

「妻が家庭を守るべきとか、日本の慣習は林さんがどう思いますか？」

「僕は共働きの家庭で育ったから、自分の妻が働くのも別に抵抗ないよ。中国では共働きのの方が社会通念になっているかも」

「家事も男性が手伝ってくれますか？」

「もちろん、よほどの金持ちじゃないかぎり、少なくとも上海では、家事をしない男性は女性に捨てられるよ。」

奈々子が大発見したように、目を丸くして喜んでいた。

「でも、女性が稼いだ給料は原則的に全部家計にいれるのも当たり前前よ」

「そうか、全部いいことでもないね」

二人とも声を出して笑った。

「林さんのご趣味が何ですか？」今度奈々子が林に聞いた。

「就職してから残業の嵐、平日終電、土曜出勤当たり前、日曜は寝るだけの生活は八月末までだった。最近は定時で帰れるようになったから、英会話をするようになった。特に趣味というものはないし、やる時間もなかった」林は淡々と説明した。

「林さんにはきつと彼女がいるでしょうね」奈々子が確認してきた。

「外国人だからまず選択の余地がすくないでしょう。その上今までの残業の嵐だから、いたとしても振られる運命になってたよ」

「林さんが立派だからきつと女の子が林さんをほっておくわけがないから」

「そういう女の子がいればね」

「学生時代からの恋とか、大学院生同士の恋愛話がよくあるから」奈々子が入念に確認してきた。

「そういえばいたよ。同じ中国人の子。でも就職したと同時に別れたよ。彼女のわがままに、僕がついていけなかったよ」林は正直に答えた。

しつこく聞かれた林は奈々子のプライベートを聞こうと思って、ビールを大きく一口飲んで聞いた。

「奈々子が美人だから、きつとよく告白されるでしょうね」

「そんなことはないよ」奈々子がきつぱりと否定した。微妙な年齢に達した奈々子をちよつと褒めすぎられて皮肉に聞こえた。

「今彼氏がいなくてしょうか？」林は質問を変えてドライに聞いた。

「今いないよ」何か嫌なことを思い出したように顔がすぐれなかった。

「一人者同士に乾杯しよう」林はまずい空気を笑いに変えた。

「そうしよう。乾杯！」奈々子が笑いながらジョッキのビールを飲み干した。

二人が結構早いペースで生ビールを飲んでいった。1時間経つと、生ビールを二人とも2回おかわりした。酔いが回り始めたか、奈々子は普通の女の子に返り、林も大胆になってきた。

「お仕事して何年ですか？」林が聞いた。

「それで私の年齢を逆算するの。内緒にします」

「ごめん。そういう意図がないよ。でも、長く働いたから職場の恋とか、友達の紹介とか、合コンとか、知り合いチャンスがいくらでもあるじゃない」

「林さんは合コンに行ったでしょう」

「それは」林は否定しなかった。

「職場のことなんかじゃないよ。今の会社の男性社員はほとんど管理職しかとってないから、ご当地採用っぽい女の子を上目線でみる

か、遊びの相手しかみてないか」

「ご当地採用っぱいって何のこと」

「建前は本社採用だけど、地元の支社で働き、管理職にはほとんどなれない女子社員さ」奈々子は一息して続けて言った。

「友達の紹介ね。友人の祐子ちゃんも彼氏なし歴3年よ。紹介してくれないよ。合コンは何回行ったけど、あれは女の子と遊ぶ場所になってるじゃない。それ以外は頼りのない男か自信過大の男ばかり。今はほとんどいかない」

酒のせいか、奈々子が愚痴を言い始めた。林は元之と忠司のことを思い出して納得した。奈々子は先より早いペースでビールを飲んでいた。

「酒大丈夫でしょうか」林は何を言えば奈々子を慰められるのかわからなくて、とりあえず酒のことを聞いた。

「心配しないで、これぐらいはだいじょうぶよ。大学の際はその倍を飲んでいた」奈々子の意識がはつきりしていた。

「日本人の女の子をどう思う？」奈々子が興味津々で聞いた。

「日本人の女の子は総じてお淑やか、中国人の女の子は物事をはつきり言うかな。属人的な部分が多く、なかなか言えない」

「お淑やかなね。もし林さんが日本人の彼女を上海の家に連れて帰ったらお母さんが反対されるでしょうか」

「きつとびつくりするでしょう。戦争を経験したおじいちゃんとおばあちゃんがまだ生きているからね。いや、日本に留学してもらってるからそれぐらいの覚悟はあるだろうな。でも、僕が愛した女性だから反対しないだろう」林は想像しながら言った。

「林さんの奥さんはきつと幸せ」

「えっ、なぜ」

「ちゃんと守ってくれるから」

「家はたまたま放任だから」林は嬉しそうに答えた。

林と奈々子はいろいろの話題で話を盛り上げた。気づいたとき、もう一時前だった。

「そろそろ帰らないと、お母さんに怒られるじゃない」林は結構酔っていたけど、奈々子のことに関心を配った。

「そうね、帰りましょう。今日とても楽しかった」奈々子は応じた。

「こちらこそ楽しませてもらったよ」林は礼儀正しく言った。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

2 - 3 昇華 其の1

二人は白木屋を後にした。生ビールを3、4杯飲んだせいか、二人ほどよく酔いを回っていた。林も奈々子も顔が赤く、普段より一回り大きい声で喋っていた。

長雨が止んでいたとはいえ、外はかなり寒く、風も先より強くなった。冷たい風に吹かれて二人一瞬振れあがった。

「送りましょうか」林は言った。

「お願いしてもいいですか」奈々子は林を見て喜んでいた。

二人は市内の方向へ歩き出した。

外環三条の交差点につき、信号を待った。夜の一時とはいえ、三条通は車がまばらに走っていた。信号が青になって、酒のせいか、奈々子は一瞬足下がふらついた。林はすかさず手を出して奈々子を支え、奈々子の手を握った瞬間、感電したような電流が全身走った。奈々子も逃げようとしなかった。二人が手をつないだまま、電気ショックが受けたように静止した。

10秒ぐらい経ったか、信号が点滅になって二人がやっと自分に戻り、手がつないだまま道を渡った。

目の前の男性がタイプではないけど、決して悪い人ではなかったと奈々子は思った。奈々子は熟慮していなく、いや、むしろ考えたくなかったか、運命に任せたいと思った。林はこの偶然の出来事を考える準備もないし、余力も能力もなかった。

二人が手をつないだまま、奈々子の家に向かった。風が相変わらず強いが、二人はそう感じてなかった。寒いどころか、極度の緊張と酒のせいで熱く感じていた。歩道はまだ濡れていて、歩く度に「ぺたぺた」という音がした。それに、風に吹かれた葉っぱの「ヒューヒュー」した音と併せて、調和した伴奏に聞こえた。二人は奈々子の実家までの5分の距離をゆっくり歩いて、終始無言、いや話す必要がなかった。薄暗い静かな路地に身が溶け込み、冷たい風が脳を適度に冷やせ、お互いの温もりが二人のすべてをつながせた。

奈々子の家に着いた。古びた一戸建てで、家の二階にまだ電気が付いていた。おそらく奈々子のお母さんがまだ起きていた。

「これでお休みなさい。長い一日だったね」林は奈々子に静かに言っただけ、手を離そうとしなかった。

奈々子も手を抜く様子もなく、じっと林を見て何かを待つように黙っていた。林は奈々子を抱きしめたかったが、さすがに奈々子の家の前ではできなかった。手をつないだまま、沈黙が続いていた。

「僕の家に来ないか」林は最大限に努力していた目の前の乙女の気持ちを理解していた。

奈々子は林をじっと見つめて黙ったままだった。

二人はまた外環三条交差点に戻った。今日何回この交差点を通ったかを林は分からなかった。

「ちょっと買い物します」林は家近くのコンビニにつくと、奈々子に小声で言って、惜しんだように奈々子の手を離した。二人の手がもつすでに濡れていた。

「飲み物を何にする？」林は奈々子に聞いた。

「お茶」奈々子は一番短い言葉で答えた。

林はお茶とお菓子、それにコンドームを買って、コンビニを出た。二人が出ると、また手をつないだ。

二人が林のアパートに入ると、林は電気をつけた。

「何か飲む？」林は奈々子に聞いた。

奈々子はなにも答えなかった。

「お茶飲むか」テーブルの前に立った林はボトルのお茶を出して、渡しながらも一度聞いた。

奈々子は林の胸に飛び込んだ。

林は奈々子を抱きしめ、頭を横にして奈々子の頭に乗せた。髪の毛から発した奈々子の匂いを肺一杯吸い込んだ。いつもの匂いだっ
た。無言の時間、いや何もいらぬ時間が静かに流れていた。

林は額と鼻に軽くキスし、口と鼻からの奈々子の吐息を感じ、生温かい息が林の口に伝わり、「ハアハア」した音もはつきり聞こえる。林の口づけを待っていたように奈々子の口もとは開いたままだった。奈々子は口が塞がれるのを待つて目を閉じた。林は伸ばした舌を奈々子の口へ入れていく。奈々子の舌が林の舌に従順に従い、口の中で二人がゆっくりと絡み合う。かなりの身長差があつたせいか、奈々子が必死につま先立って林に合わせた。林も二人の身長差

にすぐに気づき、左手が奈々子のお尻を持ち上げ、右手がワンピースのファスナーをゆつくり下ろし、ブラジャーのフックを外し、胸もとに移動して奈々子の小さな乳房の上に添えた。軽く揉むと、小さな喘ぎ声が聞こえてきた。

しばらくすると、奈々子の喘ぎ声が少しずつ激しくなり、キスをやめ、腰を落とし、林の胸に頭を沈めた。林は奈々子の大きな吐息と喘ぎ声に誘導されるように、ワンピースをくぐり抜け、ベージュのパンティに左手を入れた。奈々子の秘部がすでにびしょ濡れだった。秘部がいじられた奈々子はさらに大きな喘ぎ声を上げ、顔が強ばり、組んでいた両手が必死に林の首にしがみつくのが目一杯だった。

林は奈々子を抱き込んで自分のシングルベッドに移した。急いでシャツとパンツとトランクスを脱ぎ捨てた。奈々子はじっとも動かずモウロウとした視線で林を見ていた。

「早く脱いで」林は奈々子の耳元にささやいた。

奈々子はスローモーションのように服を脱ぎパンティを外した。裸になった奈々子の体がベッドに横たわり、なにも隠さずすべて林に任せた。真っ白な体に頬と首が赤くなっていたのがはつきり見える。林は電気を消し、コンドームをつけて、奈々子の秘部に男の1物をゆつくりと挿入した。

「あつ」と奈々子が一瞬腰を上げ、声を漏らした。

「痛い」林は優しく聞いた。

奈々子は頭を横に振り、林を抱きしめキスした。奈々子の目から

こぼれだす涙が林は頬で感じていた。

林は腰を優しく動かした。奈々子が林の腰の動きにあわせて、喘ぎ声を出しながら身悶えして林にしがみつく。1分も経たない内に、林の腰の動きが急に激しくなった。

「もうだめ……」

奈々子は答えなかった。林はうめき声を発したと同時に頂点に達した。

「こんな早くてごめん」林は恥ずかしげに言った。

「いいよ、気にしないで、林さんはよく頑張ったから」奈々子は林を言葉で慰めながらすべて包み込むように抱きしめた。

慰められた林は余計に悔しかった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。

是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

2 - 4 昇華 其の2

二人順番にシャワーを浴びた。

奈々子が戻ってきた時、林はすでに着替えてベッドに横たわっていた。奈々子は先の余韻が残っていたか、頬と首元がまだ赤くなっていた、真っ白な肌が際立っていた。細い腕と狭い肩幅、上半身がかなり痩せていて、これと対照に、下半身の豊満さが非常にアンバランスだった。

「Aカップかな、でも形が悪くないな」林は想像した。

「こんな見ないで、電気を消して」奈々子は愛嬌よく林の横に潜り込んだ。

林は左手を出し腕枕して奈々子を抱きしめ、右足をそっと出し、奈々子が満足げに林の足を股間に挟んだ。

「時間大丈夫、先家に電気がついていたよ」

「帰ってもらいたいの」

「いや、そんなことはないよ」

「大丈夫よ、適当に理由をつけば大丈夫。もう27だから」奈々子がすっかり年齢を言ってしまった。

「27才か、僕30だからちょうどいいちゃん」

「酒本さん…」語呂が悪く感じて話を途中でやめた。

「ナナと呼んで、林さんは何を呼ばれたい」

「林君とか、アキ君とか、アキとか呼ばれてるけど、本名はリン
ミヨーケイ、尼さんの法名に似てない」

奈々子が「プツ」と笑った。

「子供の時、ミンミンとよばれてた」林が付け加えた。

「そうね、ミンって呼んでいい」

「いいよ」

林は片手が奈々子の髪の毛をもてあそび、もう片手が奈々子の左
右の乳首をつまんで遊んでいた。

「僕がナナの好きなところって知ってる？」

「大きな目かな」奈々子がちよつと考えた。

「違う」

「白い肌かな」

「また違う」

「もしかしたら体毛フェッチ」

「こんな趣味ないよ」

「丸いお尻かな」

「そうではないよ。嫌いではないけど」

「じゃ何、教えて」

「ナナの匂い」

「香水を使っていないし、体臭がきついって言われたことはなかったよ」

「体臭が好きって変態じゃん、そんなことはないよ。ネットで調べたんだ。女性フェロモンっていうやつかも。女性なら誰もフェロモンが出すが、特定の男性に惹かれるって書いてあった。もしかしたら僕たちが運命の糸で結ばれていたかも」

奈々子は幸せそうに微笑んだ。

「それで脳が勝手に一目惚れしちゃった」林は付け加えた。

奈々子は林の顔を軽く撫でた

「僕のどこが好き？」林が聞いた。

「全体かな、おもしろいところ大好き。大げさに表現したところって今も笑える」

「初耳だ」

「ミンって凄く優秀じゃない。彼女がいるじゃないって本気で思った」

「上海に帰ればね。ここは日本。日本の女性って中国人に対して基本的に一歩引いてるから、言われることはないけど」林は美里のことを急に思い出した。

「そうかな」奈々子もおもい当たるふしがあった

「でも、日本の女性は白人に対してものすごく積極的らしい。K大の時、ドイツ人の同級生がやたらにもてたよ。あんなケチな奴なのに。白人男性が好みになった理由は男のモノが大きいじゃないかって中国人男子留学生がみんな信じてたよ。コンプレックスかな」

「あれは違う。英語がしゃべれるから格好良く見えるかも、確かにコンプレックスかもね」

「最初にミンに出会ったとき、日本人の大手のエリート社員と思っただ。いままで何人か大手の男性と付き合ったけど、みんな上目線で女を馬鹿にしてる。ミンはとても優しい」

なぜここまで相手を積極的に求めていたか、ということは奈々子自身も分からなかった。大学卒業まで奈々子が男を困ったことは一度もなかったし、それどころか一度に二人の男性に告白され困った経験があった。だが、仕事が忙しいのも理由だけど、就職してから5年間本当にさっぱりだった。合コンで知り合った男性にセフレにならないかと言われて本当にショックだった。その後、親戚と友人から紹介された3人の男性はみんなちゃんとした所に勤めたけど、ベッドインしたのが一人、しかも一回のみだった。「俺と寝たい女が沢山いるぜ」というメールが翌日に送ってきたとき、奈々子が怒

る位置を超えてしまった。なぜここまで男運が悪いか、いつも悔や
んだけど、親友の祐子も会社の同僚も、同じく売れ残りが結構いた。
「ナナって株の銘柄のように男を評価してるから、近寄らないじゃ
ない」と親友の祐子に言われたとき、「あなたには言われたくない
よ、私だって仕事が好きだけど、恋愛も楽しみたくてたまらないよ」
と内心苛ついた。5年ぶり、いや初めての大人の恋愛に遭遇した奈
々子は、理性と乙女の矜持よりも、バリユー株を買い損なわないよ
うに体が勝手に先走りした。

林も初めての大人の恋だった。今までそれなりに女性と付き合っ
たことがあったけど、日本人女性とは一度もなかった。可愛い子は
もちろんいたけど、気持ちが好きになる前に、相手の親にどうみら
れるだろうか、習慣や食べ物などきつと困るだろうか、といっ
た障害を勝手につくりだし、ずつと身を引いていた。奈々子に出会
った瞬間、彼女の匂いに完全に占領され、一目惚れになってしまっ
た。常に応えてくれた奈々子の前に、林には逃げ道がなかった。

奈々子はさらに林に寄りかかり、口を差し出し、左手をそつと滑
らせ、林のモノを包み込んだ。林はつかさず奈々子を抱きしめ、手
の指を奈々子の秘部に入れ、耳元でささやいた。

「愛してるよ」

奈々子はまた泣き出し、林のモノを先より強くつかみ上下動いた。
林のモノは蘇った。林は口を奈々子の目に当て、舌で涙を舐め込ん
だ。奈々子の呼吸が大きくなり、生温かい吐息と彼女の匂いが林の
全身を刺激した。素早くゴムをつけ、奈々子の体に重ね合わせた。

安物のシングルベッドから「ギチーギチー」という音と奈々子の
あえぎ声が林のアパートを充滿した。無我夢中に求め合う二人が、

暗闇に溶け込まれ、時間も空間も静止したような境地にもがくことすらままならない。

「もうだめ」

「いつていいよ」奈々子が優しく言った。

林の激しい腰の動きに合わせて、奈々子が身をすべて差し出し、二人のうめき声と同時に体が固まり、山の頂点からふわふわした雲の上にゆっくりと落ちてゆく。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

2・5 朝の眉毛事件

林が目覚めた時、もうすでに11時すぎだった。ベッドの横に見ると、奈々子がいなかった。

「おはよう」奈々子が目覚めた林に台所から声を掛けた。

「おはよう、今何時」林はあくびしながら奈々子に聞いた。

「早く起きて、もう十一時すぎよ」奈々子が催促した。

奈々子は朝食の支度をしていて、横顔しか見えなかった。シャワーを浴びたか、濡れた髪に林のシャツを着て、パンティが微かに見える程度で、林はすごくセクシーに感じた。

「ごめん、片付けてくれたんだ。夕べ急いで英会話教室に行ったから片付けなかった」林は綺麗になったテーブルを見て言った。

「朝食の準備できたよ」

奈々子が林に体を向けたとき、林は我が目を疑った。奈々子の顔には眉毛がなく、元もと肌が白いこともあってまるで源氏物語の人物だった。さすがに聞けなくて、

「先にシャワーを浴びるよ」と不思議な顔をしながら急いでバスルームに入った。

「別人ってわけないだろう。夕べは確かにあったよ。なかったけえ」林は記憶を探りながらシャワーを浴びた。

バスルームを出たとき、テーブルの上に目玉焼き卵と焼きパンと牛乳はすでに並んでいた。林は台所で皿洗いした奈々子を背後から抱きしめ、匂いを嗅いだ。

「確かにナナの匂いだ」と内心確認したあと、「ありがとうね」とやさしい声を掛けた。

奈々子は首を回して口づけした。

「口に合うかな」奈々子が林に訪ねた。

「ナナがつくったからまずくないよ」

林は奈々子の目線を避け、黙々と目玉焼き卵を食べ、頭の中に奈々子の眉毛のことから離れなかった。

「何かあったの、それでも料理が口に合わない」奈々子が不思議そうに林に聞いた。

「なにもない」林はやはり我慢できなくて軽い弾みで奈々子に聞いた。「眉毛は？」

「私の眉毛のことで先から独り笑いつてたの。なにかおかしいことでもあった」奈々子が理解不能で戸惑った。

「タベ眉毛があつたよね」

「ああ、あれは描かれたモノ。先シャワーで落としたよ」

「ナナ肌白いから、なんか源氏物語の人形さんみたい」林がつい

に我慢できなくて声を出して笑った。

「源氏物語の人形みたいって、ミンひどいよ」奈々子は怒りっぱい口調で話した。

「ごめん。からかうつもりはないよ。女性の化粧の常識が知らないだけ、ギャップに結構びっくりしたよ」

奈々子は俯いて黙っていた。

「後で化粧していつもの綺麗なナナの顔をみせてね。お願いします」林は奈々子をあやした。

褒められた奈々子が微笑みに戻った。

「料理口に合うの？」

「もちろん最高にいいよ、毎日作ってもらいたいなあ」林は大げさに褒めた。

食事の後、奈々子が化粧をしはじめた。林は特にやることはなく、奈々子の化粧の全光景を注意深く見ていた。変わりゆく奈々子の顔に何度も目を丸くした。

「これからどうしよう」化粧が終わった奈々子に林が聞いた。

「一回帰らないと」

「それはそう。送りましょうか」

「近いからいいよ」

「分かった。後で電話して」

濃厚なキスをしてから、奈々子は林のアパートを後にし、自宅に帰った。

林は特にやることはなく、音楽を聴きながら今までの出来事にふけていた。

第3章 進化

月曜日、林は結構忙しい一日だった。帰りの電車に乗ったのは七時半ぐらいだった。アパートにつくと、奈々子のメールが届いた。

「昨日、返事できなくてごめん。今もう家についたの??？」

「今ついたばかり、弁当たべてるよ。今どこ？会いたかったけど」

「家よ？今日は無理(; ;) 本当は会いたくて」

「無理しないでいいよ。愛してるよ？」林が踏ん張って初めてのハートマークをつけた。

その後、奈々子からメールはしばらく届いてなかった。

再度、メールが届いたのは十一時すぎだった。

「お(^o^) や(^o^) す(^。^) みい(^-^)

ノ」だけだった。

林もすぐに返事したけど、ちょっと腑に落ちなかった。

水曜日の夕方、林はいつもより早く仕事を片付け、六時半に電車に乗った。

山科駅ホームについた時、奈々子の電話がかかってきた。

「今日また残業、英会話教室は多分いけないわ」

「それは残念ね、何時ぐらい終わるの」

「わからないけど、いつもなら八時ぐらいで終わる」

「今日会えるの」

「終わったら会おう」

「終わったらメールして」

「分かった。メールするよ。いかないと上司に怒られる」

「じゃ、またあとで」

「バイバイ」

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

3 - 1 二人の家庭事情

林は携帯をマナーモードに設定し、駅前の牛井屋で軽い夕飯を済ませ、英会話教室に向かった。

授業中何かも携帯を見た。授業の終わり頃、奈々子のメールがやってきました。

「これから地下鉄に乗る。待っててね？」

授業が終わった後、林は地下鉄（京津）山科駅の切符売り場で待っていた。

10分ほど経つと、奈々子が駅から出てきた。

「お待たせ」奈々子が嬉しそうな顔をしていた。

奈々子は今日私服だった。長袖のしま模様ニットワンピースにニットの帽子、グレーのエナメルハイヒールサンダルを履き、大きなバーバリーのチェックの鞆を持ち、メガネをかけていた。

「お疲れ様、残業大変じゃない」

「そうね、前に手がけたIPOの新興企業が、銀行の追加融資に断れ、上場を断念することになった。その後始末を今しているから、先週から特に忙しかった」

「今日もメガネ。目が充血してるよ」林はすかさず奈々子の手を握って心配そうに言った。

「パソコンを毎日見てるから、そうなるよね」

「夕飯食べたの」

「まだけど、ちょっとパンをかじっただけ」

「どうする？」

「夕飯家で食べる、お母さんと約束したから」

「この間、お母さんに怒られたの」

「それはそうさ、怒られたよ」奈々子は少女のように無邪気に笑った。

「僕のアパートにこない」

「今日は無理ね、土曜日泊まりに行くよ」

「でも、ナナを抱きしめたい」

奈々子は黙っていて林についていただけだった。

いつものコンビニを寄り、林は奈々子を家に連れていた。

林と奈々子は熱いキスを交わしたあと、ベッドインした。

結局、奈々子を家まで送ったのが十二時前だった。

気がつくと、付き合ってから二ヶ月すぎた。季節も秋から冬になった。林と奈々子の交際は順調に進んでいた。二人が青春を取り戻すように、週二回のペースで林のアパートで熱い愛を交わした。林は少しずつ奈々子の性格を知ることになった。多少のわがままの性格は林にとっては許せる範囲、頑張り屋という性格がかなり好きだった。掃除、洗濯などの家事は完璧にこなし、多少の潔癖とも言えるほどだった。今の仕事が好きで結婚しても続けたい。「稼いだお金を家計に入れるから家事と育児を手伝ってね」と林に無理矢理認めさせた。料理に関しては到底上手とはいえない。それほど裕福とはいえない家庭で育てたか、今の仕事で生きるすべを身につけたか、ケチではないが、お金を使うにはかなりの計画性を持っていた。林が奈々子を愛してやまないもう一つの理由は奈々子が見た目に寄らずかなりのエッチ好きだった。毎回のようにな精一杯応えてくれた奈々子が林の男性本能を刺激し、時には彼女に癒しをもとめていた。それと同時に、奈々子の家庭事情も知ることになった。奈々子は二人兄弟で、5才上の兄がいった。奈々子が10才の時、両親が離婚した。その後、父が再婚をし、二人が父にあったこともないし、今は奈々子だけ年に一度ほど電話をかけるくらいだった。父からの養育費と母のパートのお金で兄弟を苦労して育った。奈々子の母は兄弟にかなり厳しく接していた。勉強のことももちろん、すべてのことも厳しく要求されていた。苦労したおかげで、兄は神戸の国立K大に進学し、奈々子は関西の有名私立D大に進学できた。兄はK大を卒業したあと、有名なY新聞社にカメラマンとして就職し、5

年後退社し、フリーのカメラマンとして世界を飛び回っている。奈々子も兄とほとんど連絡を取れず、年に1回か2回ハガキか電話で実家に連絡する程度だった。奈々子は高校まで母におびえながら生きてきた。大学時代になつてからは、親子の関係もよくなり、就職した後は奈々子のことにより口を出さなくなった。林は奈々子が母におびえていることを何度も感じていた。

林も兄弟二人、姉がいた。姉が結婚してから親元を離れ、今は林の実家に親二人が住んでいた。みんな上海にいて、特に気を使う必要もないので、奈々子は林の家族のことを気にしてなかった。林が興奮すると声が大きくなることに奈々子が何度か指摘した。中国人という理由か、長く一人暮らしというか、林は料理がうまく、その上、奈々子の手料理に口出しもしたりする。奈々子にとって、折角作った料理に文句を言われると腹立つのが当然だが、プレッシャーでもあった。熱愛している二人にとっては、多少のすれ違いはさほど問題にならなかった。わがままを言っても、林がいつも許してくれる包容力と優しさに奈々子が十分に満足している。もし林が日本人であれば自分と付き合うことはないだろうなという劣等感を奈々子は抱いていた。

十二月の中旬の土曜の夜、林と奈々子はいつものように英会話教室に通った。授業が終わった後、林のアパートに行った。家に着くと、奈々子が話を切り出した。

「今度のクリスマスどうしよう」

「どうしたい。ナナと一緒にいればなんでもいいよ」

「ユーちゃんがミンに会いたいって言ってた」

「ナナが大丈夫なら、僕は別にいいよ」

「じゃ3人クリスマス・イブでパーティしよう。それでいい」

「ええ、イブの日」

「彼女が是非ミンを会いたいって、それに、彼女が一人者で寂しいからイブにパーティしよう」と提案されたの。私うっかりはいと言

ってしまつたの。頼みます」奈々子は声を高くしてねだつた。

「ナナがオーケーを言つちやつたから、反対できないでしょう」

「ありがとう」奈々子が林の頬にキスした。

「来年二人で過ごそうね」

「いいわ。海に見えるホテルにしよう、いや、景色が一望できる温泉旅館にしよう、ハワイでも悪くないね」奈々子が乙女ティックに妄想しながらゆっくりと話した。

「決めたら教えて、予約とるよ」横にいた林は滅多にない奈々子の乙女劇場を微笑みながら面白そうに見ていた。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

3 - 2 イブの祐子劇場

十二月二十四日 日曜日

冬型の低気圧に覆われ、寒くてすつきりしない天気だった。

その日の予定はまず地下鉄東西線の榊辻駅の近くの洋食屋で食事し、その後は林の家でパーティする予定だった。二人は午後から奈々子の実家の車を使って買い物し、夜のパーティの準備をしていた。午後五時半頃、二人は歩いて洋食屋についた。祐子がまだ来なかったから、二人はコートを脱いで予約したテーブルについた。

「遅れてごめん」高いトンの女性の声とともに祐子が現われた。

「はじめまして。林と申します」林は自己紹介した。

「初めまして。祐子です」祐子は声が小さく恥ずかしげに言った。
「どうぞ、かけて」奈々子が話した。

林の第一印象は祐子がかなりの美人だった。奈々子より祐子の方が身長が高く、たまご型顔にそれほど大きくない目と鼻がバランスよく揃っていた。笑うと、目が三日月のようになり、切れに揃った歯がその白さを競い合うように輝くほどだった。黒のハイヒールにベージュピンクのフォーマル的なドレス、細くて白い首に真珠ネックレスをつけ、肩までの茶色のロングヘアがふわふわとしたゆるいウェーブ、おとなっぽい女性を演出しつつも、可愛さも静かにアピールしていた。化粧も入念にされたか、隣のラフな奈々子が田舎っぽく感じてしまった。

祐子は奈々子の高校のクラスメイトで部活も一緒だった。高校を卒業した後も、親友として二人はずっと付き合い合っていた。東京の私立大学の文学部英文科を卒業した後、大手の流通グループに就職した。大手とはいえ、結局やっていた仕事はショッピングセンターでの販売だけだった。仕事にやりがいを感じず、2年ほど辞職した。その後色々と仕事をしたが、今でいうパラサイト・シングルだった。三人がコース料理を注文し、祐子のお気に入りのワインも注文し

た。

初対面なのか、恥ずかしがり屋なのか、祐子は林に声をかけず、ほとんど奈々子と話していた。内心結構目の前の友人の彼氏に対して興味津々で、何度も奈々子と話しているふりして、林を盗み見していた。林もただ料理を楽しんで、時に二人の会話を面白く聞いたりして、ほとんど無口だった。

しばらくすると、祐子が奈々子に合図してお手洗いに行った。

「先、祐子がミンのこと凄く褒めたよ」奈々子が嬉しそうに言った
「そうかな」

「賢くて優しいって、なかなかの好青年」

「それはナナ自分が自慢したからじゃないの。初対面だから知るわけじゃないじゃない」

「言ったかな。でも、凄く羨まわれてるよ」

「それはそれは。僕じゃなくてナナが羨まわれてるじゃない」林は軽く突っ込みを入れた。口が否定したけど、顔は嬉しさ全開の笑顔だった。

奈々子が乙女ティックに微笑んで、グラスを持ち上げ、ワインを一口飲んで答えなかった。

「祐子さんって本当に美人ね。二人が一緒にいるとギャップが大きいな」奈々子の調子乗った顔を見て林が突っ込みたくなった。

「私が可愛くないっていうこと。乗り替える気か」奈々子がわざと怒りっぽい顔をした。

「乗り替える度胸なんかないよ、間違いなく女王様に殺される」林が声を出して笑った。

「そうにしよう」奈々子も冗談で返してきた。

「そうではないよ。僕にとってナナがすべて一番よ」林は皮肉っぽくフオーした。

「彼女が本当に美人で、高校の時、マドンナだったよ。告白のラブレターが親友の私を経由して何通も彼女に渡したよ」

「醜いアヒルの子が白雪姫に勝ったのをお披露目したいんだ」林

がまた突っ込みたくなった。

「私もラブレターを沢山もらったよ」奈々子が林の突っ込みに施すすべもなく、小さな口をちよつと歪んで強がりをつた。

「信じるよ。ナナが本当に可愛いよ」まるでご機嫌斜めの子供をあやすように林は言った。

「祐子さんは歯が真っ白、輝いているね。」林は話題を変えて祐子のことを訪ねた。

「前は確かに白いけど、そこまで白くなかったと思う。また手入れしたじゃなかった」

「仕事してないから生活は」

「彼女の実家は建築屋、お父さんとお母さんが経営しているから、昔かなり金持ち、今はよくないって彼女が言ってたけど。でもエステとかよく通ってるよ」

祐子がなぜ結婚できないか、林は分かったような気がした。

祐子が帰り、奈々子とのギャルトークがトンの高い笑い声とともに永遠に続き、林に入らせる隙間はどこにもなかった。気がつくともう八時前だった。勘定して、3人がタクシーを拾って林のアパートに向かった。

パーティは始まった。料理は奈々子がつくった鍋と総菜何品だけだった。

缶ビールをあけグラスに入れてから、

「乾杯しよう」奈々子が言った。

「乾杯！」3人が声を上げた。

「林さんは本当に立派ですね。奈々子が羨ましいですよ」祐子が初めて林に話をかけた。

「それは褒めすぎですよ」林は謙虚に答えた。

「彼、怒ると怖いよ」奈々子が一言を挟んだ。

「でも祐子さんも凄い美人だから、男がほつとくわけないでしょ

う」林は褒め返すつもりで言った。

「美人ね。いい人がいれば紹介してください。最近男運が悪いですよ」

「前の彼氏は、あの職場の背の高い格好いい男の子はその後どうなったの」

「彼先月職場の別の子と結婚しちゃった」

奈々子が余計なことを聞いてしまつて後悔した。祐子は泣きそうな顔をしていた。

「よりを戻すつて言ったでしょう。なぜ急に他の子と結婚しちゃつたの」奈々子が仕方なく続けて聞いた。

「私が物いりから、彼の給料じゃやっていけない」祐子が無力に答えながら、グラスのビールを一気に飲んだ。

訳分らない林を見て、奈々子は経緯を説明した。

「前に勤めた会社ね、ユーちゃんが格好いい男性と付き合つたの。その後、別れちゃつた。ユーちゃんがずっとその男性が好きでひきついていた。別れた後も何回か連絡してよりを戻したいって彼にいったけど、はつきりしない関係が2年ぐらい続いていた。ユーちゃん間違いないでしょうね」奈々子が最後に祐子に確認した。

祐子が俯せたまま頭を縦に振り、声を出して泣き出した。

急に泣き出した祐子に奈々子と林が戸惑つた。

「男は彼だけじゃないよ。ミンはS社の同僚を紹介するつて」

林は奈々子のリクエストが初耳だつた。場の空気を讀んでしまつたせい、か、「ハイ」と本能的に答えた。

「慰めないで」祐子は急に手で顔を拭いて、横にあつた缶ビールを一気に飲んだ。泣いたせい、か、手で拭いたせい、か、アイシャドーの粉が顔全体に行き渡り、白い顔の上に何本の黒い線ができて、まるで水墨画のようだ。

林は祐子の顔を見て笑いこらえた。横にいた奈々子は申し訳ない顔で林を見た。

これからは祐子の一人劇場だつた。泣いて笑い、酒を飲み、叫ん

だりしていた。洋食店でのお行儀のよいお嬢さんが綺麗さっぱり消えてしまった。林と奈々子はなすすべを知らなかった。

結局、祐子がタクシーで自宅に帰ったのは一時すぎだった。

「ごめんね、今日のユーちゃんをはじめて見た」皿洗いしていた奈々子が無力に言った。

「ナナのせいではないから、気にしないで」林は奈々子を慰めた。
「何とか男を紹介してあげなくちゃ、ミンの忠司先輩を紹介したら」

林は乗る気ではなかった。ただ「ハイ」と答えるだけだった。

林は背後から奈々子を抱きしめ、首に軽くキスした。

「早く帰って休んだら、明日仕事だろう」

「ミンのところに残っていい？ミンのそばにいたい」奈々子は頭を林の肩に寄せた。

……

後味の悪い初クリスマス・イブだった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

よければぜひコメントをください。

3 - 3 結婚への決意

2001年になると、林は輸出部の営業四課に所属するようになった。仕事は中国市場の開拓と通訳の両方であった。

その後、仕事が急に忙しくなって、特に水曜日が七時半に英会話教室に着くのが難しくなった。奈々子も同じく水曜日の授業が来たり来なかったりしていた。土曜日は二人がデートも兼ねて毎週出ていた。

「半年の授業は身につけるものがほとんどなかったね。お金の無駄だったかな」奈々子が林に悔しそうに言った。

「英会話はほとんど身につけてないけど、ナナが身についたからお金の無駄ではないと思うよ。」林の答えは奈々子の笑いを誘った。

2001年の2月中旬頃、林、奈々子、忠司と祐子が4人一緒に食事した。林は祐子を忠司に会わせるのが最初から乗る気がなかったが、奈々子に強要され、いやいやながら食事を設定した。その後、二人がしばらく交際した。しかし、3ヶ月後に二人は普通の友達になったよと忠司から聞いた。林はその結果を最初から納得していて、それ以上詳しいことを聞かなかった。

林と奈々子の関係は順調に進んでいた。平日は一回ぐらい一緒に食事したり、飲みに行ったりして、土日の一日が林と一緒に過ごすのが日課になった。海外への旅行はまだ行ったことはなかったけど、日本国内の色々なところに出かけていた。喧嘩は何回かしたけど、それほど問題になっていたのではない。奈々子は結婚を意識するようになった。「三十まで結婚するって昔からの夢」とか、「最近同僚のなににちゃんが結婚した」とか、「結婚したい」を直接に言ったことがなかったけど、「結婚」という単語が奈々子の口からよく出たようになった、ということは林が感じていた。林はもちろん奈々子の気持ちを分かっていた。林はゆくゆく奈々子と結婚することと考えていたけど、最後の一押しがなかったか、奈々子の「結婚」

という単語につづきを言わなかった。

2001年の春から小泉政権が誕生したあと、靖国神社参拝などの問題で日中関係がぎくしゃくになった。日本国内の嫌中感情と中国反日感情がマスコミとネット世論の煽りに相まって、林にも暗い影を落としていた。S社の社内では、林の声価が高く、少なくとも林の前に中国の悪口を言う人はだれもいなかった。しかし、会社が出ると、中国人という国籍が分かっただけで、決して直接的に言葉と行動で表すことではないが、嫌な雰囲気になってしまふのが林は何度も経験した。出張で中国に帰ると、靖国神社がどんなところであるか、なぜ小泉が靖国神社の参拝に拘るか、といった質問はしょっちゅう聞かれていた。「君は優秀だし、中国人だろう。日本の会社じゃなくてうちの会社で働かないか」というオファーが取引のある中国企業の社長に言われた。林は基本的に中立的な立場にするか、無視するか、そういった敏感な日中間の問題を避けていた。奈々子は林の微妙な立場を理解しており、たまに林が鬱憤払いで文句を言ったとき、黙って林の話を聞いてあげた。日中関係の緊張はS社の中国市場での事業開拓に大きな障害となった。日本企業と聞かれるだけで門前払いされたのが林は何度も経験した。飲料事業は早い段階で進出しブランドも浸透したから、順調に売上を伸ばしたけれども、薬品関連などの事業は鳴かず飛ばず状態だった。

四月上旬の土曜日の午前中、林はいつものように奈々子と過ごしていた。

「今度のゴールデンウィークはどこに行きたい」林はパソコンをいじっていた奈々子に話をかけた。

「海外にいきたい。テーブルにパンフレートを持ってきたから見て」

「どこがいい」

「4日間しか連休とれないから遠いところはいけないよ」

林はテーブルにあったパンフレートをパラパラとめくったと、束

の最後に何枚の結婚式場のパンフレートと「ゼクシイ」という結婚情報誌を見つけた。その意味は言うまでもなかった。林は雑誌を取り出し、無意識的にめくった。

「上海に行きたくない」林は急に奈々子に言った。

「もちろんいいよ」奈々子は林の実家がある「上海」に行く意味が十分理解していた。パソコンをやめ、林に顔を向けた。

実は夕べ、林は上海にいる姉から電話をもらった。お父さんの持病の高血压が最近非常に不安定になり、先週一週間ほど入院した。命には別状ないけど、林は親の死を意識しなければいけなくなった。

「おいで」

林の横に座った奈々子の手を握り、ゆっくりと聞いた。

「僕と結婚したいの」

「あれは同僚の麻実ちゃんからもらっただけよ」奈々子は林の手に持った雑誌を見て蛇足を加えた。

しばらくすると、涙ぐんで言葉を詰まらせながら言った。

「ミンならついていけると思った。でも、ミンを急かすつもりないけど」

林は胸に奈々子を抱きしめ、頭をなで下ろした。

「もちろん僕もナナと結婚したいよ」

林は決心してようやくこの言葉を口にした。別に奈々子と結婚したくないではないけれども、いざ決断を迫られたとき、何か今まで大事なモノを失ってしまうような漠然とした心の空しさを感じ、奈々子のほのめかしに今まで逃げてきた。

「ナナは俺の女だ」と林が清々しく思った。

「別にすぐ必要はないけど、ナナと結婚するという言葉をミンの口から言ってもらいたい」奈々子は林の胸の中に泣きじゃくっていた。

「子供は何人ほしい」

「ミンが何人ほしい」

「二人かな、俺みたい男とナナみない可愛い女の子」

「二人にしようね」

「でも、きつと家事を一杯やらされるな」林は冗談のつもりで言った。

「そうね。ナナ働くから、家事をしてもらう代わりに、給料は全部家計に入れるよ。中国式にしようね」奈々子がまじめに話した。奈々子が付き合う前に交わした言葉をすっかり覚えていたことに、林は正直びっくりした。

「上海に行く前に、お母さんに会ってみないか」

奈々子のお母さんが奈々子と林との付き合いに反対されている、ということは林が知っていた。でも、自分が人の娘をもらうから、いずれ頭を下げて行かないといけないのも分かっていた。

「いいけど、びびるだろ」

「ナナのためと思ってね」

「前の日からきつと寝れないな。今日から酒飲もう」

「ミンはこんな臆病には見えないよ。心配しないでナナがそばについてるから」

奈々子が微笑みながらキスを求めてきた。

翌週の日曜の夜、林が奈々子の家で食事することになった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

コメントをいただければ嬉しく思います。

第4章 挫折

4月の中旬とはいえ、シャツ一番だけはちよつと肌寒い天気だった。先週あいにくの雨、花見を見に行くチャンスを損なつた。出かけるのが絶好の日和だったが、林と奈々子はそれどころではなかった。二人は朝から就活の面接会のように、勝手に色々な状況を想定して対策を講じてきた。緊張し一生懸命にやっている林を見て、奈々子は言葉では表せない爽やかな気持ちだった。

日曜の午後5時ぐらい、奈々子に連れられ、林は奈々子の自宅に向かった。

「お邪魔します」林は玄関で挨拶してリビングに入った。

古びた一戸建てだった。玄関に入ると、広めのリビングが現われた。古い皮ソファセットが壁に沿って置かれ、その真正面に旧式大型テレビがテレビ台の上に立っていた。リビングの隣に和室があつて、その真ん中に大きな高級和風テーブルセットが置いてあつた。全体が古く感じ、壁紙があちこちシミと汚れが目立っていた。しかし、部屋全体は物が多い割にきちんと整理整頓されていた。時々、庭にあつた犬小屋から犬の鳴き声が伝わってくる。台所の匂いか、飼い犬の匂いか、建物の老朽化の匂いか、それともすべてが混ざり合つた匂いか、いままで嗅いだこともないような匂いが部屋中に充満し、林の鼻と頭を刺激していた。テーブルの上にすでに置ききれないほどの料理が置いてあつた。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

4 - 1 初めての挨拶（前書き）

「いらっしやい、ソファにかけて」台所から奈々子のお母さんの声が伝わってきた。

林は背広の上着を脱ぎ、持ってきたお土産をソファの横に置いて立ったまま部屋中を観察していた。

4 - 1 初めての挨拶

「いらつしゃい、ソファにかけて」台所から奈々子のお母さんの声が伝わってきた。

林は背広の上着を脱ぎ、持ってきたお土産をソファの横に置いて立ったまま部屋中を観察していた。

「よく来たぞ。こつちに来なさい」和風テーブルの椅子に座った中年男性が林に話をかけた。

「初めまして、奈々子の叔父の正道です」中年男性が自己紹介し、座ったまま林に軽くお辞儀した。

「初めまして。林と申します。宜しく願います」林は深く一礼して自己紹介した。

「緊張しなくて結構、座りなさい」中年男性が京都弁なまりで標準語を喋っていた。

中年男性は奈々子のお母さんの弟で、京都市内に和服の用品店を営んでいた。奈々子の親が離婚した後、叔父が時々奈々子の家に顔が出し、子供の時から奈々子をよく馬鹿にしている、奈々子は叔父に好感を持っていなかった。叔父が袴姿で、小太りの体格に丸い顔、整髪剤で髪をオールバックにきちんと揃っていた。黒い金属製の丸いメガネをかけ、肉付きのよい頬がつやよくピカピカと光っていた。

叔父の隣に奈々子が座り、その横に林が座った。

ちょうどその時、奈々子の母が台所から来られ、奈々子の向こうの椅子に腰をかけた。

「奈々子の母です。奈々子がいつもお世話になっております。宜しく願います」奈々子の母が話した。

奈々子の母が袴に白い割烹姿で、小柄で卵形顔が奈々子とそっくりだった。化粧が濃く、顔が真っ白で、頬骨が高く張っていた。真っ黒の髪の毛が巻き上げられ、その真ん中にカンザシを一本で止めていた。耳に心地のよい声の割に、顔には笑いが一つもなかった。

「こちらこそ、奈々子にお世話になっております。お忙しいところ、私のため、こんなに多くご馳走を用意していただき、本当にありがとうございます」林は事前に用意した紋切り型の言葉で挨拶した。

乾杯した後、しばらく沈黙が続いていた。

「林君がS社に勤めてるの」中年男性が切り出した。

「そうです」林は短く答えた。

「S社はなかなかrippana会社」

「会社は立派かもしれないけど、僕はそれほどではないです」

「奈々子とどのくらいお付き合いしていたの？」

「2000年の十月から約1年半ぐらいです」

「そう長くないな。どこでお知り合いになったの、友達の紹介かね」

「違います。山科駅前の英会話教室で知り合いました」

「そうか。林君の日本語が上手な」

「ありがとうございます。日本に来てもう10年も経ったので、それぐらいはたいしたことではないです」

「たいしたものですよ。わしの知り合った中国人がみんな10年経っても日本のことさっぱりわかってない。君は特別だ」

「お知り合いはどんな方は分かりませんが、僕は特になにか特別な者ではないです」

「君は中国のどこの辺」

「上海です」

「なかなかの大都市じゃない」

「大都市だけど、僕は京都みたいところがちょうどいいと思います」

「兄弟は何人」

「兄弟は二人です。上に姉がいます」

「親はご健在」

「ええ、父と母は上海にいます」

「お父さんがまだお仕事をしてらっしゃるの」

「二人とも定年退職しており、今は老後を楽しんでいます」

「それは林君の結婚を楽しみにしてるだろうな」

「その通りだと思います。何回もほめかされていました」

「林君は今会社で何のお仕事をしているの」

「主に中国市場の開拓です」

「中国の市場も有望だし、S社をやっていることだから、うちみたい小さい商売じゃ比べるようがないな」

「それは」

林は尋問されたように緊張していて、終始俯いてできるだけ簡単な言葉で答えた。酒も料理もほとんど進んでなかった。普通の会話が続いたから、林も少し緊張を解けていた。

「奈々子はわし唯一の姪。うちも男二人。子供の時からずっと奈々子を可愛がっていた」叔父が話題を変わった。

「絶対奈々子さんを大事にします」

「でも、結婚というのは、ちょっと古い考え方かもな、ワシは家族の結婚でもある」

「その通りです」林は相手が何を言おうと分らないので、とり

あえず相槌を打った。

「でも、相手が中国人であることはちょっと考えにくいな」

林は一瞬耳を疑った。聞く勇氣もなく黙っていた。

「過去に確かに戦争があつたとはいえ、日本は巨額のODAを払ったじゃない」

林は黙っていた。中年男性が言い続けた。

「靖国神社はお国のために命を捧げた英霊を眠るところ、小泉首相が参拝するのがごく普通や。それは日本の文化。中国人はそれを到底理解できないだろう」

林は心の中腹立つようになってきたが、冷静を装って静かに聞いた。説教が続いた。

「それに、中国人ははつきり言つて民度が低いわ。列に並ぶことは知らないし、礼儀もしらない。その上強欲。今は多少発展したが、民度の低い国家はいずれ崩壊する。ワシはそう思う」

林の内心は穏やかではない。その怒りがすでに顔に出ていた。横にいった奈々子が片手を出し、林の手を強く握った。中年男性の悪口がまだ続いていた。

「中国は日本の恩を仇で返し、こんな独裁国家がワシ大嫌い。林君が優秀だから、日本の水を10年も飲んでたから、早く中国の国籍捨てなさい。林君も反日教育を受けただろう。日本に来て見たから、全く違つだろう。あんな教育あかんわ」

「中国のことはどうであれ、林さんは別ですよ」そばにいた奈々子が我慢できなかった。

「大人が話してるから、子供が黙りなさい」ずっと話してなかった奈々子の母が厳しい口調で奈々子を叱った。

「ワシが中国人と親戚になるのがまっぴらごめんだ」

中年男性が一口酒を飲んで、穏やかな口調で話を続けた。

「君ら二人まだ若い、結婚などのことを考えるのがまだ早い」

林の頭の中は真っ白になった。反対されるのが覚悟したが、そこまで中国人を蔑視するのが到底考えたこともなかった。横にいた奈々子も涙ぐんでただ茫然としていた。今日のすべては奈々子のお母さんが娘の結婚を反対するために、仕組んだ罠だと林は悟った。その後、何が言葉を交わされたのがまったく覚えてなかった。ただただ、この場から逃げたくて、それだけを考えていた。

林にとっては日中のぎくしゃくした関係に巻き込まれるのがある意味では運命的な定めだった。たまに奈々子の前で強がりと言ったりするが、林の一番繊細な所でありながらも解決しようもない問題だった。今までむしろ逃げられない運命に見ないふりをしてきた。林は一番繊細な所にストレートに矢が刺された痛みと苦しみに到底対処しようもなかった。

いつ奈々子の家から出たか、林は全く覚えてなかった。奈々子に送られ、家を後にした。

二人はただ黙っていて、林の家に向かった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

4 - 2 旅行の出来事（前書き）

夏の旅行の出来事が二人の運命を大きく変えることになった。

4 - 2 旅行の出来事

季節は4月中旬とはいえ、肌寒い風が二人を包んでいた。落ちた桜の花びらが行く人々に踏まれ、グチャグチャで黒ずみ汚れ散乱し、見るに耐えられない姿になり、空中には何枚かの花びらが寂しげに舞っていた。ちょっと寒く感じたか、林は上着のファスナーを首まで閉めた。夜の8時以降とはいえ、三条通はまだ沢山の車が通っていて、過ぎ去る車がすべてを持ち去るように、単調なエンジン音とともに、二人の横を通っていく。

放心状態になってしまった林を見て、奈々子の内心は穏やかではなかった。強がりと言ってもいい、怒鳴られてもいい、その苦しみを分け合いたかった。奈々子はそつと手を出し、林の手をつないだ。林は決して逃げようとしなかった。二人は黙ったまま、外環三条交差点についた。

「上海の旅行は予約したの？」林はようやく一言を発した。

「仮予約しただけ」奈々子は小さい声で答えた。

「キャンセルしてもいいの」

「分かった。明日キャンセルします」

奈々子は手に入れた宝物が一瞬にして失ってしまったような心境だった。でも、2週間後に林の親と会うのもさすが難しいと思った。頭が極度に混乱したが、奈々子との結婚話がもう一度考え直さないといけないと林は思った。

林のアパートについた。二人が沈黙したまま、部屋に入り、電気をつけた。

奈々子が林の胸に頭を寄せ、林を抱きしめた。

「今日、本当にごめん」

林は無反応だった。

「君を抱く気力がないよ。一人にさせてくれないか」林は無力に

言った。

「ミンのそばいさせて」奈々子が懇願した。

「私達がこれからどうなるの」林は奈々子と付き合ってから、はじめて「分かれる」という言葉が脳によぎった。

「ミンはどうしたい」

「僕とお母さん、ナナが二人の中に僕を選ぶことができるの」

「分かれるのが絶対いや」奈々子の心底からそう叫んでいた。

二人の間では「結婚」という単語が禁句になった。奈々子の親に反対された二人の間にひびが入ったとはいえ、林も奈々子も相手を愛していた。解決策が分からない二人はただ時間を待つしかなかった。

ゴールデンウィークの上海への旅行はもちろんキャンセルされた。その代わりに天橋立に遊びに行くことになった。帰りの途中、二人が大喧嘩した。二人ともその理由を知っていたが、最後に林が軽く謝って事態を収拾した。

5月になってから、二人の会う回数が明らかに減った。

S社は中国の医薬品市場を開拓するため、薬品の現地生産に踏み切り、その第一歩として現地の合弁相手を探さないといけない。この仕事は林と同じ営業4課の鈴木貴郁が担当するようになった。鈴木は理想に燃えるタイプで、入社は林より先だが、年は林より若い。そのため、中国への出張が多くなり、仕事もみるみるうちに増えてきた。ITバブルの崩壊にネット証券の急激成長に晒され、証券業界全体へ吸収合併の波が押し寄せてきた。奈々子のN証券ももちろんその波に逃れることができない。経営基盤を強化するために、N証券は翌年4月にS証券との対等合併が決まった。奈々子も通常の常務と合併の準備に追われる毎日で、土曜日も遅くまで残業するのもしばしばだった。普段毎日電話やとメールでやり取りしていた二

人は、二人の間に冷却期間が必要ではないかを理解しており、それを落着いて受け入れていた。

夏休みに二人が長い休暇を取り、北海道に出かけた。普段あまり会っていない分、北海道の旅行はかなり楽しい旅になった。しかし、途中の一つの出来事が二人の運命を大きく変えた。

前日まで仕事だった二人はいつもより旅行に入念な準備することができなかった。いつも林の用意する避妊用具が買い忘れた。予約したペンションにつくと、買い忘れたことを思い出したが、山の中にあつたペンションの周りには買える店が一つもなかった。

「ごめん、重要なモノを忘れてごめん。今日我慢しようか」林は冗談で言った。

「そうね。我慢しよう。ナナ我慢するから、ミン邪魔しないでね」奈々子も冗談で返してきた。

「明日、札幌に行くとき買おう。覚えとして」

夜になると、添い寝した若い二人は到底我慢できるわけがない。

「先週末生理が終わったから、大丈夫とは思うよ」奈々子と言った。

「妊娠したらどうする」林が聞いた。

「生むかな、ミンの子供なら生みたいね」

「そうね、生もう。俺もパパになろう。今日頑張ろう。ママよろしく」林がずっと解けなかった問題にひらめいたような気分だった。

「パパファイト」奈々子がとるけるような甘い言葉で言った。

二人が愛し合った後、奈々子は軽く下処理して、林の胸の中に安らかに眠りについた。

それが悪夢の幕開けだということは二人には知る由もなかった。

4 - 3 奈々子の妊娠（前書き）

例年と同じく、九月末から長い秋雨だった。10月の上旬のある火曜の夜、秋の長雨が続けていた、林はこの日、8時まで仕事を終わらせ、地下鉄に乗り継ぎ、山科のアパートに向かった。山科駅に近づくとき、奈々子のメールが届いた。

4 - 3 奈々子の妊娠

2002年秋

例年と同じく、九月末から長い秋雨だった。

10月の上旬のある火曜の夜、秋の長雨が続いていた、林はこの日、8時まで仕事を終わらせ、地下鉄に乗り継ぎ、山科のアパートに向かった。山科駅に近づくとき、奈々子のメールが届いた。

「相談したいことがある。山科駅に着いたら電話して」

「後5分ぐらいつく。何の用？」林はすぐ返事した。

「ミンの所に行くから、待っててね。」

何のことかなと林が考えながら、山科駅を出てアパートに向かった。

林はコンビニで買った弁当を食べていたところに、奈々子が部屋に入った。

「相談したいことって何？」林が切り出した。

「私、妊娠したの」奈々子が少し躊躇して切り出した。

「本当」林が突然の知らせにかなりびつくりして、箸が口に差したまま体が動かなかった。「うそ、本当。北海道の時なの」

「多分そう。一ヶ月以上生理来てなかったから、今日検査薬を買って検査したら陽性が出た。ほぼ間違いない」奈々子はすぐれない顔で話した。

「それはよかったじゃない。僕もパパになるよ」林が嬉しさ全開の笑顔だった。

林が奈々子の近くにきて、お腹を優しく撫でながら至福の笑顔だった。

「ちよつと計画外だったな」奈々子が嘆いていた。

「産もうよ。その前に入籍しよう」

奈々子が黙っていた。

「その前に上海の親に連絡しなきゃ、きっと喜ぶよ。そうだ、上

海に連れていかないとね。それに子供の名前を何にしよう。格好いい名前にしよう。ナナは男の子と女の子がどっち好き？僕はまず男の子かな。でも女の子もきつとナナ似だから大好きになるよ」林は興奮するあまり、いろいろなことを筋なく話していた。

「私、おろしたいの」奈々子が俯いてゆっくりと切り出した。

「えっ、おろしたいの」林が自分の耳を疑った。

「ミンの子供なら産みたいって言ったじゃない。そうか、奈々子の親との関係は、別居すれば、僕は我慢するよ」

奈々子がすすり泣いていて、答えようとしなかった。

「叔父さんは大嫌いだけど、子供のためなら僕はナナの家に行くよ。何度でもいいから。土下座して結婚を許してもらっよ」林が懇願した。

何も話さない奈々子に、林が懇願し続けた。

「頼むよ。二人の給料なら軽く一千万超える年収だから、五千万以下のマンションとか一戸建てならすぐ買えると思うよ。お母さんの近くに住んでもいいよ」

しばらく林の懇願が続き、奈々子は相変わらず答えようとしなかった。

「お前、何か言ってよ」堪忍袋が切れた林が激昂した。

「今会社が合併しているから、今結婚して子供を産むと、確実にクビにされるから」奈々子がやっと話した。

「仕事なら、別にN証券だけじゃないだろう。産んでから仕事すれば、別に反対してるわけでもないよう。家事なら手伝うって約束しただろう」林が相変わらず高い声で怒っていた。

「今の仕事が好きなの、子供産んだらもう二度と同じ仕事ができないの」ナナも声を上げて答えた。

「僕とN証券、N証券を選ぶということ」

「そうではない。子供なら何人でも産んであげるよ。今じゃなくて、今のリストラが終わってから。ミン、私を理解して」

「ナナのお母さんが何を言ってるの」

「中絶すべきって言ってた」

「やっぱりね」

林が絶句した。高い崖から突き落とされたような絶望を感じた。目の前の女、2年間数え切れないほど愛を交わしたが、今は理解できなくなった。林は奈々子のことを凄く遠く感じてしまった。

気まずい沈黙がアパートの中に流れていた。林は頭の中に何度も奈々子を説得しようと考えていたけど、どう説得するかが分かりかねていた。

しばらくすると、奈々子が話した。

「今日帰ります」

「送るよ」林は急に優しくなった。

「必要ないよ。自分で帰れるよ」

「いや、妊娠してるだろう」

林が傘を指し、二人が並んで奈々子の自宅に向かった。雨と風が何時の間に強くなっていった。奈々子が雨に濡れないよう、林が注意深く傘を指していた。今まで何百回も歩いた道が不案内に感じた。

奈々子の家についた。

「今日怒ってごめん。家に帰ったら早く休んで」林は奈々子の体に氣遣った。

「分かった。送ってもらって悪いね」奈々子がいつもように答えた。

「子供のときは、今度の週末三連休だから、もう一度ゆっくり話そう」

「分かった。ミンも気をつけて帰って早く休んでね」

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

コメントをいただければ嬉しく思います。

4 - 4 お別れ（前書き）

林はなかなか寝つけなかった。妊娠のことやどうすれば奈々子
を説得できるかをあれこれと思い巡らして、結局うつとになったの
が明るくなってからだった。

4 - 4 お別れ

水曜日と木曜日はいつものようにメールと電話でやり取りしていた。林は週末にもう一度ゆっくり話そうと思って、メールと電話の中に妊娠のことをあえて触れなかった。しかし、金曜になると、急に連絡を取れなくなった。土曜日と日曜日にも携帯にかけても一日中留守電だった。林は嫌な予感がした。ようやく連絡を取れたのが祭日の月曜の午後だった。

「何かあったの」林が聞いた。

「ちよつと用事があつて電話に出られる状態ではなかった」

「病院にいったの」

しばらく沈黙し、奈々子が答えなかった。

「今から会えるの」林は急かした。

「実は金曜に母と一緒に病院に行った」

「手術したの」林は最後の希望を託した。

「ハイ」奈々子が無力に答えた。

「お大事に」林が脊髄反応的に言った。

言った後、奈々子の返事も聞かず電話を切った。すべてが終わった。

秋の長雨が9月末からずっとしつこく降り続いていた。雨のせいか、5時ぐらいになると、周りがすでに暗くなり、部屋が中にも暗くなり、冷たい雨と風が薄暗い部屋を覆っていて、余計に寒く感じてしまった。

電話を切った後、林はベッドに座り込み、ずっと壁に向かってたばうとしていただけだった。気がつけば、林は涙が流れていた。林が電気もつけず、奈々子との2年間の思い出にふけていた。二年前同じ季節、同じ天気、同じ部屋で奈々子と初めて愛を確かめた、

ということを思い出すだけでぞっとした。偶然というよりも神のご冗談では、と林は皮肉に思った。奈々子の仕事のために中絶することを考えるだけで絶望し、怖ささえ感じていた。元もと別の世界で生きていた二人がたまたま運命のからかいで一緒になったが、蓋を開ければやはり別の人種だった、ということは林が思った。林にとっては「別れよう」という結論に達したのがそう難しいことではなかった。

次の週、林は奈々子のことを忘れるために仕事に没頭した。十時以降にアパートに帰り、弁当を食べ、シャワーを浴び、睡眠誘導剤を飲んで寝る、というような生活が四日間続いた。

10月19日土曜日、林は今もその日のことを鮮明に覚えている。長雨がようやく止み、久しぶりの秋晴れの天気だった。

十時ごろに、林が奈々子に電話した。

「もしもし、元気」

「まあ、何とかね」奈々子はいつものように答えた。

「今日来られるの」

「いい天気だから、そとで食べにいこうか」

「来てほしいよ、話したいことがあるから」

「分かった。お昼をたべてから行くよ。待っててね」

「分かった。まってるよ」

奈々子が林のアパートに来られたのが午後一時ちよつとすぎだった。ワンピースにハイヒールという格好だった。中絶手術を受けたせいか、顔色が悪く、化粧もほとんどせず、身なりもいつもと違ってきちんとしてなかった。

「体大丈夫」林が切り出した。

「何とかやっていけるかな、あと一週間もあれば」

「痛かった」

「手術の時、麻酔が効いたから無感覚だった。夜になると、お腹が落ちるような痛みだった」

「それは大変だったね。お母さんと一緒に病院にいったの」

「そうね、だれかサインしてもらわないと。相談しなくて悪いね」

「じゃこれからどうする」林はいきなり核心問題に迫った。

「何のこれから」

「僕たちのこれから」

「ミンがどうしたいの」奈々子がちよつとこわばった顔で聞き返した。

「別れましょう」林は落ち着いて話した。

「わかる、それは絶対いやよ」奈々子が事態の重大さをやつと理解した。

「僕はナナとやっていける自信がないよ、ごめん」

「ミン、相談もせず病院に行ったのが謝るから許して、ごめんなさい」奈々子が慌てるようになった。

林は答える気がなかった。

「ミンも日本長いから分かるだろう。日本で女性が好きな仕事をやり続けるってどんな難しいか、知ってるでしょう。だから、許して、ミンの子供なら何人も産んであげるから」奈々子が泣き叫んだ。奈々子の顔を見たくないか、心が動揺したか、林は無意識的に顔をそらし、沈黙し続けた。

「この仕事私が私とつてどのくらい重要か、ミン理解して。子供の時からずっと母の影に生きてきた。だから、ずっと独立しなくちゃと思ってた。今子供を産むと確実にリストラされるから、ミンは知ってたでしょう。子供を産んでも働きたいから今は無理と思ってた。私、誰の影の元で生活するのがもう絶対いやだよ。ミンが結婚しても働いてもいいって言うてくれた時、本当に嬉しかった」

奈々子が泣きながら途切れ途切れに言った。体を丸くしてソファにしゃがみ込んで、もともと体の小さい奈々子が余計に小さく感じた。

「ミン、ナナのこと、今も愛しているの」

林は答えようとしなかった。なぜなら、自分も自分の本当の気持ち

ちを理解してなかったからだ。奈々子が来るまで、林がいろいろな状況を想定して、脳の中にシミュレーションをした。今は遠い所から他人事のようにシミュレーションを見つめていたような感じだった。

しばらくすると、林は現実に戻り、急に怒り出して言った。

「僕の給料で生活するのがそんなに不安なの、それでも僕の給料安すぎるの。まったく」

「そんなことないよ。ミンの給料は十分よ。それと私の仕事が別問題」

「別問題って、相談もせずね。その子、半分が僕のモノだよ」

「何も相談しないのが本当にごめん。でも年末まで休みなんか取れないよ。ちょうど3連休だから、お母さんと一緒に行ったの」

「今のN証券じゃなくて、子供を産んだら別の仕事をすれば、いくらでもあるじゃない」

「ミンも好きだけど、今の仕事が大好きよ。ミン、ナナの気持ちを理解して」

「本当に君のことは理解できない。それに、君の母と叔父を思い出すだけでぞっとするよ」林は言いたい放題になった。

「ミンは結婚して別居すれば我慢するっていたじゃない」

「僕がどのくらいストレスを抱えてるって分からないか。君と付き合うためにね。今まで君の叔父のようなことを言われたことがないよ。僕なぜ知ってもない中国人の責任を負わないといけないかよ」

「叔父さんは確かにひどかったよ、ナナ、謝るよ」

「僕、自分の女さえコントロールできてないよ、だろう」

「ナナはその分お返しするから」

「お返しって僕の子供を葬るってのことなの。僕の子供なら産むって言うたくせに」

「私達、二年も愛し合ったでしょう。この体がミンのモノよ」

「そうね、これは二年も愛し合った結果ってこうだか」

「ミン、なぜここまで怒るか、理解できない」

奈々子も段々興奮してきた。1時間以上、二人が口論していた。二人とも理性がもうどこになく、ただ相手にヒステリーに鬱憤を晴らすだけだった。

口論したせいか、ずっと泣いたせいか、奈々子の首と顔、そして目が真っ赤になった。顔に涙と鼻水が一緒になり、後悔、悔しさ、興奮、怒り、無力、すべての気持ちが混ぜたような見苦しい顔で、両手も緊張で震えていた。林も極度に緊張し、部屋中に無意味に行ったり来たりしていた。

奈々子は今回のことが最初から深く考えていなかった。トラウマのように今の仕事を続けたいだけを考えて、林の気持ちを考える余裕はなかった。結婚を反対した母に急かされ、水曜の夜に急遽病院に手術を受けることを決めた。手術を受けた後、ベッドの上に林のことを考えて多少後悔するようになった。後で謝ればミンがきつと理解してくれると奈々子は思った。しかし、今日の林の別れ話に本当に驚き、そこまで林が傷ついたことを理解できなかった。

林は何度も奈々子を許そうと思ったが、赤ちゃんのこと、奈々子のお母さんと叔父さんのことを思い出すと、すぐに許せなくなった。子供と仕事の間に、そこまで今の仕事にこだわるのが理解できなかった。

口論で疲れたか、奈々子がソファにもたれて、しくしく泣いた。二人の間、長い沈黙が続いた。

気がつけば、3時間以上経った。

「荷物を片付けましょう」林は泣き止んだ奈々子に言った。

奈々子が諦めたか、俯せたまま林と一緒に荷物を片付けた。歯ブラシと何枚の下着以外、奈々子の物がそれほど多くなかったから、片付けがすぐ終わった。

林の目の前に奈々子が弱々しく可愛そうな奈々子を見て、一瞬許そうと思ったが、でもすぐにこの考えをやめた。

「もう一回ナナを抱きしめていい」林は聞いた。

奈々子が状況を理解できないまま頭を少し縦に振った。

林は奈々子をきつく抱きしめた。抱き慣れた奈々子の細い体、肉付きのよいお尻、彼女の匂い、明日になると他人になってしまふ、ということを思うと、心が虚しく感じた。肺一杯奈々子の匂いを吸い込み、しばらく奈々子を抱きしめた。奈々子がまた声を出して泣き、林の胸の中にじっとも動かなかった。林は自然に奈々子の額と目に軽くキスした。奈々子の生温かい息が林に伝わり、奈々子は口が開いたまま林を待っていた。2年前、同じ場所、同じ季節に初めてキスしたように、二人が濃厚なキスを交わした。

しばらくすると、林は自分に戻り、奈々子にわかれの言葉を告げた。

「酒本さん、お元気で、いい男と結婚して、仕事も頑張っ
てね、さよなら」

奈々子が放心状態になってしまった。

奈々子がどういつふうに戻ったかが林は全く覚えてなかった。だが、奈々子が帰った後、林は声を出して泣いた、長く泣いた。

その日の夜、二年ぶりにへビ妖怪の夢を見た。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。
<http://alexlin.web.fc2.com/>

4 - 5 癒しを求めて（前書き）

それから年末までの2ヶ月あまり、林にとっては大変な時期だった。心に深い傷を負った林は平日仕事に没頭し、忙しさで気持ちを紛れようとしていた。

4 - 5 癒しを求めて

それから年末までの2ヶ月あまり、林にとっては大変な時期だった。心に深い傷を負った林は平日仕事に没頭し、忙しさで気持ちを紛れようとしていた。しかし、アパートに帰ると、布団には奈々子の匂い、部屋中にはあちこち奈々子の面影が残っていた。何回も奈々子に連絡を取ろうとしたが、なかなか勇気がなかった。「今も本当に奈々子を愛してるか、奈々子なしではこれからやっていけるか」何回も何回も自分に言い聞かせた。特に休みの日になると、暇のせいか、余計に奈々子のことを思い出すようになってしまう。ゴールデンウィークと夏休みが上海に帰ってなかった林は、姉からお父さんの高血圧が落ち着いたことを知り一安心し、年末のお正月休暇を利用して実家の上海に帰ったのを計画した。

元之は林と奈々子が別れたのを知り、林を合コンに誘った。この2年間、何度か誘われたけど、林はほとんど行かなかった。今回の誘いに即答でオーケーを出した。先輩の忠司も一緒に行くことになった。

合コンで紗也子という女性と知り合った。紗也子は26才で、京都市内のショッピングセンターで働く契約社員だった。化粧が濃く、すらっとした今風の美女だった。合コンで彼女のメルアドを聞き出し、その後猛烈なアタックした。高級なレストランとお洒落なバーに連れて行き、服とブランドバックを買い与え、3週間努力した結果、二人がホテルインになった。しかし、それ以降林から一度も紗也子と連絡とってなかった。紗也子からメールが2回送ってきたが、林はいいわけを付けて、デートを拒んだ。その後は自然消滅が決まっていた。

決してセックスの相性が悪かったのではなかったが、ホテルイン

が目的になつてしまつたように、終わったあとはそれ以上求めるものもないし、求めたくもなかった。一番合わなかったのが何言つても話しが最初から噛み合わなかった。さらに、紗也子のスッピン顔を見た瞬間、林にとっては、よく言えばお化粧がもの凄く上手、悪く言えばかなりの衝撃を受けた。奈々子の眉毛も林を驚かせたが、そのようなレベルではなかった。

そのあと、バーで媛媛という中国人女性と知り合った。彼女は長身の美人で、スッピンも林を驚かせなかった。大阪の私立大学を卒業したあと、大阪の中堅の貿易商社に就職していた。仕事の内容もかなり近く、さらに、同じ上海出身もあつて、最初から意気投合し、林が一週間で彼女とデートに漕ぎつけた。しかし、しばらくすると林は彼女のわがままぶりに啞然とした。デートのドタキャンが当たり前で、会社までお向かいを強要された時に、林は呆れた。結局、この恋も１ヶ月というキンカの一朝の夢だった。「よく頑張つたな」と林は別れた日に自分に言った。

奈々子と別れた後、短い間に短い恋を２回した。後味が決してよくなかった。最初は猛獣のように、女性に猛烈にアタックするが、いったん獲物が手に入ればやる気がすぐに洩んでしまう、ということは今までなかったし、林の性格でもなかった。女の体を求めるためか、それとも奈々子を忘れるためか、自分を聞いたが、多分両方あったと林は自嘲した。奈々子を愛してしまつたことでできた傷が他の女性で埋め合わせることができないことにつくづくと気づいた。

お正月の休みと有給休暇を合わせ、林は上海に久しぶりに帰省し、１０日間滞在した。特に用事もないのに、長く上海に滞在したのは父の病気と、環境を変え心の休みをしたかった。もちろん、うるさい母に奈々子のことと結婚のことで質問攻めされたが、なんとかあやふやに誤魔化した。明らかに老衰した父を見て、林も早く結婚し

なければと思ったが、そう簡単にことが運ばない。家族団らんやよき理解者である姉の言葉、そして、友人との徹夜の飲み会、今回の帰省はかなりの気休めになった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

第5章 二度目の春（前書き）

正月明け、林が日本に帰り、サラリーマンの生活がまた始まった。
季節はまだ冬だけど、林にはもう一度春が来た。

第5章 二度目の春

正月明け、林が日本に帰り、サラリーマンの生活がまた始まった。季節はまだ冬だけど、林にはもう一度春が来た。

出社初日の昼前、隣の営業3課の中村課長が林の所にきた。営業3課は米国の輸出担当で、業務内容も大体同じだった。中村課長は若いとき、アメリカに留学し、駐在員として長くアメリカに滞在したので、林に親近感を持ち、仕事上もいろいろと林を助けていた。

「アキ君、最近元気なの」中村が林に話をかけた。

「昨日、実家の上海から帰ってきました。結構いい調子です」

「中国進出の案件はどうなった。あれは社運にかけた大プロジェクトだよ」

「まだ、合弁相手を選定している状態、ある程度まとまったら、課長と皆さんに報告させていただきます」

「そうか。楽しみな。話が変わるけど、アキ君って彼女いるの」

中村は林が彼女と分かれたことを事前に確認したようだ。

「分かれたばかりなんですけど」上司にはうそができないから、正直に言った。

「それはよかった。お世話になった人のお嬢さんが結婚相手を紹介してもらいたいって」

「僕でいいですか」

「アキ君、なかなか優秀だから」

「僕が外国人って大丈夫ですか」林はいつものようにこのことを確認した。

「相手に説明したよ。かなり優秀の中国人でかまわないかと確認したけど、相手は全然問題ないと答えた」

「そうですか」林は断りたいけど、適切な理由が見つけなくて困っていた。

林の困った顔を見て、中村が付け加えた。

「相手が27才。親が元地方テレビ局の役員で、一人娘、可愛い子だよ。会っただけでいいよ。後のことは後で決めればいいじゃない」
林はお世話になった上司の紹介をそう簡単に断れなかった。ちょっと考えてからニコツと笑って言った。

「じゃ、中村課長のお言葉に甘えて」

「相手にオーケーって言ってもいいかな」

「宜しくお願いします」

日曜日のお見合いが決まった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

5 - 1 お見合い 其の1（前書き）

日曜の朝、林は寝坊せず、8時半ぐらい起きて、朝の支度を終わつたあと、行き付けの美容院に向かった。それほどやる気がないとはいえ、上司の前に身なりをきちんとしなないといけないと思った。髪を短く切り、整髪剤をつけ、小洒落た今風の若者に変身した。

5 - 1 お見合い 其の1

日曜の朝、林は寝坊せず、8時半ぐらい起きて、朝の支度を終わったあと、行き付けの美容院に向かった。それほどやる気がないとはいえ、上司の前に身なりをきちんとしなれないといけないと思った。髪を短く切り、整髪剤をつけ、小洒落た今風の若者に変身した。

お見合いとはいえ、両親と仲人が同席するものではなく、林と相手の女性に中村夫婦四人だった。場所も和室で食事会ではなく、京都駅近くのリーガロイヤルホテルのコーヒESHOPPでの略式のよななものだった。

早めに昼ご飯を食べた後、林はJR山科駅に向かった。駅のホームで電車を待つていた時、自然に奈々子のことを思い出した。「自分が何をしているだろうなあ。奈々子を忘れるためか」と思いながら虚しい気持ちだった。

約束した3時の15分前に、林はリーガロイヤルホテルのラウンジに到着した。ラウンジの作りは床とテーブルとソファが濃いブラウンに統一され、和洋折衷の内装が非常に落ち着いた雰囲気を作り出していた。壁に舞妓の絵が一面を覆い、ゴールドのバック色屏風に浮き上がられ、非常に目立っていた。

中村課長がすでにラウンジにいた。

「アキ君、よく来た。じゃ、かけて」中村が林に話をかけた。

「相手がまだでしょうか」林が大きなソファに腰をかけながら訪ねた。

「もうすぐ来るよ。先電話があつたから」

「そうか、まちましよう」

そう話しているうちに、二人の着物女性が来られた。

「お待たせ致します」中年女性がお辞儀しながら言った。

林がすぐ席に立ち、お返しのお辞儀をした。

「うちの会社の林君」中村が林を指し紹介した。

「林 明蛩と申します。宜しく願います」林は頭を下げながら言った。

「こちらは埜々村さんです」中村が若い女性を指し、林に紹介した。

「埜々村 夏美です。宜しく願います」若い女性が一礼して自己紹介をした。

「妻の早紀です。よろしく願います」中年女性が自己紹介した。

「皆さん、かけてください」中村が言った。

四人がソファに腰をかけ、飲み物を注文した。

林は今回半分義務で来たから、非常に落ち着いていて、目の前の女性を注意深く観察していた。女性は振袖姿だった。鮮やかなピンク色の絹生地に若々しい花と鳥模様が刺繍されていた。同じピンク色の帯に黒の花模様がいつそう女性のかわいさを引き出していた。髪型が和風ではなく、今風だった。うすブラウンに染められたショートヘアがアゴ上ラインで若干前下がりにカットされ、丸みを生かしたグラデーションボブだった。その上にピンク色の和風の花髪飾りを付けていて、やや丸い顔に大きくもなく小さくもない目と鼻がそれほど印象的ではないが、唇が厚く真っ赤に塗られて非常にセクシーに強調されていた。奈々子の時のせいか、林は夏美の眉毛を注意してみた。眉毛が細くてアーチラインに綺麗に揃っていて、どう見ても本物だった。夏美は前屈みで浅くソファにかけ、やや斜めに林に向いていて、両手が膝の上に組んで時々指を遊んでいた。緊張したせいか、顔が林を直視できず、はにかんで俯きながらテーブルにあるジュースを見ていて、たまに林を横目に見ていた。

夏美は外大の英文科学部を卒業した後、英語関係の仕事を見つけて、父親の友人のA社に事務として働いていた。

「林君は中国の上海出身で、2年前からうちの会社に就職した。日本語はご存じのように堪能で、なかなかの好青年ですよ」中村が夏美に林を褒めながら紹介した。

「夏美さんは京都の外国大学出身で、立派な家で育てた心の優しいお嬢さんですよ」早紀が夏美のことを林に紹介した。

中村夫婦がお互いに二人をべた褒めしていた。林は時々礼儀的に謙遜を入れるが、話を真剣に聞いていなく、むしろ目の前の女性を注意深く観察していた。

夏美が褒められて恥ずかしくなり、先より頬が赤くなり、俯いたままほとんど言葉を発しなかった。緊張したか、無意識的にハンカチを出し、口と鼻を拭いていた。二人は視線が一瞬合ったが、すぐに顔をそらした。夏美が終始微笑んでいた。林の頭の中にごく自然に夏美を奈々子と比べるようになった。身長は明らかに夏美の方が高く、おそらく7センチの差がある。上半身の薄い奈々子に比べると、夏美は普通のレベルだった。着物のせいでそれ以上情報を得られなかった。奈々子のキャリアウーマンのような雰囲気と対照に、夏美はお嬢さんタイプだった。

30分ぐらい経つと、中村が二人に言った

「早紀、私達が邪魔してもしょうがないが、二人きりにして話してもらおうか」

「そうね。若者同士にしてもらいましょう。年寄りは帰りましょう」早紀がすかさず相槌を打った。

ちょうどこのとき、夏美が横のテーブルを見て、合図を受けたように微笑んでいた。林も無意的に横のテーブルを見たが、お洒落な老婦人が一人でお茶を飲んでいて特に変わったものがなかった。林はそれ以上気にしなかった。

中村夫婦がラウンジを後にした。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

5 - 2 お見合い 其の2 (前書き)

間をあけて林が夏美に話をかけた。「埜々村さんは京都の外国大学出身ですか」

5 - 2 お見合い 其の2

間をあけて林が夏美に話をかけた。

「埜々村さんは京都の外国大学出身ですか」

「そうです。英文科です」夏美は恥ずかしそうに小さな声で答えた。

「きつと英語がとても上手でしょうね」

「そんなことはないですよ。仕事してから使っていないから」

「埜々村さんはなかなかの美人ですね」林は突然夏美を褒めたくなった。

「林さんは人を褒めるのがお上手ですね」夏美が明らかに喜んでいて口を開けて笑った。

「目の前に綺麗な女性がいれば褒めないと、男性としては失格ですよ」林は調子乗って付け加えた。

夏美が声を出して笑った。真つ白な歯が綺麗に揃っていた。

「ちなみに、僕が外国人なんですけど、大丈夫でしょうか」林は無意味を知らながら確認したかった。

「全然問題ないですよ。林さんはなかなか立派です」

「親はそのことをご存じでしょうか」奈々子の時のこともあって、林はさらに確認したかった。

「パパは中村さん夫婦から林さんのことを詳しく聞いて、人さえよければと言ったから、ご心配はないですよ」

「それはよかったです」林はひと安心した。

林は最初から乗る気がなかったけど、ここに来てなぜかこのことを無性に確認したくなった。

「なにか不都合なことでもあるでしょうか」夏美が不思議そうに聞き返した。

「それはないですけど、ただ聞いてみたかったです」林は適当な答えを見つけないで誤魔化した。

「林さんのご両親は大丈夫でしょうか」

「まだ知らせてないけど、多分大丈夫でしょう。今まで日本人の女性と付き合った時、反対されなかったから」林は油断してぼろ出してしまった。

「今までって、林さんはなにかご都合の悪いこともあるでしょうか」

「ご心配なく、綺麗に終わりました」林が慌てて答えた。

こういうことに非常に敏感になるのが女性の常なので、林は自分が油断したことに悔しかった。

「つい最近彼女と別れたと中村さんがおっしゃったから、もしご都合がわるければぜひおっしゃってください」夏美がさらに林を詰めた。

林は中村課長が紹介する前、林のことを詳しく夏美に伝えたことをすぐに悟った。林が奈々子と長く付き合っていたから、職場ではだれでも知っていた秘密だった。林自身が知らないけど、この2ヶ月の間、落ち込んだ様子を見ればだれでも何かあっただろうとすぐ気づく。

「もし引きずっていれば、僕はここに来られません。中村課長と埒々村さんには非常に失礼だから」林は降参して誠実に言った。

女性が林の話を聞いてひと安心になったようだ。

「ごめん、初対面なのに、こんなことを言ってしまったって」

「私が先に聞いたから、林さんは失礼なことではないですよ」

「ご心配を掛けて本当にすみません」林はほとんど残ってなかったコーヒーを全部飲んだ。

「私の方がいきなり聞いてしまったから、申し訳ございません。」しばらく気まずい沈黙だった。

林は夏美をゆっくりと見て、もう長く付き合うことはないだろうなと内心思った。

夏美が非常に後悔したけど、どうしてもこのことを聞きたいという衝動に押さえきれず、聞いてしまった。夏美が林のことを中村さ

んから詳しく教えてもらった。話を聞いた時から、夏美だけじゃなくて、パパとママも林に対してかなりの好感を抱いていた。ただ林がつい最近まで他の女性と付き合っていたことにどうしても心にシコリが残った。夏美はもちろん男性の経験が全くなかったではないが、一人は高校、一人は大学の時だった。パパのコネで今のA社に就職してもらったけど、元々お嬢さんの身振りに多少抜けている性格も手伝って、中小企業のA社の中では、よく言えば高嶺の花、悪く言えば完全に浮いていたのだった。男性を何回か紹介してもらったことはもちろんあったけど、長く付き合ったことは一度もなかった。「お住まいはどこですか」林は適当な質問して沈黙を破った。「向日市です。実家に住んでいます。林さんは」夏美がゆっくり答えた。

「山科駅の近くです」

その後、二人がしばらくお互いのことを聞きあった。

「今日、本当に楽しかったです」林は帰りたくなって、自然にこの言葉を口にした。

「そうですね。林さんと一緒にいると、時間経つのが早く感じます」夏美も礼儀正しく答えた。

答えた後、すぐに頭を回って隣のテーブルを見た。

「もうこんな時間ですね」夏美が腕時計を見て言った。

「そうね。もう5時過ぎですね。時間経つのが本当に早いです」

林はお開きの合図だと思った。

「この後、林さんは何かご用がありますか」

「特にないです」

「もしよければ一緒に夕食でもいかがでしょうか」ちょっと緊張気味で夏美が聞いた。

突然の質問に林がびっくりした。用事がないという言葉が取られた以上、断ることはできなくなった。

「隣のセンチュリーホテルに美味しい京都料理の嵐亭が結構おすすめてです。よければ一緒に行きませんか」

「はい」林が一息して、「行きましょうか」

二人がラウンジを後にして、京都駅の方向に向かって並んで歩いた。

一緒に歩くと、黒塗りの下駄を履いていた夏美を非常に長身に感じた。

「埜々村さんは背が高いですね」

「164センチです。林さんも低くないでしょう」

「175センチ、埜々村さんと一緒にいると、低くかんじてしまいます」

「そんなことはないですよ」夏美が優しく笑った。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

5 - 3 お見合い 其の3

嵐亭に到着し、まだ時間が早い、ほとんど客がいなかった。

二人は窓際のテーブルに座った。

「お酒を飲みませんか」林が夏美に聞いた。

「生ビールなら少々」

「じゃ、僕も生ビールにします」

コース料理と生ビールを注文して二人が乾杯した。

「何の為に乾杯しましょうか」夏美が林に聞いた。

「どうしましょう」

「林さんのお仕事が順調でありますように」

「いや、美人の埜々村さんのために」

二人がはじめて笑った。

しばらく食べた後、林が夏美に聞いた。

「この店の料理が美味しいですね」

「そうですか。パパとママと一緒によくここに食事に来ます。林

さんが美味しいと言ってくれるって本当に嬉しいです」

「林さんは日本の女性に対してどういうイメージですか」

「それほど知らないけど、人によって大きく違うじゃないですか。

よく新聞とかで日本の女性に対するコメントがあるけど、いい意味でも悪い意味でもかけ離れています。なかなかこれだ、というイメージはないです」

「先、息子のお嫁さんが日本人であっても反対されないとおっしゃってたでしょう。違和感はないでしょうか」

「違和感がないのはうそでしょう。まじめに聞いたことはないから詳しいことはわからないけど、うちの親は基本的に自由放任なので、反対されることはないと思います」

夏美が一安心して、軽く一息ついた。夏美がことに関してかなり神経質だと林は感じた。

「パパは元新聞記者で、私は子供の時、結構色々な外国人が実家に来られていました。だから、外国人に対してそれほど抵抗感がなかったです」

「お父さんはどこにお勤めですか」

「京都のテレビ局の記者だったが、今は定年退職しました」

「小泉政権になってからは、日中関係がぎくしゃくになってて、どうしようもなくなってきましたね」

「林さんもきつと大変だったでしょう。林さんはなにも悪いこともしてないのに、つらい目に遭うって本当に理不尽とパパが言っていました」

「その通り、僕何もできない。全く何もできないです。会社の中では僕のことを知ってるから、言われることはないけど。たまに日本に来なければと思うときもあります。もし日本に来なければ多分今上海で普通の中国人と同じく日本を批判していたでしょう。日本で生活していて、日本のことを理解すると、言葉では表せないけど、かなり微妙な気持ちになってしまってます」

酒を飲んだせいか、それとも夏美が林の一番デリケートの所を理解してくれたことが、夏美に親近感を覚えるようになった。先の緊張した雰囲気とは裏腹に、二人の話が自然に弾むようになった。

夏美がもとも酒に弱いのが、林と話すと、酒がいつもより早いペースで進んでいた。顔と首も赤くなり、声も先より大きくなって、よく笑うようになった。

「林さんは頭もよく、まじめな性格と中村さんから聞きましたけど」

「何をもって頭がいいか、まじめかは僕自分も知りません。恥ずかしくならないようには頑張ってるだけ。夏美さんの性格は」

「私ね、こう見えてもかなりの間抜けですよ。よく言われています」

「そんなことは全然ないですよ。長身の美人なので、きつともてるでしょうね」

「そんなことは全くありませんよ。」

林は夏美の全否定にかなりびっくりした。

「なぜですか」

「今の会社は中小企業なので、私みたいお嬢さんっぽい女の子は基本的に敬遠されてしまうのです」夏美が嘆いていた。

「そうか、ごめんね。勝手に想像して」夏美のストレートに言われてなすすべが知らなかった。

「こちらこそもうしわけないです。愚痴を言ってしまったって」夏美も自分が言っちゃったことに後悔していた。

「人生何かあるか分かりませんよ。運命の赤い糸が必ず誰かとつながっているから」林が第三者のように無意味に夏美を慰めた。

「そうですね。期待しています」夏美が不思議に笑った。

話が盛り上がった二人の間では和やかな時間を流れていた。気がつけば、すでに店が入ってから3時間以上経ち、9時前になった。

「そろそろ帰らないと」林が夏美に言った。

「そうですね。帰りましょう」酒に酔ったか、それとも雰囲気酔ったか、とろけた表情だった。

「もしよければ、林さんの携帯のアドレスを教えてくださいませんか」

いきなり聞かれた林は一瞬戸惑ったが、すぐに「はい」と答えた。二人がメルアドと携帯番号を交換した後、店を後にした。

外はかなり冷たかった。酒を飲んだせいで、二人とも顔が真っ赤になっていた。冷たい風に吹かれて余計に寒く感じていた。

「かなり冷え込んでいましたね。寒いでしょうか」林は夏美に気を配った。

「大丈夫よ。JRに乗ればすぐですよ。ママは迎えに来てくれますから」

「そうですね。一緒にJRを乗りましょう」

林は山科駅で夏美と別れた。運命の赤い糸が二人を結ぼうとして

いるということが林はその時知る余地もなかった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。<http://alexlin.web.fc2.com/>

5 - 4 夏美とのデート（前書き）

翌日、中村課長が朝一に林の所に来ていた。「アキ君、昨日どうだった」中村が笑いながら林に聞いた。

5 - 4 夏美とのデート

翌日、中村課長が朝一に林の所に来ていた。

「アキ君、昨日どうだった」中村が笑いながら林に聞いた。

「悪くなかったです。いろいろとお手数かけまして」どうせすべて伝えられていただろうと林は内心思った。

「これからしばらく交際してもいいと先方に伝えてもよろしいでしょうか」

「はい、お願いします」林はちよつとだけ考えて答えた。

「それはよかった」

中村が喜んで帰った。

林は最初からよほどのことがない限り、三回までは義務だろうと思った。夕べの見合いが初対面だったけど、夏美はまともな女性であることは間違いだろうと思った。そう思うと、心の中に一瞬清々しいものがこみ上げてくるような気がした。このような気持ちは奈々子と別れてから初めて感じた。

林と夏美の付き合いが始まった。一ヶ月の間、毎週の週末に二人が会い、京都市内の名刹や観光地に行き、夜は一緒に食事するコースだった。最低3回は義務だと林は最初思っていたが、付き合っているうちに、夏美の純粋さに惹かれるように、二人が一緒にいるとき、奈々子の時のほとばしる感情や肉体的なパッションが感じられないが、心の安らぎが新鮮に感じていた。奈々子とは対等的な男女関係とすれば、夏美とは兄と幼い妹との関係だった。一方、夏美は必死に努力していた。乙女ティックな妄想と自信のなさ、それに、生まれてからはじめて人を好きになったこともあって、毎週美容院に通い、新しい服を毎週のように買い、今までほとんど読まないファッション誌に目を通し、頭の中に林のことで一杯だった。夏美が

幼い考え方やちょっと間違ったときに、林はいつも大人らしくニコリと笑っただけだった、ということは夏美が一番気に入った。

2月のある月曜日のお昼の12時頃、林の携帯に夏美のメールが入った。

「夕べ、ありがとうございます。とってもステキな夜でした」
林もすかさず返事した。

「こちらこそ、楽しい夜を過ごさせていただいてありがとうございます」

10分も経たないうちに、夏美のメールがまた来ました。

「林さんは週末にご予定がありますか」

「申し訳ないですが、土曜から中国出張です。飛行機は土曜の昼の1時です」林はすぐに返事した。

「もしよければ金曜の夜はどうですか」夏美のメールがすぐ来た。林はメールを見て夏美の積極性に苦笑いながらもちよつとした感動も感じた。デスクのパソコンを向きながらどう返事か考えていた。「金曜の夜なら大丈夫です。埜々村さんのご都合がいかがでしょう。出張のためのちよつとした買い物をしないといけないので、6時半ぐらいは終われるから、7時半なら山科駅につくと思います」

「7時半に山科駅前の切符売り場でまっています」

「よろしくお願いします」林は相変わらず礼儀よく返事した。

林は金曜夜の7時15分ぐらいに山科駅の切符売り場についた。夏美がまだ来てなかった。切符売り場の前に立って、奈々子のことを自然に思い出した。林は本当はここでの待ち合わせがいやがっていたが、買い物をするにはいけないから、仕方がなく山科駅で待ち合わせした。ここで何回奈々子と待ち合わせしただろうかと林は内心数えてみた。そう思うと、すっきりしない気分になってしまった。

ちようどその時、「林さん、すみません。お待たせしました」後

るから夏美の声が聞こえた。

林が後ろに向くと、夏美が小躍りして向かってきた。今までの華やかな服装と全く違っていて、雰囲気も全く別人だった。地味なダークティブラウン色のローヒールパンプスにダークティグレーの制服、大きなブック鞆を右手に持ち、髪型がボブだった。この日、夏美は家に帰らず会社から直接にデートに来た。

「先、来たばかりですよ。まだ7時になってないですから」

「お買い物は何ですか」

「出張のための整髪剤や歯ブラシ、それにのど飴とうがい薬など。薬は会社が準備してくれるけど、予防薬を用意しないと」

「そうか、色々なところに気を配らないといけないですね」

「先輩に教えてもらったから、何回かやればすぐ慣れます」

二人は山科の大丸に向かった。

30分ぐらいで買い物を済ませた後、二人は同じ建物の中華料理の「東東来」に向かった。

「この前、凄く美味しい京都料理を食べさせてもらった。今日は中華料理でいいかな。山科駅前の中華なら、
「東東来」が一番だと思います」林は夏美に勧めた。

「もちろん、行きましょう。前の「嵐亭」はパパのお気に入りだったから」

店に入り、金曜の夜もあって、客がかなり入っていた。

席につくと、二人が注文しはじめた。

「お酒は何にしましょうか」林が聞いた。

「生ビールにしようか」

「何か食べたいものとか、食べられないものがありますか」林が夏美に気を配った。

「レバー以外は全部大丈夫です。林さんにお任せします」

乾杯した後、二人が食べながら話していた。

「海外出張って大変でしょうね」

「いや、中国は母国だから。言葉も分かるし、注意すべき点も知

ってますから、大丈夫です。今まで何回も行っていたけど。今度、ベトナムにも行かないといけないから、きっと大変になるでしょう」

「ベトナムも行かれるのですか」

「かもね。先輩達みんな行ってますから」

夏美が微笑みながら、林をじつと見ていて話を聞いた。

二人がしばらく林の出張のことを話した。

5・5 占いからの愛（前書き）

「林さんは自分の妻に対して何か基準がありますか」夏美がいきなり話題を変えて林に聞いた。

5・5 占いからの愛

「林さんは自分の妻に対して何か基準がありますか」夏美がいきなり話題を変えて林に聞いた。

「それは考えたことはないですね」林はちよつと考えてそれ以上の答えを見つからなかった。

「家事ができるとか、社交的とか、いろいろとあるじゃない。中に一番気にしているのは何ですか」

「一番はもちろん気があうことでしょう。楽しくないと、長続きしないでしょう」

「他は」

「家事はある程度できないと、生活レベルが維持できないから、重要な」

夏美は顔が強ばって俯いてしまった。落ち込んだ夏美を見て、林はすぐに付け加えた。

「家事なんてやる気があればすぐできるよ。僕だって、日本に来て、一人暮らしになってからできるようになったから、やる気が問題ですよ。その上に僕も手伝うつもりです」

「私みたい家事が全くできない女の子も大丈夫ですか」夏美が一本の命綱を掴もうと、頭をあげ、林に急いで聞いた。

林はばつが悪そうに苦笑いした。さすがに否定できないから、戸惑って黙っていた。

「やはり、だめか」夏美がまた落ち込んでうなだれた。

「埜々村さんは頑張ればきつといいお嫁さんになれますよ」林は夏美を慰めた。

夏美が落ち込んだままだった。

「夏美がきつといいお嫁さんになれるよ」林が慌てて付け加えた。

「私みたい、何もできない女の子がお嫁にいけないね」夏美が嘆きながら生ビールの取っ手を指で遊んだ。

林は子供っぽい泣きそうな顔を見て思わず、「プツ」と笑った。

「埜々村さんがいつもこんなに自信ないですか」

「夏美と呼んでください」

「わかった。夏美さん」

「元々自信がないよ。なんでもできる林さんの前では余計に自信なんかないよ」

「そのまま話を続けると、夏美がどうなってしまっただろうな」と林は内心困った。

手の打ちようがない林はちょっと考えて今の状況を止めようと思っ
て言った。

「夏美さんとはまだ一ヶ月ちょっとでしょう。僕がどこまでできるかがわかるはずないでしょう。良い面ばかり見ると、正直僕も困ります」

夏美が自分の失態を理解したか、手で目に含んだ涙を拭き、自分に
戻った。

「ごめん。ごめん。ついに高ぶったから、申し訳ございません。」

中村課長のこともあって、林は目の前の夏美に手を焼いていた。その積極的な態度が林を困らせながらも母性本能を刺激し、守ってあげたい気持ちが生え、芽生えていた。

「夏美さんが家事できるように、良いお嫁さんになれるように、乾杯しましょう」

夏美が泣きそうな顔で笑った。

その後、二人が話題を変えて話していた。翌日の林の出張もあって、2時間ぐらいで二人が店を後にした。

2月の冬の季節だが、外は風もなくそれほど寒く感じなかった。木の葉っぱがすっかりなくなり、歩道には枯れた落ち葉が少し残っていた。十時前とはいえ、山科駅前はまだ賑やかだった。

二人が並んで歩いていた。

「今日、ごめんね。大失態になって」夏美が恥ずかしげに言った。
「乙女心ってピュアだから、大失態なんか言わないで」林は大人

らしく言った。

「頑張ります。いいお嫁さんになります」夏美が片手を小さなガッツポーズしてまじめそうに言った。

「自信よ、自信があれば夏美さんきっとできると思います」

夏美が楽しそうに笑った。

「出張から帰ったらまたデートしてもらえますか。林さんと一緒にいると落ち着きます」

逆だったらきつと大顰蹙だろうなと思いながら答えを考えていた。

「喜んで」林はオーケーした。

夏美は大好きなチョコが食べられるようになった子供のような満面の笑顔だった。

「林さんのお嫁さんになるために頑張ろうかな」夏美が小さな声で甘ったるく言った。

林はもうすでに諦めていたから、何も答えず苦笑いするしかできなかった。

反応のない林を見て夏美が左の手を出して林の右手の指先を軽く握った。林は本能的に逃げた。

この小さな動作のせいで、二人の間に気まずい空気が流れ、しばらく沈黙が続いていた。そうしている間、二人が山科駅についたが、夏美が改札口に入ろうとしなかった。

目の前の夏美が嫌いではない、ということが林は分かっていた。

「ごめん、別に夏美さんが嫌いではないよ」林が謝った。

夏美が泣き出して、何も言わなかった。

「まだ一ヶ月ぐらいしか会ってないので、ちょっと早いじゃないか」林が付け加えた。

泣きやまない夏美を見て、林はさらに理由を説明した。

「中村課長のこともあって、なんか僕が経験のない夏美さんを弄ぶと言われるからね」

十時頃とはいえ、駅の改札口にはまだ沢山の人が入り出して、林は夏美を隅に誘導した。夏美が泣き止む気配がないまま、時間だ

けが過ぎていた。

「夏美さん、何か言つて。こつちがめちゃくちゃ困っているよ」
林は手が焼かれて怒りっぽく言つた。

やっと、夏美が頭を上げた。満面の涙だつた。

「話を聞いてもらえるの」目に涙を含みながらかわいそうに言つた。

「どうぞ、なんでも聞くよ」

「馬鹿と言われても仕方がないけど、私大分前に占いをしてもらったの。その時、占い師に30才前に外国人の男が現われ、その人が私の運命の人って言われたの。さらに、早く掴まらないと逃げてしまふとも言われた。だから、必死に頑張つてる。林さんに迷惑をかけてごめんなさい」

林が目を大きくして何も言うことができなかった。「自分を好きになつた理由つて占い」と思うと、ビククリよりも呆れた心境だつた。

「やはり、私つて馬鹿ね。占いのことを真剣に信じてしまつて」

夏美が泣きながらまた俯いた。

「でも、占いのことがなくても、私、林さんのことが好きです」
夏美が小声で言い続けた。

突然の告白に林は正直頭が混乱になつてしまつた。これからのことも考えなければいけないのもわかつているが、いきなり言われると、どう答えるかを迷つていた。奈々子と別れてまだ時間が経てなかつたこともあつて、恋愛や結婚といったことに対してかなり消極的になつていた。夏美が嫌いではないのが真実だつたが、男女の關係、あるいは結婚前提で付き合うことになる、どうしても踏み出す気持ちにはなれなかつた。もうちょっと時間をかけて考えようと思つていたが、満面涙の乙女の前にして、そうはいかないことを全て物語つていた。しかし、献身的に愛してくれた夏美を断ることは男として林はできなかった。そう思うと、夏美を愛しく感じ、やつてみようという気持ちが湧いてきた。

「実は僕も夏美のことが好きですよ」林は夏美の両手を軽く握り、優しく言った。

夏美が泣いたまま、俯きながら頭を林の肩に寄せた。林は彼女の耳に軽くキスした。

「ここは外だよ」林は夏美の耳元にささやいた。

夏美が顔を上げ、満面の涙に愉悦な笑顔だった。林のコートに涙で出来たシミが残ってあった。

「僕は明日早いから今日帰りましょう」林はその後起こりうることを考えると、それを避けたいと思って別れを促した。

夏美がティッシュで顔を拭きながら頷いた。

夏美が別れを惜しみながら改札口に向かった。林は一礼してアパートに向かった。

3分も経たないうち、林の携帯がなった。夏美からのメールだった。

「今日、ありがとう。いいお嫁さんになるように頑張ります」最後に大きい真つ赤なハートマークが付いていた。

林が携帯を握りしめ、奈々子のことを思い出し、大きな困難を乗り越えたような清々しい気持ちだった。奈々子と別れてから恋愛や結婚のことを考えなくなかったより、考える勇気がなかった。林の凍り付いた心が夏美のピュアな愛の前にいとも容易く温められるようになった。夏美に感謝の気持ちで一杯だった。

「こちらこそ勇気をもらってありがとう。お休み」夏美がその理由を理解できるようもない、ということは林が知っていた。

「お休みなさい。明日気をつけて。出張から帰ったら連絡してね」夏美の返信がすぐ届いた。

林が言葉に表せない心地よい気持ちだった。

5・6 金曜の出来事 其の1（前書き）

「今関空よ。げんき？これから会社」

林は飛行機を降りてからすぐに夏美にメールで連絡した。

5 - 6 金曜の出来事 其の1

「今閑空よ。げんき？これから会社」

林は飛行機を降りてからすぐに夏美にメールで連絡した。

今回の出張は土曜から翌週の水曜、五日間だった。S社のプロジェクトは合弁相手が3社に絞り、具体的な選定に入った。そのため、出張の間、通常の仕事の以外に毎日のように宴会接待を受けていた。日本の食事と異なつて、油濃い料理と酒で林の胃がもたれてかなり疲れていた。

しばらくすると、夏美の返事が来た。

「お帰り、体が大丈夫？風邪を引いてない？林さんに会いたい」
「毎日宴会で胃がもたれた。今日早く帰って寝たい。金曜に代休取るから週末はゆつくり会えると思うよ」

「大丈夫？心配よ。夜早く寝てね」

「分かった。夜連絡するよ。またね」林が返事した。

金曜の朝の十時ごろ、携帯が鳴った。代休を取って寝坊していた林はあくびしながら携帯を手にした。夏美の電話だった。

「もしもし、夏美さん」

「おはよう。ごめん、寝ているところ、邪魔して」林の眠そうな声を聞いて謝った。

「起きようとしたところ」

「今から林の所に言ってもよろしい」夏美が興奮気味で言った。
「仕事は？」

「今日有休を取ったから、林さんためのスープを作りました」

「ありがとうございます。もちろん来て良いよ」

「じゃ、すぐ迎えに来て、今は山科駅前の交差点にいます」

「はい、ちよつと10分まって」林はビックリした。

電話を切つてからすぐに起き、簡単に歯を磨き、顔を洗った後、

急いで家を出た。途中なぜかコンビニを寄ってコンドームを買った。奈々子のときのものがまだ残っていたが、気持ちを新たにしたいから、古いやつを捨て、新しいのを買った。林は走って夏美を迎えに行った。

夏美が外環三条の交差点で寒そうに立っていた。ホワイトのニットコート、足にフィットしたスリムのパンツ、グレーのローヒールのブーツ、首にミックスカラーチェックのマフラー、大人らしい女性を思わせる格好だった。右肩に大きな鞆をかけていた。

「おはよう。体が大丈夫？」夏美が左手を出してごく自然に林の手と組んだ。

「おはよう。もう大丈夫よ」

「今日、服可愛いね」林は無性に夏美を褒めたくなった。

「ありがとう。雑誌を参考したよ。かわいいでしょう」

「そう。なかなか似合うじゃない」

二人が並んで林のアパートに向かった。

「会社大丈夫？」

「会社はITバブルで、最近相当暇になったから、有休をとっても全然大丈夫よ」

「そうか。それはよかった」

「スープを作ったよ。食べてね」夏美が鞆から大きなランチジャーを出し、中のスープをお椀に移した。キャベツと牛肉の煮込みスープだった。

「美味しそう、夏美さんを作ったの」

「そう、夏美が作ったよ。ママと一緒にだけど。早く食べて」

「本当に美味しいね」林がスープを飲みながら言った。

「朝六時から作ったよ」夏美が恥ずかしそうに俯いた。

「ありがとう」林は横に座った夏美の頭を撫でた。「僕がちよつと言っただけで、ここまでやってくれるってありがとう」

林は本能的に夏美を抱きしめた。

林は目の前の夏美を見て本当に感動した。奈々子のとき、愛の本

能に掻き立てられ、奈々子を愛していた自分を楽しんでた。今は衝動的なパッションがどこにもなく、愛された自分が恋愛の心地良さを身体で感じていた。

夏美は目を閉じ、頭を林の肩に寄せ、すべてを任せるようにじっとも動かなかった。林は夏美の温かい吐息と鼓動をはっきりと感じ、夏美の頬に軽くキスした。二人の間、無言の時間が静かに流れていた。

「本当に僕のお嫁さんになりたいの」林が小声で聞いた。

夏美が軽く頭を縦に振り、何も言わなかった。林は片手で夏美のあごを少し持ち上げ、口を夏美の口に添え、舌を夏美の口に入れようとしたが、夏美の口もとがほとんど閉じたままだった。

「はじめてなの」林が口を離れて聞いた。

「はじめてじゃないけど、教えて」夏美は頬が赤くなり、顔を林の胸に沈めた。

「口開けてね」林が言いながら口をもう一度夏美の口に当てた。

林の伸ばした舌が夏美の口の中へ入れたが、夏美の舌が硬直したまま絡み合えず、ぎこちない動きをしていた。林は口を外して、「ブツ」と笑った。

「これはキスじゃないよ」

自信をなくした夏美が顔を歪んだ。

「怒らないで、僕の女になりたいだろう。誰だって最初はわからないよ」

夏美の両手が林の首にしがみつき、何も言わなかった。

林は男女のイロハを最初から夏美に教えた。

すべてのことが終わったとき、もうすでに昼過ぎだった。

5・7 金曜の出来事 其の2（前書き）

夏美が身体を丸くして林の胸に潜めていた。

5・7 金曜の出来事 其の2

夏美が身体を丸くして林の胸に潜めていた。

「先、痛かった？」林が聞いた。

「最初だけ痛かったけど、後は気持ちよかった」夏美が正直に答えた。

「聞いて良いの、夏美さんの過去の経験？」

「夏美さんと呼ばないで、夏美と呼んでね」

「分かった。夏美さんと呼ぶと、僕の彼女らしくないな」

「林さんは何を呼ばたいの？林さんでもいいけど」

「そうね、親しい友達は一アキとか、アキ君とか呼んでいるから、アキでいいよ」

「じゃアキにしよう。アキ」

林は一瞬「ミン」も考えたが、奈々子のことを思い出すとやめた。
「そう、先の問題。聞いていいよ。自分もたまにおかしいなあと思ってる時がある。27才なのに、別に男を拒んだ記憶はなかったけど」

「今まで何人経験したの」

「アキは3人目。高校の時1人と大学の時1人」

「普通はそれで基本は知るはずとおもうけど」

「相手も経験豊富じゃなかったし、しかも両方とも痛かったから2、3回で諦めた」

「それはわからないけど、でも本を読んだり、ビデオを見たりして学習するのが当然じゃない。相手の男性は知りませんが、男としてこれぐらいの努力は惜しむ人っているの。僕も結構いろいろと情報収集したよ」

「私、女の子だからそういった本とビデオは生理的に拒絶しちゃう。考えたこともなかったよ」

「恥ずかしいのが分かるけど、男の立場から見れば、「君早いね」

とか、「君だめね」とか女の子に言われると、もの凄いショックをうけるよ。女の子が「君不細工だね」と言われるより遙かにショックを受けるよ。だから、そう言われないうようにとにかく必死だったよ」

「ええー、知らなかった。子供が産めればもの足りると思ってた」
「相手に「痛かった」とか、「もうしたくない」とか言っただけだったの」

「言っただけかも、いや、言った。」

「それは男の子が絶対嫌になるよ」

「別れる理由にもなるの」

「なるよ。100%別れる理由の一つにはなる。」

「知らなかった。こんなに深いな」

「とにかく、デリケートよ。嫌を言っただけのがもちろん、下手に褒めてもだめ、コンプレックスになるから」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「優しく学習を促すかな。それはできる女の基本中の基本」

「良い勉強になった。でも、アキが上手だから私勉強しなくていいから」

「上手かどうか比べるようがないから知らないけど、他力本願じゃだめよ」

「分かったけど、いつも他人に頼ってしまったのが性格だから」

「今まで人を本気で好きになったこともないし、なるうもしたことがなかった夏美がなぜ僕にここまで積極的かな、不思議」

「自分も分からなかった。年も微妙になったし、負け犬を意識するようになったかな」

「それに占いね」

「でも、アキとあった瞬間、運命を感じた」

「乙女ティックな。恐れ入ります」

「でも、ママもアキのことを褒めたよ。女の感から見ればアキが優しい男だと言っただけ」

「まだ会ったこともなかったのに、なぜ知ってるの」

「会ったよ」夏美が「プツ」と笑った。

「ええー、リーガロイヤルホテルの時の隣テーブルの婦人」林が驚きを隠せなかった。

「そうよ。ママがずっとアキを観察したから」

「家族全員野球で夏美を応援してるって恐ろしいね」

「ごめん、全部私自信がないからだ。アキ、気にしないで」

「パパも役割を果たしたの？」

「パパも相談を乗ってくれたよ。でも、パパが恋愛のことをあまり知らなかった」

「かなり珍しいご家族ね」

「子供の時からそうなの。パパとママが元々仕事人間でママが36、パパが40の時、私を産んだからかなり過保護に育てられた。でも、パパとママが大好き」

「僕にとつては決していい話ではないよ」

「アキも好きだから、心配しないで」

「何かあったら助けて」

林は冷静を装っていたが、心の中では穏やかではなかった。

「アキの過去を聞いてもいいかな」

「言ってもいいけど、ショックを受けるよ」

「受けると思うけど、でも聞きたい」

「上海の時、3人の女の子と付き合ったことがある。でもそれは恋愛ごっこだけ、あまり記憶に残ってなかった。日本に来て、大学の時、中国人の女の子と付き合った。彼女は美人だけど、かなりわがまま、卒業と同時に自然消滅。彼女今何をしてるかな。当時結構愛したと思っていたが、終わってみればすぐに忘れた」

「その後は？」夏美が催促した。

「知ってたの？」林が聞き返した。

「中村さんから聞いたけど、つい最近まで付き合ってた」

「よく知ってるね。中村課長も僕のことをよく調べてるだ」

「会社のだれでも知ってるって、中村さんが言ってたよ。結婚前提で付き合ってたじゃなかったの」

「恐れ入りますよ。なぜ僕の情報がここまで筒抜けなの」

「中村さんがパパの友人なの。だから、紹介する前かなり慎重だった。かなり優秀な青年だけど、つい最近彼女と別れたという中国人同僚が大丈夫かとパパに聞いたよ。家族で相談した結果、会ってみよう、という結論になった」

「なんかマイホームを買いと同じね」

「ごめん、紹介だからそれぐらい責任は発生するじゃない」

「でも、今日、僕が夏美を抱いたことは中村課長に言わないで、会社の中に立場がなくなるよ」

「はい、分かった。言わないことにしよう」

「でも、親には言うでしょう。夏美の両親に会いたくないな。娘を盗んだように見られそう」

「こんなことは絶対ないよ。パパとママが凄くいい人、アキのことも好きと言っていたし、私がアキを好きだから、盗んだじゃない」

「僕が自由放任の家庭で育てたから、夏美の家族を理解できないかも」

「先の話の続きを聞きたい、つい最近別れた彼女のこと」

「去年の10月、まだ4ヶ月しか経てなかったよ」

「本当について最近ね。結婚前提で付き合ってたじゃない。なぜ別れたの？」

「いろいろとあったから」

「いろいろってなに、聞きたい」

「親が会いたいと言われたから、会いに行ったら、彼女の叔父さんにももの凄い失礼のことを言われた。中国人が民度低いとか、大嫌いか、僕の中国籍をやめるとか、悪口言い放題だった。娘の彼氏が中国人であることに面白くないと思ってたらしい」

「それはひどすぎるね。彼女本人は？」

「もちろん本人はそう思ってたなかった」

「親の反対で別れたの？」

「その後、彼女が妊娠して、僕が結婚しようと言った。しかし、彼女が僕と相談せず中絶した。僕が怒って別れちゃった」

「アキの子供なのに、相談もせず中絶したの。信じられない。何か特別の理由があった？」

「週末に妊娠したことを知らせてくれて、翌週の週末にゆっくり話そうと僕が言ったけど、金曜に中絶した」

「信じられない。理由は？」

「僕も未だに分からない。彼女によれば、ちょうど会社が合併する真つ最中なので、子供を産むと、確実に首にされてしまう。仕事と子供の中に、仕事を選んだ。子供を産んだら仕事をすれば、今の仕事ができなければ別の仕事が必要とあるだろう。言っただけど、聞いてくれなかった。未だに理解不能」林が嘆きながら言った。

「何の仕事、きつと立派な仕事だろう」

「証券会社のM & A、会社の吸収合併の仕事をしていた。彼女はかなりしつかりはしていた」

「一回やめたらなかなか同じような仕事じゃできないだろうね」

「それも分からないことでもないけど、でも、相談もせずに中絶ってありえないだろう」ここまで言うと、林がかなり興奮気味になった。

「きつと別の事情があったかもしれない」

「言ってくれなければ知るわけがないよ。最後に大喧嘩したから、別の理由はないと思う」

「アキ、今も彼女のことを好きなの？」

「こんな問題聞くか」

「それはそうね。二年も付き合っだし、結婚も考えたから、未練ないわけがないだろう」

「4ヶ月後、他の女の子を抱いてるって夢にも思わなかった」

「同じベッドで？」

林は黙って否定しなかった。

夏美が不機嫌な顔をして黙っていた。

「だから、最初言っただろう。ショックを受けるから聞くな」

夏美が黙り込んでいた。

「でも、夏美には本当に感謝してるよ。夏美がいなければ今も僕が落ち込んでいただろうな」

「僕のが好き？」不機嫌そうに黙っていた夏美を見て林が聞いた。

夏美が黙ったまま、ゆっくりと首を縦に振った。

「それで十分じゃない。僕も君のことを愛してるから」

林は何も言おうとしない夏美を強く抱きしめた。

「ちよつとヤキモチを焼いてるの？」

「ちよつとじゃない。かなりヤキモチ」夏美が泣きそうな声で言った。

「私と彼女、どっちが好き？」

「比較するようがないよ。彼女とは綺麗に別れてたから、今は間違いない夏美に決まってるよ」

「でも、私って出来が悪いじゃない」

「彼女と比べると、彼女の方がしつかりしているし、頭もいいし、自信もあつたけど、夏美の方が美人だと思うよ。それに、夏美には愛してくれる家族がいるのに、彼女にはいなかったよ。これから比較するな。僕は未練がましい男じゃないから」

夏美が納得しなかったようだ。

「夏美なら僕の子供を産むの？」

「結婚前提で付き合ってるなら絶対産むね」

「そうでしょう」

林が言いながら、片手で夏美の乳首をちよつと力を入れて揉んだ。突然だったか、それとも感じたか、「ああー」と言って全身が一瞬けいれんした。

「やめてえ」夏美が甘い声をした。

林はすかさず夏美の口を塞げた。夏美が林の舌を待っていたように、口元開けたままだった。
二人は再び体を重ねた。

第6章 中国での仕事（前書き）

夜、九時ごろ、林は夏美をJR山科駅まで送った。
「明日また来てもいい」夏美が甘い声で林に聞いた

第6章 中国での仕事

夜、九時ごろ、林は夏美をＪＲ山科駅まで送った。

「明日また来てもいい」夏美が甘い声で林に聞いた。

「もちろんいいよ。明日天気がよければどこか行こうか」

「それはいいよね」

「行きたい所がある？」

「あまりないけど。それに、明日、アキの所にお泊まりにしてもいい？」夏美がまたねだった。

「両親に反対されるじゃない。お嬢ちゃん」林の防衛ラインは夏美の攻撃には全く無力だった。

「パパとママは説得するから、アキと一緒にいたい」夏美の顔には嬉しさを隠せなかった。

「分かった。気をつけて帰ってね」

夏美がやつとつないだ手を放し、幸せそうに改札口に向かった。

林は慣れ親しんだ外環道を歩いていた。2月の上旬は一年の中一番寒い季節だが、林の心の中は初夏のような気持ちだった。自分が小河の畔の木の陰に立ち、澄みきった水のさらさらと流れる水音を静かに拝聴し、緑豊かな大地の匂いと咲き始めた花の香りに囲まれ、温かくて新鮮な空気を胸一杯吸い込み、何も考えず、何も欲せず、ただ目の前の風景に幸せを本能的に感じるような心境だった。林は妄想しながらアパートに帰った。

林と夏美の関係は急速に深めていった。週末になると、二人はいつも一緒だった。京阪神の寺や観光地だけではなく、名古屋まで車で遊びに行った。デパートに買い物に行くとき、林が一緒にいるだけではなく、結構アドバイスをしたりして、夏美にとっては幸せの時だった。2ヶ月も経たないうち、林と一緒にないと、夏美が服

を買わなくなった。「中国では普通だよ」と林に言われたとき、夏美が有頂天になった。お節介な夏美の両親は「もらいもの」と称して二人に旅行券をあげたり、映画の鑑賞券をあげたりして、二人の付き合いを全面的にバックアップした。しかし、料理をするとき、手伝うのがいいけど、駄目だしされてしまうと、努力していた夏美にとつてはかなりプレッシャーになっていた。何回か夏美に両親が林に会ってみたいと言われたが、林は言い訳を付けて会うのを拒んできた。付き合いからはまだ2ヶ月は理由の一つだが、やはり奈々子のときのトラウマが認めたくなくても引きずっていた。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非ご覧ください。

[lin.web.fc2.com/](http://alexlin.web.fc2.com/)

[http://alex](http://alexlin.web.fc2.com/)

6 - 1 A社との交渉 其の1

4月に入ると、林のプロジェクトが佳境に迎え、5月の役員プレゼンテーションを向けて最後の仕上げ段階に入った。現地の調査や地元の役人との交渉などを重ねて合併の相手を3社に絞った。

第一候補は浙江省張家港A社。A社は元々米国の大手薬品会社と張家港市との合弁会社として1995年に設立され、2000年に米国の資本が撤退した後、その大手製薬会社のOEMメーカーとして薬品生産を続け、現在、自社のブランドの立ち上げに意欲的に投資している。製品の種類はS社の製品とかなり近く、生産技術水準も特に問題ない。総経理、王克剛は40才前後の若手社長で日本に留学した経験があり、頭の回転が早く国際感覚のある経営者だった。さらに、地元の会社なので、役人との交渉も非常にスムーズだった。ただし、薬品を販売する実績がなく、中国市場を開拓したいS社にとってはかなり痛い所だ。

第二候補は上海市近郊B社。B社はS社の飲料事業の合併相手で、今まで飲料事業で大きな信頼関係を築いてきた。しかし、飲料メーカーである故に、薬品生産の経験がなかった。初期投資が膨らむだけではなく、薬品生産免許を申請するのにかなりの時間と労力が予測される。A社と同じく、販売のチャンネルは全くない。

第三候補は江蘇省無錫市C社。C社は中国大手医薬品の子会社で、親会社の中国全土の販売拠点はS社にとっては非常に魅力的な合併相手だ。しかし、元々国有企業なので、生産管理と品質管理に問題があり、地元の役人との交渉も困難と予想される。

役員の中にB社を推薦するものがあるが、佐々木常務、佐野中国総括部長と伊藤課長はA社を合併相手として考えていた。林も全く同じ考えだった。4月中に、最終的な交渉を行い、5月に役員プレゼンテーションし、役員会の同意を得た後、正式にA社と合併契約交渉を進めるスケジュールだ。

4月上旬と言えば花見の季節だが、連日の残業で土日はできるだけ身体を休ませないといけなかったから、夏美が内心行きたかったけど、林に花見する余裕はなかった。5月のプレゼンが終わったら有休をとって出かけよう、夏休みは海外でも行こう、と林は夏美に約束した。頑張っている林を邪魔するわけには行かないから、林のために食事を作ったり、家の片付けをしたりして、林を見守っていた。正直、夏美の料理がお世辞でも美味しいとはいえないが、自分の仕事を理解してくれる夏美には心から感謝していた。

4月上旬の日曜日、林と佐野中国総括部長と伊藤営業4課課長、それに同僚鈴木と通訳の中国人李星秦、5人で第一候補の張家港市のA社に最終交渉に行った。

佐野中国総括部長はずっと柔道をやっていて、体格ががっちりしたスポーツ系の人間だった。上下関係に厳しく、頭の回転が速いとはいえないが、義理人情で動く人だった。佐々木常務の忠実な部下で、佐々木が常務になったおかげで佐野が新設の中国総括部の部長のポストを手に入れた。伊藤課長は林の直接の上司で、頭がよく優しい人だった。しかし、おとなしい性格で、上司のプレッシャーによく一見イエスマンに見えるが、内心でしっかりした考え方の持ち主だ。中国出張で、何度も中国人と柔軟に交渉した林を見て、林に対して高く評価していた。どこの派閥に所属したのではないが、佐々木常務の派閥に近い人間と見なされていた。鈴木は林より先に入社したが、林より年下だ。理想主義のタイプで林に対してライバル意志がある。英語はそれなりにできるが、中国語ができない。現在、中国語を猛勉強中だ。李星秦は元々生産技術部に所属していたが、今年の4月に新しく営業4課に配属された通訳だ。佐々木常務の口利きでS社に入社できたという噂があるが、佐野の要望で営業4課に配属された。北京外大日本語学科の出身で日本語能力は堪能だが、林は配属したばかりの李をあまり知らなかった。

中国式の自己紹介した後、副市長が乾杯の音頭をとり、宴会が正式に始まった。佐野部長は張家港市に来たのが今回2回目で、まだ

中国式の豪華な宴会に多少ビックリしたが、他の4人はもうすでに慣れきっていた。

王の通訳を通して、佐野部長と中国側の人々が日中関係やら今後の仕事の発展やらお互いにべた褒めしていたが、林は伊藤課長と鈴木と翌日交渉項目を話し合っていた。

翌日の仕事があるので、この日の宴会は2時間で終わった。佐野部長と王が中国側の人にお酒を勧められ、かなりの酒を飲んで顔が真っ赤になったが、林と伊藤と鈴木はほとんど酒を飲んでなかった。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非ご覧ください。

[lin.web.fc2.com/](http://alexlin.web.fc2.com/)

[http://alex](http://alexlin.web.fc2.com/)

6 - 2 A社との交渉 其の2（前書き）

昼の閑空発の飛行機を乗って、上海の浦東空港ターミナルに着いたのが午後3時ぐらいだった。空港の税関を出ると、A社の王克剛総経理が自ら迎えてきた。マイクロバスで張家港市に直行し、張家港のホテルにつく時はもう午後7時半回ったところだった。

6 - 2 A社との交渉 其の2

昼の閑空発の飛行機を乗って、上海の浦東空港ターミナルに着いたのが午後3時ぐらいだった。空港の税関を出ると、A社の王克剛総経理が自ら迎えてきた。マイクロバスで張家港市に直行し、張家港のホテルにつく時はもう午後7時半回ったところだった。チェックインして簡単に荷物を整理した後、宴会場に誘導された。

五つ星のホテルもあって、内装が非常に豪華で派手な赤色と金色がふんだんに使われていた。中国式の大きな丸テーブルが置かれたレストランの個室に入ると、すでに何人かの中国人関係者が待っていた。A社の副総経理と財務経理以外に、市の張副市長と市の財政局の局長も来られた。そのほかに30代半ばの妖艶な女性がいた。女性性は王総経理の秘書だと紹介された。

中国式の自己紹介した後、副市長が乾杯の音頭をとり、宴会が正式に始まった。佐野部長は張家港市に来たのが今回2回目で、まだ中国式の豪華な宴会に多少ビックリしたが、他の4人はもうすでに慣れきっていた。

王の通訳を通して、佐野部長と中国側の人が日中関係やら今後の仕事の発展やらお互いにべた褒めしていたが、林は伊藤課長と鈴木と翌日交渉項目を話し合っていた。

翌日の仕事があるので、この日の宴会は2時間で終わった。佐野部長と王が中国側の人にお酒を勧められ、かなりの酒を飲んで顔が真っ赤になったが、林と伊藤と鈴木はほとんど酒を飲んでなかった。

林は部屋に戻り、シャワーを浴び、資料を簡単に目を通した後、早く寝ようと思った。ホテルの電話で夏美に電話をして、ホテルの電話番号と部屋番号を夏美に教え、折り返し電話をもらった。

「もしもし、夏美、元気？」

「ハイ、元気よ。アキ、元気？」

「元気よ。フロントとうまく話したね」

「毎回事のことよ。もう慣れたから、でも五つ星もあってフロントの英語が非常に流ちょうだった。今度中国に行ってみたいな」

「連れて行くよ。今回のプロジェクトが終わったらね」

「行きたい、行きたい。忘れないでね。約束よ」

「分かった」

「今日も中華料理の本を買ったよ。ママと一緒に勉強中。レシピに従って作ってたけど、まずかった。パパが変な顔をしてた。どこかが間違ってたかな」

「頑張ってるね。今度食べてみるよ。まずいやつは困るな」

「帰るまできつと美味しく作れると思う。夏美が変わった、林さんに感謝しなきゃってママに言われた。」

「恐縮ですよ。何もしてないから」

「そばにいただけで最大の励ましよ、アキは。それで、日本にいつ戻るの」

「木曜には帰れると思う。よほどのことがない限り、木曜に戻る」

「早く帰ってほしい」

「そのうちにうつとうしくなるよ」

「そんなことは絶対ない」

「明日の仕事がハードだから、ごめん、早く寝たい」

「じゃ、早く寝て、夏美の夢でも見てね。おやすみ」

「おやすみ」

林が電話を切った後、すぐに寝た。どれぐらい経ったか、林がドアのノック音を聞こえた。

「だれだろう」と思いながら、壁にあった時計を見た。12時半だった。

「だれですか」林は日本語と中国語両方で聞いた。

反応がなかった。ドアを開けたら、見知らぬ若い女性が立っていた。女性は黒のナイトドレスで、背が高く化粧が非常に濃かった。

「誰ですか」林は中国語で聞いた。

「林さんですか」女性も中国語で答えた。

「何かご用がありますか」

「お供にしてもよろしいでしょうか」

「貴方呼んだ記憶はないけど」

「総経理はすでにお金を支払ったから、ご心配なくお供させてください」

「A社の王総経理ですか」

「どこの総経理は重要じゃないでしょう。ご心配なく、これも持っていますよ」若い女性が言いながら手の平に持っていたコンドームらしきモノを見せた。

「ごめん、僕が呼んだ覚えがないから帰ってください」

若い女性が何か言おうと思っていたが、言葉を見つからず不機嫌そうに帰った。

林は中国に出張するとき、そういうことを勧められたことはあったけど、直接部屋に來られた経験がなかった。かなり不思議そうに思ったが、睡魔に勝てずまた寝た。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。

[lin.web.fc2.com/](http://alexlin.web.fc2.com/)

[http://alex](http://alexlin.web.fc2.com/)

6 - 3 A社との交渉 其の3（前書き）

翌日のホテルのロビーでの集合時間は朝8時半だった。林はその10分前にロビーに行き、伊藤と鈴木がすでにいた。集合時間ぎりぎりになって、李が眠そうに来て、あくびしながらみんなと挨拶した。

6 - 3 A社との交渉 其の3

翌日のホテルのロビーでの集合時間は朝8時半だった。林はその10分前にロビーに行き、伊藤と鈴木がすでにいた。集合時間ぎりぎりになって、李が眠そうに来て、あくびしながらみんなと挨拶した。A社の迎えのマイクロバスがすでに入り口に待っていた。結局、8時45分になって、佐野があくびしながらやっと来られた。佐野はいつも体力を自慢していて、体育系の性格もあって、部下の遅刻に非常にうるさかった。上司のことなので、林は佐野の遅刻にあまり深く考えなかった。

一同がA社に行き、会議室に夕べの副市長と財務局の局長がすでにいて、昨日の妖艶な女性もいた。お互いに簡単な挨拶をし、記念写真を撮り、そのあと、副市長と局長は帰った。

今回の出張の目的は工場建設予定地買収の進展と中国国内販売チャンネルを確認し、さらに、投資の総額と合併比率の大枠を再確認することだった。

「工場建設予定地の買収は進んでいたでしょうか」佐野が切り出した。

李の通訳を経由して、王は中国語で答えた。

「昨日、副市長も説明したように、工場建設予定地の買収はすでに省政府の事前承認を得ており、さらに、張家港市の市役所の事前承認を得なければいけないが、必ず得られると思います。」

「取るまでどのくらいかかるでしょうか」

「3ヶ月あれば、つまり、7月中旬までは得られる自信があります。副市長がオーケーを言った以上、問題はないと思います。市の方もこのプロジェクトに大きな関心を寄せています」

「前は5月末まで、許可を得られると言われたが、なぜ、七月中旬に遅れるようになったのでしょうか」

「省の承認が思った以上時間がかかったから、それだけです。着

工日は来年の4月にしたいと前回伊藤課長が仰っていたから、それまでおそらく問題ないでしょう」

「その後、他の許可もあるので、時間大丈夫でしょうか」

「省の事前許可がもうすでにおりたので、今回話した内容を含めて市に仮申請を出す予定です」

「貴社を合併相手にするには、役員会の最終判断が仰がないといけないが、私達はA社を押したいと考えているので、ぜひ事前承認をいただきたい。それがなければ役員会に持って行くことすらできません」

「正式承認は両社の契約をなければ得られないが、その事前の承認はお任せください。全力で尽くします」

「あとで、用地を見ていただきたいですが、見られるでしょうか」
「もちろん、このすぐそばなので、いつでも見られます」

「特に排水処理に我が社の最新技術を導入して水をリサイクルするつもりなので、地質のデータを出していただけないでしょうか」
「前回のとき、伊藤課長からご要望を出されたので、すでに用意しております」

秘書は分厚い書類をみんなに配った。

「英語版と中国版しかないので、大丈夫でしょうか」

「英語版があればなんとかなると思います」伊藤が言った。

「販売のチャネルはどう考えているでしょうか」話題を変えて販売について佐野が質問した。

「前回も言いましたが、現段階では我が社も苦戦しています」A社の販売担当副社長が言った。

「日本では、日本医師会という組織があるが、そこを通して現場の医者に使ってもらって効果があれば売上を伸ばすことはできます。中国ではそういった業界団体はないでしょうか」

「日本医師会というような団体はないです。中国の病院は基本的に民間の会社と同じく、利益を出さないといけません。販売する商品が処方薬なので、前回提案された大々的に広告を打つよりも、販

売のリベートを増やした方がいいではないでしょうか。まず、江蘇省内でリベート率を上げてやってみて、たとえば最初のキャンペーンの場合、売上の3割をリベートとして病院に支払うと、非常に魅力的になると思います」

「3割、もの凄い数字ね」佐野がちよつとビックリした。

「中国ではちよつと高いけど、驚くほどの数字ではないです」

「リベートは賄賂じゃないですか」

「もちろん最初からリベートでいうと、よくないが、発売のキャンペーンの奨励金として、個人ではなく、病院に支払えばそれほど問題はないです」

「なるほど」

「さらに、現場の営業にも奨励金を出さないと、なかなか売上が伸びないです。中国ではそれは当たり前になってしまっています」

「それは日本でもあります。ほかには何か方法はないでしょうか。たとえば既存の薬品卸売業者との接触はしてないですか」

「いくつかの業者とは接触したが、商品ができる前では、ほとんど相手してくれないです」

その後も販売チャンネルに関して、昼の1時まで話し合ったが、それ以上の進展はなかった。

「もう昼の1時なので、そろそろお昼はいかがですか。午後からもゆっくり話せますから」王総経理がみんなに食事を促した。

お昼でもビールを出されたが、さすがに午後もあるので、S社の5人はみんな飲んでなかった。昼のランチが終わると、マイクロバスに乗って工場建設予定地にいった。

バスの中に、林は伊藤に話しをかけた。

「課長、事前の承認が遅れそう」

「僕もそう思ってる」伊藤が返事した。

「市の許可が7月半ばとすれば、衛生許可など他の手続きを考えないと、恐らく来年の3月まで手続きがかかりそうですね」

「僕も逆算した。大体同じ計算になる。でも、多少遅れるけど、

取れないことはなさそうな感じはするな」

「副市長が出た以上、市の役人は下手なことはしないでしょう」

「後で、佐野部長ともう一度話してみよ」

「分かりました」林はゆっくりと答えた。

なお、この小説は著者自身のホームページにも載せています。是非、ご覧ください。

[lin.web.fc2.com/](http://alexlin.web.fc2.com/)

<http://alexlin.web.fc2.com/>

6 - 4 A社との交渉 其の4（前書き）

工場予定地の見学は1時間ぐらい続いた。その後、A社の会議室に戻り、予定地に関していろいろなことを6時まで話し合った。佐野は午後からずっと眠そうな顔をしていた。

6 - 4 A社との交渉 其の4

工場予定地の見学は1時間ぐらい続いた。その後、A社の会議室に戻り、予定地に関していろいろなことを6時まで話し合った。佐野は午後からずっと眠そうな顔をしていた。

ホテルに帰り、自分の部屋に戻した後、佐野の所に5人が集まった。

「林君が言ってたように、役所の承認は思ったより、時間がかかりそうです。僕もそう思っています」伊藤が部長に報告した。

「具体的にいつまでと見込んでいるの」佐野が聞いた。

「逆算してみました。うまくいけば来年3月末までじゃないか」

「着工の予定日のぎりぎりまで、困ったな。」

「将来のことだから誰も知りません。しかし、中国で事業を展開するのなら、これぐらいのリスクが織り込まないといけないじゃないでしょうか。ちなみに、副市長も来られたから、張家港市も積極的に動いていることが伺えます」横にいた林は付け加えた。

「それもそうねえ。我が社の大プロジェクトだから、着工日を拘るより確実に工場を立ち上げるのが遥かに重要だから、この件も上に報告しておく。それより、販売チャンネルの方が全く進展してないな。困るなあ」佐野が頭を抱えていた。

「私も全く進展ないと思っています」伊藤がなすすべなく困っていた。

「林君、何か別の方法がないか」佐野が林に聞いた。

「僕も正直知りません。これは本当に戦略を練り直さないといいないと思います。今のA社に期待はできないことは確かです。例えば無錫市C社の親会社と提携するとか、考えないといけないじゃないかと思いますが」林も例え話しかできなかった。

「子会社と提携せず、親会社に販売だけを助けてくれって虫色がよくさるじゃないか」佐野が林に言った。

「日本ならそうかもしれないが、中国では条件次第。利益をもた

らせるなら簡単に乘っけてくれると思います。やってみる価値はあります」林は反論した。

「そうなれば一番だろうな。頼むよう、林君、帰ってからコンタクト取ってみて。何もかも中国市場で我が社薬品を売らないと、これは社運にかかる問題だから」

「はい、全力でやってみます」林は答えた。

前日と同じく、ホテルのレストランに宴会を開かれた。副市長と局長と王は来られなかったが、A社の福総経理や部長クラスの幹部と秘書の女性が同席した。林と伊藤と鈴木が翌日に契約交渉があるから、ほとんど酒を飲んでなかったが、佐野は横に座った女性秘書にしきりに酒を勧められ、結構の量のお酒を飲んだ。2時間半くらいの宴会はあつという間に終わり、ろれつが回らない佐野に気がつかって、みんなに言った。

「あした、まだやることが一杯あるから、今日早く寝よう」

みんなは「はい」と言って部屋に戻った。

林は前日と同じ、シャワーを浴び、夏美と短い国際電話してベッドに入った。この夜は見知らぬ女性が来なかった。

翌日の朝、林は8時20分にホテルのロビーに行った。ロビーには伊藤と鈴木がすでにいた。李は結局前日と同じ、約束の8時30分になって来られた。佐野はその日も時間通りに来なかった。

「部長が中国のお酒に弱いでしょうか」林は伊藤に聞いた。

「どうでしょうね。相当お酒に強いって聞いたことがあるけど、仕事で疲れたじゃない」伊藤が無症状に答えた。

結局、佐野が9時前になってやっと来られた。

A社に到着すると、会議室に入り、交渉がすぐ始まった。しかし、その時、王が来てなかった。王が来たのがその日昼になってからだった。

その日は合併の出資比率と投資総額の大枠について熱い議論を交わされた。午前中の9時半から、お昼を挟んで午後の7時まで議論

を続けた。大梓とはいえ、両社が相当真剣に話し合った。最終決断とは言えないが、かなりのことを合意するようになった。終わった時、議論に参加する者全員が抜け殻のように疲れ切った。夜の宴会を断り、中国式定食「工作餐」を食べてホテルの部屋に戻った。

林はシャワーを浴び、上海の実家と夏美に電話した後、10時前に寝た。この日、疲れた林が熟睡したので、ドアがノックされたかどうか全く知らなかった。

出張の最終日は観光の日で、「双山島」という観光地に行く予定だった。

8時半前、林はいつものようにロビーに行ったとき、伊藤がすでにロビーにいて、しばらくすると、鈴木と李が来られた。

「じゃ、行こう」伊藤がみんなに言った。

「部長は？」鈴木が聞いた。

「疲れたから、今日部屋で休みたいって夕べ電話があつた」伊藤が答えた。

林は一瞬頭を傾げた。

「双山島」は長江に浮かぶ島で、90年代以降の開発でリゾートホテルやゴルフ場などが作られ、島全体が観光地になった。4月上旬の平日とはいえ、観光客で一杯だった。日本のリゾート開発地とそれほど変わらないなと林が感じた。お昼は長江の川魚料理を食べ、夏美用と職場用のお土産を買い、4時ぐらいにホテルに戻った。

4人がホテルのロビーに入ったちょうどその時、一台の自家用車がホテルの入り口に止まり、佐野と妖艶な女性秘書が降りてきた。

「部長、お体大丈夫ですか？」部長が入るのを待って、李が心配そうに声をかけた。

「見た通り、僕は全然大丈夫」佐野が満面の笑顔で答えた。

「それでよかったです」李が喜んでいた。

「心配をかけて悪いな。先、秘書に連れてもらって市内の観光を

してきたよ。お土産も買ってきた。今夜楽しもう」佐野が笑いながら言った。

6 - 5 A社との交渉 其の5（前書き）

7時半に宴会が始まった。乾杯した後、みんなが楽しく飲み始めた。出張の最終日なので、林も楽しく飲めるようになった。佐野はテンションが高く、中国側から勧められたお酒は進んで飲んでいた。

6 - 5 A社との交渉 其の5

7時半に宴会が始まった。乾杯した後、みんなが楽しく飲み始めた。出張の最終日なので、林も楽しく飲めるようになった。佐野はテンションが高く、中国側から勧められたお酒は進んで飲んでいた。林はたまにA社の幹部と中国語で話したりするが、基本的に伊藤と鈴木と話していた。始めてから1時間経ったところ、王がお酒を持つて林の所に来た。

「林さん、今回大変お世話になりました」王が中国なまりの日本語で林に話をかけた。

「こちらこそ、これからも宜しくお願いします」林は日本語で答えた。

「今日、最終日だから楽しんでください」

「毎日のおもてなし、ありがとうございます」

「旅の恥はかき捨てという日本のことわざがあるでしょう。思う存分に遊んでください。遠慮はご無用ですよ」

「たがを外してないって」

「日本の男性は昼間はまじめだけど、夜は自由奔放じゃない」王が急に中国語で話した。

林は若い女性のことを思い出して、ようやく王の真意を悟った。

「お言葉に甘えて」林も中国語で答えた。

宴会は12時まで続いて、みんなかなりのお酒を飲んでいて。途中で、夏美に心配させないように部屋に戻って夏美に電話した。

部屋に帰り、シャワーを浴びた。シャワーを浴びながら王の言ったことを考えて、佐野の遅刻のことと今日観光に来なかったことを思い出し、すべてひらめいた。

部屋がノックされ、林がドアを開けると、この前の若い女性が立っていた。

「一緒に楽しもうよ」明らかにお酒を飲んでいて、話しながら強

引に林の部屋に入ろうとした。

「すみませんが、ボスに伝えてください。僕はこういうことが好きじゃないので」林は中国語できっぱりと断った。

「林さんのことが大好きだったのに」女性が泣きそうな顔して言った。

「ごめんなさい。帰ってください」林が言いながら力任せで女性を外に押してドアを閉めた。

翌日、S社の5人は用意されたマイクロバスに乗って上海の空港に送られ、帰途についた。この日、林は会社に戻らず直接山科のアパートに帰った。

林は中国の出張から帰ってから忙しい毎日を送っていた。5月の役員プレゼンの準備のために、さらに、新たな販売チャネルを開拓するため、いくつかの中国の大手薬品卸売会社と接触したが、なかなか確かな手応えを感じなかった。どこの市場でも同じが、ブランドのない新規参入者に対してはどこでも冷たく、これからの市場開拓のために、非常に大きな労力と時間が必要だろうと林は自覚していた。

第7章 波乱（前書き）

4月の最後の土曜日、その日、林は朝から会社に行き、夏美とデートするために、4時に会社を出て、約束のJR大阪駅に向かった。

第7章 波乱

4月の最後の土曜日、その日、林は朝から会社に行き、夏美とデートするために、4時に会社を出て、約束のJR大阪駅に向かった。
「最近、残業多くて身体が大丈夫？」夏美が林の手をつないで心配そうに聞いた。

「かなり疲れている。明日、休みからどこか温泉に行きたいな」
林は疲れそうに言った。

「後でマツサージしてあげようか」

「僕のアパートにくるの？」

「アキ、行ってほしければ行くよ」

「今夜は僕のところ泊まるの？」

「それはアキの態度しだいよ」

「パパとママに言ったの？」

「帰らないとき電話するって言つといた」

「着替えも持ってきただろう」林は冗談っぽく言った。

「そうよ」夏美がちよつと恥ずかしげに言った。

「そうか。やる気満々じゃない。僕が何の態度をとってもかまわないじゃない」

「やだあ」

「もし今夜帰ると、きつと二人が喧嘩したつてお母さんに思われるよ」林がさらに突っ込みを入れた。

「じゃ、林さんは仕事で疲れたから邪魔しないようにと言えば変に思われないだろ」夏美が切り返してきた。

「夏美も上手になったね」

「アキに習ったよ。いつも私が突っ込まれるだけじゃ不公平じゃない」夏美がちよつと有頂天になった。

「話がかかるけど、アキ、ゴールデンウィーク、何日休みをとれそう」夏美が林に聞いた。

「またはつきり分かってないけど、5月最初の土日二日間は確実に休める」

「よければ家に来ない」

「夏美の家に行くの」

「パパとママに言われたんだ、アキに会いたいわって」

「前、ホテルで会ったじゃない」

「パパには会ってないだろ。夏美をここまで夢中にさせた男に会ってみたいとパパが言った」

「僕、責任重大じゃない」

「もしかしたら前のトラウマじゃなかった」夏美が急に落ち込んだ。

「そんなことはないよ」

「パパとママはそんな人間じゃないよ」

林は奈々子の時のトラウマが残っていたのが事実だが、それ以上に、理由はほとんどないけど、本能的に会いたくなかった。夏美は林にかなり気を使ってねだったり強要したりしたことはなかったけど、「連れてこい」と親に毎日のように言われていて難しい立場に立たされた。夏美の両親から見れば、今まで夏美の結婚のことを心配していたから喜んでいた面もあれば、林と付き合ってから可愛い娘がいきなりすべて変わり、われを失った娘を見て漠然とした不安があつて、自分の目で林のことを見てみたかった。

林がしばらく黙っていた。

「家に来てくれれば今夜アキのところに行くよ。お願い」夏美が悲しい顔をしてねだってきた。

林は何も言わなかった。

「お願い。うちってこんな怖いのに」夏美が泣きそうになった。

「何かプラスアルファしてくれるの」林はしばらく考えて悲しい夏美を見て急に同情したくなった。

「アキの言うことなら、何でも聞くから」夏美が躍り上がって満面の笑顔で喜んでいた。

「ママに電話してもいい」夏美が言い続けた

「こんな焦らなくていいだろ」

「そうね。もうちょっと後にしよう。パパとママがきつと喜ぶわ」

夏美が喜びをいささかも隠そうとしなかった。

二人が手をつなぎで映画館に向かった。

7-1 初めての挨拶 其の1（前書き）

夏美の実家は向日市の閑静な住宅街に築20年前後の一戸建てだった。玄関に入ると、20畳前後のリビングと6畳の和室が一体化になっていた。リビングの中央に大きなテーブルがおかれ、大型のテレビ台とテレビが隣の壁に、ブラウン色の皮ソファセットがもう一面の壁に置いてあった。リビングの至る所に雑誌と本が積み上げられ、大きな机セットが和室の半分ほど占領し、部屋と釣り合わないほどサイズだった。荷物が綺麗に整理整頓されていたが、全体的には乱雑した感覚が受けられる。

7-1 初めての挨拶 其の1

夏美の実家は向日市の閑静な住宅街に築20年前後の一戸建てだった。玄関に入ると、20畳前後のリビングと6畳の和室が一体化になっていた。リビングの中央に大きなテーブルがおかれ、大型のテレビ台とテレビが隣の壁に、ブラウン色の皮ソファセットがもう一面の壁に置いてあった。リビングの至る所に雑誌と本が積み上げられ、大きな机セットが和室の半分ほど占領し、部屋と釣り合わないほどサイズだった。荷物が綺麗に整理整頓されていたが、全体的には乱雑した感覚が受けられる。

「お邪魔します」林が靴を脱ぎ、きちんとおいてからリビングに入った。

「林君、よく来た」ジャージ姿の男性がニコニコしながら林に返事した。

「はじめまして、林と申します」林は相当緊張していた。

「初めまして、夏美のパパの定夫です。こんな緊張しなくて結構よ。じゃ、早く座りなさい」夏美の父が林の緊張を察知して優しく言った。

林が一礼して、持ってきたお土産を横に置き、ソファに座った。

その時、台所にいた夏美のお母さんがリビングに来られた。

「初めまして、夏美の母、直美です。夏美が大変お世話になっております」

「こちらこそ、いつも旅行券や映画チケットをいただいて申し訳ございません」林がソファから立ち、お辞儀しながら返事した。

「こんな堅苦しくないで、お酒を飲みながら話しましょう」

定夫に誘導され、林はテーブルの椅子に座った。夏美と直美は台所で料理の準備をしていた。

「林君はK大出身って聞いたけど」夏美の父がビールを飲みながら林に聞いた。

「そうです。修士の2年だけです。お父さんもK大出身ですか」

「そうね。僕はK大の法学部出身だけど、就職した後も学生運動を取材に行ったよ。あのときの学生は今と違って、みんな生き生きしていた。なつかしいな」

「そうですか、中国の天安門事件の時と同じかもしれません」

「中村君の紹介でうちの夏美と付き合うようになってね」

「中村課長のことですか。本当に感謝しております」

「中村君は同じボランティアの会の後輩で、今も一緒に頑張ってるよ。年を取ったからこれぐらいしかできないよ」

「どんな会ですか」

「地域を盛り上げる会で、みんな中国のことを聞きたいって言うていたから、今度機会があれば是非来て下さい」

「僕もさほど中国のことを理解してないです」

「林君がS社の中国展開で相当頑張ってるって夏美から聞いたよ」「仕事だから頑張らないといけないからです」

「中村君も君のことをよく褒めたよ。落ち着いて、日本のことも理解していて、将来すごく有望な好青年と褒めていたよ」

「それは恐縮です。そこまで褒められると、逆に立場がなくなります」

「林君のご両親は夏美と付き合っていることはご存じなの？」定夫が確認してきた。

「一応伝えております。特に反対されたことは言われてなかったです」

「それはよかった」

「うちは自由放任の家庭なので、基本的に口を挟むことはしません。むしろ、早く孫の顔を見てみたいとうるさく言われています」

「どこの親もみんな一緒な」

「話が変わるけど、林君みたいに一人で外国で仕事し生活するって大変だろうな」定夫が林に聞いた。

「大変とか、寂しいとか、そういったことを気にしたらたぶん上

海に帰っていたと思います。ほとんど考えてなかったんです。それだけです」

「それは強いよ。今の日本の若者はそれを欠けていたから、外国に出たがらない」

「子どもの時から、競争に強いられ、自分が頑張らないと誰も助けてくれない環境の中に成長したから、とりあえず頑張ってみて、結果が後で考えようという性格は身についたんです」

「一人っ子政策で教育に非常に熱心と聞いたけど」

「僕の生まれた時、まだ一人っ子政策が始まったばかりの時です。今は競争がもつと激しいです。姉の子どもを見たら本当にかわいそうです。今小学校2年生、学校以外、塾が週五回、ほとんど遊ぶ時間はありません。僕の時はそのまではなかったけど、あらゆることに競争意識を持たないといけなかったのが事実です。よく中国人は自己主張が強いと言われたけど、中国では自分で主張しないと完全に無視されるんです。日本はその逆で主張しなくてもそれなり考慮されてくれるから」

「林君も日本に慣れるまで相当苦労したって夏美から聞いたけど、本当なの？」

「それは本当です。空気が読めるまではかなり時間というか、そういうことは頭で理解するのではなく、身体が覚えないうまく行かないみたいです。山本七平の「空気の研究」を読んでかなり衝撃を受けました。いい意味でも悪い意味でもこの本は私の人生に大きく影響してしまいました。後は大学の学部の4年間、今から考えればかなり役立ったと思います」

定夫は頷きながら林の話聞いていた。

「大学の時、どうだった」定夫が興味津々に林に聞いた。

「当時、同級生に相当の与太者と見られていたでしょう。僕は知らなかっただけ。ゼミの同級生と喧嘩もしていたし、一人で行動したがるし、自信満々だし、今考えればかなり恥ずかしくなります。でも、そうした壁にぶつかる経験がなければ今S社では働けないと

思います。僕も中国人の考え方が分からないけど、日本人の考え方は相当特殊なモノだと思ったことは何回もありました」

「僕も日本の考え方が分からないから、想像ができないけど、相当な葛藤があったに違いなかっただろ」定夫が林に相槌を打った。「日本の生活を慣れるために、中国人のアイデンティティを捨てなければいけないかと何回も真剣に悩みました。今は中国人のアイデンティティを横に置いて、日本のルールに従って、みんなとうまくやっています。日本の良いところと悪いところを落着いて判断できるようになりました。でも、時々そうはいかないときもありますけど」

「林君はたいした者だ。日本人として恥ずかしく感じるよ」定夫がかなり感心した。

「文化も歴史も違うから、考え方が違うのが当たり前だと思います。それぐらいはだれでも理解できるけど、？に入ったから？に従えと頭越しにいわれると、そうはいかないのも人の常です。身に染みるほど経験しました。本を読むのが役に立つけど、やはり失敗の経験がなければ身体で理解できないです」林は初対面の夏美の父に、心に込めた思いを蓋の外されたように語った。

「日本は村社会だとよく言われるけど、中国は？」

「日本は村社会で、中間集団が非常にしっかりしていて、例えばトップが無能であってもそれなりに動くようになってます。中国はそういった中間集団がほとんどありません。異民族の侵略と内乱がほぼ200年に一度のペースで大混乱をもたらしていたから、中間集団が形成できなかったでしょう。日本では中間集団がしっかりして社会の安定をもたらし、平時が強い民族だとすれば、中国では危機に強い民族だと僕は思います。四大文明が残っていたのが中国だけで、さらに、歴史上の帝国がそのままの形で残ったのも中国だけです。アメリカとロシアは歴史の浅い大国は別です。高度の文明とか、官僚制度がしっかりしていたとか、それは単に自画自賛にすぎないと思います。簡単に言うと、勝てない相手に土下座することでしょう。」

四つ熟語で言えば「臥薪嘗胆」してチャンスを待つということかも知れません。元であれ、清であれ、50年ぐらいすぎると漢民族の国に逆戻りになりました」林は一気に自分の持論を話した。

定夫が完全に納得されたようにずっと頷いていた。林はちよつとビールを飲んでつづけて言った。

「危機に強い分、平時がごちゃごちゃになっています。経済学の専門用語で言えば、「ルーズ・カップリング」あるいは「疎結合」です。ルールが無視したり、自己主張が強いだったりするのが、ここからくるではないでしょうか。日本は安定であるが、流動性やアクティブに欠けています。中国はごちゃごちゃした分、アクティブに富み、みんな自分のために必死に考えています。日本人は自分が先進国だから、上目線で中国人をみたりして、逆に中国人は悲惨な近代史の歴史経験や過去の戦争の記憶で被害者意識というか、ルサンチマン的な発想で日本と西諸国を観ています。どっちもどっちだけど、具体的な利益に絡むと、いろいろとトラブルが生じてしまいます」

7・2 初めての挨拶 其の2（前書き）

林がグラスのビールを一口飲み、一息して言い続けた。

「中国人を考える時、「家族」の概念が非常に重要になります。

中間集団が弱い分、家族の絆が非常に強いです。さらに、その延長での友人関係が生きる上に非常に重要になります」

7-2 初めての挨拶 其の2

林がグラスのビールを一口飲み、一息して言い続けた。

「中国人を考える時、「家族」の概念が非常に重要になります。中間集団が弱い分、家族の絆が非常に強いです。さらに、その延長での友人関係が生きる上に非常に重要になります」

「日本でも家族を大事にするような社会的慣習があるけど、中国とどう違うだろう？」定夫が林に聞いた。

「例えば、僕は兄がいて、彼とは普段仲が悪く、それほど交流もないとします。もし兄が何かの事業を始めるとき、「お前、お金があるだろ、兄弟だから、出してやれ」と親に言われると、出さなはいといけないのが社会的な通念になっています。社会的なセーフティネットがほとんどないし、中間集団も存在していないから、家族がその代わりになったり、親戚や友達を含む擬似親族による「関係」のネットワークで身を守ったりするしかない。この属人的な関係がセーフティネットの役割を果たしている一方、社会の腐敗や癒着の原因もなっています」

「ちよつとむずかしいな、やはり文化は林君が言ったようにそう簡単に理解するものではないだろう」定夫がちよつと消化不良になった。

「説明下手ですみません」

「その分、林君みたい人がどうしても必要になるじゃない。中村君が君を褒めるのも納得できるよ」

「それは褒めすぎです。追え込まれて体得したモノだから、運命というか、宿命的なモノかもしれません」

「それを全く理解せず、いや理解しようとしてせず中国に帰ってしまう者の方が多いじゃない。悪意はないけど、日本人も決して理解しようとしなからね」

「できることなら微力を尽くすつもりですが、僕も臆病なところが

あるから、お父さんみたい理解していただける者なら言えますけど」
「なるほど、実際の生活や仕事を絡むとそうは簡単にいかないと思う。でも、是非林君が日本に残ってほしいな。じゃ、乾杯しよう」
定夫がグラスを持ち上げた。

「乾杯！」林もグラスを持ち上げた。

「パパ、堅苦しいことは今日はここまでしてください。今日は林君がはじめてうちに来られたからもっと楽しい話しよう」台所から出た夏美のママが来て、林に言った。

「林君みたい、30才そこそこでここまで物事を考えてる若者は僕、会ったことはないよ」定夫は林を褒めて、席を立った。

「夏美がここまで変わったから、大した人物じゃないとできるわけないでしょう」直美が未来の娘婿をじっと見つめながら微笑んでいた。

「それは、それは」林は夏美の母に見つめられ、ちょっと恥ずかしくなり、俯せながら言った。

「アキ君、夏美が一人っ子で甘く育てられ、かなり間抜けのところがあるから、いろいろと教えてあげて」

「ハイ」急に「アキ君」と呼ばれて、林はちよつとビックリした。
「それに、アキ君も時間があれば気楽に遊びに来てください。日本に両親と親戚がいなくてしょう。遊びに来てください」

「ありがとうございます」林はそれしか答えがなかった。

夏美が料理を持ってきて、林の横に座った。

「私の悪口を言っていたの」夏美がママに聞いた。

直美が微笑んだだけで、答えようとしなかった。

「そんなことはないですよ。夏美をしきりにほめていたよ」林は仕方なく答えた。

「本当」夏美が幸せそうに笑っていた。「私の両親っていい人でしょう」

「もちろん、そうと思います」林は内心もそう思った。

「二人が結婚とか考えていたの？」直美が急に林に質問した。

夏美は微笑みながら、上目で林を見て片手で林の手を握り、何も言おうとしなかった。

「まだ、4ヶ月しか付き合ってたから、もうちょっと二人理解し合った方が良くないかと思えますけど」林は突然やってきた質問にどう答えるか、戸惑っていた。

ちょうどその時、定夫が席に戻ってきた。直美は片手がグラスを持ち、片手が定夫の手を組み、少女のように幸せそうに言った。

「私達も付き合って半年で結婚したね。パパ、そうだね。残り物同士だったね」

「ハイ」定夫は顔が真っ赤になって、恥ずかしそうに返事した。

「二人がまだ若いから、焦ることはないよ。ゆっくり考えればいいよ」定夫が空気を変えようと言った。

「そうね、またゆっくり考えてみよう」夏美もすかさず相槌を打った。

「考えてみよう」苦しい状況に追い込まれた林はやっと一息できた。

この夜はずっと和やかな雰囲気だった。林も久しぶりに家族団らんに癒され、結構沢山のお酒を飲んでいた。

7 - 3 帰り道（前書き）

「夏美の性格がかなりお母さんに似てるね」 帰りの道に、見送って来た夏美に林が聞いた。

7 - 3 帰り道

「夏美の性格がかなりお母さんに似てるね」帰りの道に、見送つて来た夏美に林が聞いた。

「そうでしょう。よく言われる」夏美が満面の笑顔で答えた。

「お母さんとお父さんは仲が良いね」

「二人は当時珍しく共働きで、ママが55才まで働いた。ママが仕事やめるまで二人はよく喧嘩していた。ママは家事が下手だし、パパは仕事人間だし、私を甘えるけど、基本はほったらかす。今は凄く仲がいいらしい。一緒に買い物とか行くようになった。パパが定年でもう一度恋愛したってママが言ってたよ」

「お母さんは面白いね。先、いきなり、「アキ君」って呼ばれたよ。別にいいけど、かなりビックリしたよ」

「あれは天然、天然だろ。気にしないで。ママ、財布が何個なくしただろ。現役の時、結構ばりばり新聞記者をやっていたらしい。ママがどういうふうに仕事したか、私とパパは本当に想像できなかった」

「間抜けな娘をよろしくってお母さんに言われたよ。この点も似ていたなあ」

「そんなことも言ってたの。全く」

「でも、夏美は良い家庭で育てられていたよ。羨ましい」

「アキの家庭が悪いって想像できない。だて、アキがとても優しいから」

「別に愛情が欠けていた家庭でもないけど。ママがとにかくうるさかった。念仏のように怒られてたよ。親父もよう我慢したな。普通の家庭かも。夏美が結婚したら四六時中怒るの？」

「アキには怒れないよ。でも、分からないな。女って変わるわ。同級生の中に早く結婚して子供を持つ子がいるけど、家事に追われずいぶん変わった」夏美がちょっと寂しげに言いながら、身体を

林に寄せた。

「今のように期待しないけど、念仏のように怒ると、きっとパニックになるよ。トラウマがあるから」

「私のアキを困らせるようなことは絶対しないよ。心配しないで」

「でも、僕が怒ると、非常に怖いって、声がでかいし、豹変するっていわれてる」

「そのギャップが怖いな。理由がなければおこらないだろ」

「それはそう。仕事でイライラになってしまうこともあるから保証できないよ。何回も説明しても分からないとイライラするよ。その時、ビクリしないで大目に見て」

「それは誰もイライラするけど、大目に見るよ。子供の時、さんざんパパとママに怒られたから、ビクリしないよ」

「ちよつと聞きたいけど、夏美のパパは学生運動に参加したの？」

「学生運動は参加してなかったけど、前は社会党の党員だったよ。拉致事件があつて、社会党を辞めたらしい。もう政治がこりこりだと言つて、今は政治活動など一切してないよ」

「なるほど、それで、パパは僕のことをどう思っていたの」

「パパがアキをほめたよ。こんな若者が見たことがないって言つてたよ」

「困るな。家庭的な男は自分も分かるけど、ここまで褒められると逆にプレッシャーになつてしまうよ。期待値を下げてもらえるかな。」

「パパとママはずつと息子がほしかったけど、アキを息子にしたいつて」

「それは」

「結婚して今の実家の近くに住めばアキのS社も通勤範囲だし、子供の面倒も見られるし、すぐ会えるから」

「何かいろいろと考えてるな。結婚しなければって、ちよつと引くな」

「ただ言ってるだけ、気にしないで」夏美が言いすぎたと感じて

すぐに付け加えた。

「もし結婚すれば夏美のパパとママのような家庭を築こうな」
夏美がかなり感動した。

「これから、アキのところに行ってもいいの？」夏美が恥ずかしそうに聞いた。

「僕も来てほしいと思うけど、パパとママはどう思っの。よくないじゃない」

「先、ママに言ったよ。行きたければ行けばって」

「パパとママが結構進歩的な。着替えは持ってるの」

「この前にアキのところはまだ残ってたから」

「そうか」

二人は林のアパートに向かった。

林と夏美は付き合ってから始めて結婚のことを口にした。林は奈々子のことがあってなかなか結婚のことを考えたくなくて、自然に避けていた。今日の夏美の家族を見て、夏美と結婚しても悪くないなと思った。夏美は林に気を使ってなるべく結婚のことを言わないようにしていて、林が結婚のことを言い出したから内心結構嬉しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8031o/>

秋雨

2011年5月27日14時36分発行